
JETBLACK-P.D.G-

蘇芳ちゃん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

J E T B L A C K - P ・ D ・ G -

【Nコード】

N 3 5 5 8 Y

【作者名】

蘇芳ちゃん

【あらすじ】

罪には相応の罰を

そして、罰を与えたものには相応の報酬を
循環することなくまた辿る

罪を犯した者咎人

そしてそれを裁く“ワレラ”

どちらもまた、醜怪な存在なのだろう

1（前書き）

斬ります死にます殺します

作者の考えがところどころに含まれており、不愉快さを感じる可能性が高いかもしれません

戻るなら今でしょう

それでもいいと言うならどうぞ見てやってください

そして痛烈な批判なり、作者を悦楽に浸らせる感想なりを書いていつて下されば幸いです

考えが含まれているとは申しましたが、基本的に思ったまま思いついたまま書いたものなのでそこに意味があるかは私にも不明ですでは前書きはこのあたりで終えて、どうぞ稚拙な文ですがお楽しみ下さい

“ 人が人を殺すことを良しとしないのは、同種族であり、理性の持ち主であり、法律の枷に縛られているからである。 ”

野生の熊なんか人が人を殺したとして法律に裁かれることはない。なぜなら違う種族だからだ。

殺処分された場合、それが死刑だと言うかもしれないが違うね。人間の場合、殺害方法にも依るが・・・1人くらいこの世から天に送ったところで死刑になることは少ない。

他人の権利を蹂躪したにも関わらず、やった側の権利は保護される・・・いやそんな下らないことはどうでもいい。

人は殺せば終身刑を科せられるが熊に終身刑を言い渡す馬鹿はいない。

つまりだな、誰かを殺したかったら。

「ランクを一つ、上げるか下げる。」

そうすれば、我らを縛る枷の一切は金の鎖から、腐りきった鉄の針金に変化する。

さあ、下げようか、上げようか。

S・A「上げるのは、自身の魂を昇華し神さんに近づく。下げるのは、自身の魂を落とし野獣に近づく。ふーん・・・。」

OZ「どうだ？」

S・A「いやどうって言われても。えー・・・上はナイト・・・“Knight”と“Nighting”のダブルミーニング。下は・・・

B、U、I、T、e？」

OZ「BUITe、バイトだ。“Buy”と“Bite”、買うと噛み付くを合わせた造語だよ。」

S・A「噛み付くつてのはよく分かる。野獣は野生に従い気の向くままに噛み付き喰っちまう。」

OZ「人は零、神は正、野獣は負。買つてでもプラスにしたいのさ。」

S・A「成る程。」

OZ「それでお前はどちらになる？ナイトは基本的に刀や光を好む。BUITeは自らの力と闇を好む。」

S・A「ははは。随分カッコつけてるよな。嫌いじゃないが。」

OZ「・・・ただ、どちらを選んだとしても、咎人を十人殺せば零になる。そうでない者を殺せば一発で殺される側に転向だ。・・・ふむ、しかしお前の場合ワレラに加わる理由が理由だからな。姫に仕え、護つて生きていたいなら、お誂え向きなのはナイトだ。」

S・A「あんたが押し付けた理由だろうが。・・・ふーむ、じゃあ取りあえずナイトでいい。もうこの暗い部屋に居るのも飽きた。」

OZ「おいおいしつかりしろよ。やることはしつかりやつてもらうしとちれば殺す。それだけは覚えておけ。」

S・A「分かつてるつて。さあ始めてくれ。いや始めよう。俺は上げる。」

OZ「よろしいでは始める。そして始まる。」

突き詰めるのは正義の殺人

目には目を、歯には歯を、殺しには殺しを

殺されたいからお前は殺す

罰とは言わない

制裁であり死刑

我は成す我を成す
墮落の騎士の下に誓いを
私は殲滅します

OZ「では頼んだぞS・A。」

S・A「あいあい合点承知。それより聞きたいんだがこの本はなんだ？」

OZ「“ワレラ”に関する説明書とでも言っておこうか。ナイトとBUITeでそれぞれ違う。よく読んでおけ。」

S・A「オーライ。」

こうして俺はワレラのナイトになった。

ワレラとは罪を犯したくせに相応の犠牲を支払わない奴にそれを払わせる部隊。

と言っても、それは腕を折ることであつたり殺すことであつたりとまちまちな支払いだが。

ワレラはナイトとBUITe二つのクラスに分かれている。

これ以上進化することもなければ増加することもない。

ネットゲじやあるまいしそんなことになるわけないか。

クラス毎の説明は追い追い記されていく。

一人の咎人を殺す毎に経験値を得る。

十人殺せば只の人間、もとい零に戻り再びクラスを選択出来る。

その際経験値は受け継がれる。

ここで一つ破らない方がいいルールを教えてやろう。

咎人以外の人間を殺した場合、貴様はまだ咎人へと転身を遂げる。

一般人を手にかけることだけはするな

S・A「・・・うむ。分かつただけどさ、大体なんで俺が選ばれたか、未だに理解できねえんだが。」

OZ「お前が選ばれた理由は簡単、お前の罪の中に正義が含まれていたので。」

S・A「あれにか？そう思うってんなら脳外科医と知り合いになっただ方がいい。」

OZ「ふ。幸福の形は塵ほどある。それもまた然りだ。」

S・A「幸福を塵と重ねるってのはどうかと思うね。で、結局復活・・・じゃねえ輪廻は再び俺に廻ってくるのか？」

OZ「働き次第だろう。貴様が次の死を迎えるまでに咎人を10人狩れば再び乗れる。出来なければそれまでだ。」

S・A「あつそ。で、俺の護衛対象様はどこに居んのよ。さっさと行きたいんだが。」

OZ「お前の街だよ。良かったな勝手知ったる場で。」

S・A「新西市しんさいしね。」

OZ「くれぐれも頼んだぞ。連絡は必要な時にこちらからする。」

S・A「あいよ。じゃあ行ってくる。」

E・NE「来い流星群。貫き、拘束しろ。『ミッター・ミナリス千刃の谷』。」

ドドドドドドドドドド！

千の刃が大地に降り注ぐ。

そこにいる人を、影を、大地に縫い付けるために。

T・E「グレアアアアアアッ！『体内鋼鉄』！」

剣の対象である人物の体が鋼鉄と化す。

ガンガンガンガンガン！

襲い掛かる全ての剣を弾いていく。

・・・ふん。

BUI TEが使った『体内鋼鉄』はまだ分かる。

咎人を殺す時に役に立つだろうからな。

だがナイトの“千刃の谷”せんじんのたにはどうだ。

咎人を殺すのにあんなモノ使う必要はない。

咎人なんてけつたいな名前が付いてはいるが、結局ただの人間だからな。

ま、目の前で起きている様なことを想定してのことなんだろうが。

E・NE「……よし死ね野獣。速剣一閃。」

T・E「ア……ガ……。」

早いな……。

BUITeの後ろに回り込んだナイトが紫電一閃、獣の体を斬り裂いた。

T・E「ア……。」

バシユン。

獣は灰に、ナイトは光り消えていった。

E・NE「どうだ？」

消えてなかった。

E・NE「見たところお前もナイトみたいだな。しかも見習いだ。

だが、クラス選択は正解だ。良かったな。」

S・A「……は？」

E・NE「もしお前がBUITeなんて獣人を選んでいたらこの場で終わりだったぞ。」

S・A「なんでだよ。」

E・NE「俺はあんなモノをワレラと認めないからだ。……ふ、ついでに言えば同胞を浄化した方が経験値もよく上がる。」

S・A「それについては何も言わねえよ興味ないし。浄化されても文句言えねえし。」

E・NE「ふん、まあこれから宜しく頼む。俺はE・NE。」

S・A「S・A。」

E・NE「覚えておこう。」
バシユン。

今度こそ光の残滓を残しE・NEは消えた。

新西市。

都会でもなければ田舎でもない。

中途半端だが住み心地はそれなりにいい。

住めば都とも言うがな。

ワレラが集中する地でもある。

何故かと言えば犯罪者、咎人が多いからだ。

その癖質の悪い、言ってしまうえば狩るのにつまらない奴らばかりなのだ。

S・A「そのせいで同胞狩りがはかどってるわけか。アホらしい。」それを率先してやっているのが、ナイト。

BUITeは獣に近いせいか本能に従い生きている。

そしてワレラの本能は咎人を殺す、もとい浄化することだ。

だからBUITeの方から同胞に戦いを仕掛けることは滅多にない。

ナイトは、昨日会ったE・NEみたいに下等を良しとしない連中が多いらしい。

ナイト同士で戦ったりもするとか。

S・A「・・・まあそんなことどうでもいいか。俺の最優先任務は咎人を殺すことじゃないし。」

OZに押し付けられた任務とはある人物の護衛。

どうもそいつは犯罪者を寄せつけるフェロモンみたいなのが出てるようだ。

冗談だけだ。

とにかく、街を出歩けば万引き犯から殺人犯までついて来るらしい。なんともまあけつたいな体質だよ。

殺されかけたのは両手両足使っても数えきれないほど。

誘拐された回数ともなると、100回を超えてるとかなんとか。

今までよく生きていられたもんだ。

生き抜いてこられたのにもちゃんと理由がある。

そいつもワレラだからだ。

今のクラスはナイト。

今までの経験数、ナイト10回BUITe10回。

詰まるところそいつは、咎人を200人殺している。

自分から寄ってきたアホ共をな。

S・A「俺より強い奴に護衛なんて必要ないだろ馬鹿らし。」
やらなきゃ殺られるからやるんだけど。

S・A「・・・はー、高校か。久しぶりだ・・・最悪。」

S・A「転校生の阿部^{あへ}左^さ宇^うですよろしく。」

先生「はいよろしく。じゃあ阿部君は窓際の一番後ろの席に座ってくれ。よし授業始めるぞー静かにしろお前ら。」

・・・ち、なにが悲しくてまた高校生なんぞやらなきゃなんのだ。
指定された席に向かう中、好奇の視線を浴びせられまくる。
非常に不快だ今すぐ帰りたい。

机に鞆を放り着席。

前を向くとそれに習ってこちらを見ていた奴らも前を向いた。

あーアホくせえ。

学内でまで護衛なんてやり過ぎだろクソ。

「よろしくね阿部君？」

右隣の女が話し掛けてきた。

S・A「・・・こちらこそよろしく——」

『それともS・Aと呼んだ方がいいのかな？』

S・A「・・・成る程お前が、T・O・・・だっけか？」

T・O・・・『こちらこちらー。私と同じ様に話さない。やり方分からない？』

S・A「・・・？」

首を捻るとT・O・・・は、はあとため息を漏らしやがった。
なんだってんだよ。

T・O・・・『OZから説明書貰ったよね？読んでない？それともそこだけ覚えてないとか？』

S・A『そんなこと言われても覚えてなきゃ答えようがないだろ・・・。』

T・O・・・『あら出来てるじゃない。』
え？

なにがだ？

T・O・・・『ワレラの人同士は、そうねテレパシーみたいなものが使えるの〜。』

そついやそんなようなことが書いてあつた気がする。

T・O・・・『話したいと思う相手に自分の意思を送る。そうすれば伝わるわ。ほらなんか言ってみなさいな。』

S・A『・・・あーあーマイクテスマイクテス。』

T・O・・・『そうそうお上手ねー。』

S・A『んで、お前の名前は？』

T・O・・・『大城妙おおしろたえよ。大城でも妙でも妙ちゃんでも妙ちんでも呼び方はなんでもいいよ。』

S・A『じゃあ妙。』

T・O・・・『なにかな左宇君？』

S・A『お前本当は幾つなんだ？』

T・O・・・『出会つてすぐのレディーに聞くことじゃないね左宇君？見たままが私だよー。17歳、高校2年生。』

S・A『冗談だろ？』

それで20回零になるなんて有り得ない。

T・O・・・『嘘でもなきゃ冗談でもないよ〜。』

S・A『・・・お前その歳でなにやったんだよ。』

T・O・・・『そうね。これから守られるんだし、私に対する理解は

深めておくべきね。7歳の時に殺したの父親を。」

S・A「そうか。」

T・O「詳しく聞かないの?」

S・A「喋りたいなら喋ってくれ。俺は授業を受ける。」

T・O「そ。じゃあまたお昼休みにでもゆっくり話しましょ。」

S・A「ふー。」

T・O・・・「こらこら。高校生が煙草なんて吸っちゃダメでしょー。」

S・A「ばーか。俺は20歳なんだよ。」

体は17の時のに変えられているが。

T・O・・・「それでもよ。大体煙の臭いを纏いながら教室に行ったらどやされるわよ。」

S・A「喧しいなあ。“我は成す我を成す”。」
光が一瞬瞬く。

S・A「はい。ナイト化すれば一瞬できれいきれい。」

T・O・・・「詰まらないことに使うわねー全く。」

S・A「合理的使用法と言ってくれ。さ、そんなことよりお前を護衛しなきゃいけない理由を教える。」

T・O・・・「OZからなにも聞いてないの?」

S・A「奴は言った。俺を浄化した時にな。“崇高なる輪廻に乗りたいか?ならば誓え。護ることを。”ってな。その護る対象がお前さんとしか聞いていない。」

T・O・・・「にやるほどーそれ殆ど聞いてないじゃない面倒ねー。

まあいいわ私の事だし。なんでか知らないけど私は咎人に好かれてるのね。」

S・A「ああそれも聞いた。」

T・O・・・「なら先に言つてよー。それでね、それ自体に不満もなければ不足もないのね。咎人は殺されてなんぼだからねー。」

・・・ふむ、思ったより狂った女みたいだ。

T・O・・・「そんなことないよ心外ねー。」

S・A「・・・心読めるのか。」

T・O・・・「まーねー。確か56人目で覚えたのよ。零の状態でも

使えるの。私に対する考えじゃなきゃ読めないけどね。」

S・A「普段のテレパシーの強化版みたいなもんか。」

T・O「そうね。でね、寄って来る連中を殺^やることなんて造作もないんだけど、ちよつとした問題があるのよ。」

だから俺がこうして来たんだろう。

T・O「日月火水木金土で構成される一週間。そのうち一日だけ正にも負にも成れない日があるの。いつそうなるか分からないから厄介なのよね。」

S・A「ふーんそりや面倒だなご愁傷様。」

T・O「ありがとう。そんなわけで貴方が護衛に選ばれたのねご愁傷様。」

S・A「ありがとう。なんたってそんな面倒なことになったんだ？」

T・O「こればかりは仕方ないのよね。君にだってあるでしょ特性？」

S・A「・・・まあな。これっていつまで続くの？」

T・O「護衛？さあ？OZの気が済むまで〜とか？」

S・A「それはどれくらい掛かるんだよ。」

T・O「分かんないね。」

S・A「・・・。」

いつまでも知れないくだらない任務に俺は興じないといけないのか。

S・A「・・・ま、いいか。」

別段やりたいことがあるわけでもあるまいしな。

キンコンカンコン。

T・O「予鈴ね。さあ戻りましょ。・・・うふふ。転校初日から学園一キュートな大城妙ちゃんと一緒にお昼摂ったなんて知られたら嫉妬に狂った輩に殺されちゃうかもね〜イヤーン。」

S・A「・・・死んでろアホ。」

T・O「死ぬのは左宇君だよ。待ってー！」

・・・静止。制止。止まり動かない。零は無力。正は動作負は動作。
“ストップ”

S・A「・・・！なんだこりゃ。」

T・O「来たみたいね！早速。しかも同胞が。」

6時限目の中盤、黒板を叩く音が止まり、ノートを走る音も止まり、俺が落とした消しゴムも宙で止まった。

所謂空間停止状態ってやつか。

そんな名称あるか知らんけど。

S・A「今日は戦えるんだろうな？俺はつい先日ワレラになったばつかだぞ？」

T・O「だいじょーぶよー。ぶよぶよー。私の勇姿をその目に根性焼きしてあげる。」

S・A「アホくさ・・・ん？」

遠くでキラリと光が一つ。

ガン。

それが剣だというのは学校に突き刺さってから理解した。

光が百。

更にこちらに向かって来る。

T・O「千刃の谷」ね。甘いし、ぶっ殺したくなる雑さだわ。

ズガガガガガガ。

学校に次々と剣が刺さっていく。

S・A「お、おいおい。教室壊れるし人間も死ぬんじゃないか！？」

T・O「だいじょーぶ。“ストップ”内で動けない奴は死にもしなければ壊れもしない。Create剣。」

ギャンッ！

ギャンギャンギャンギャン。

妙が襲い掛かる剣の内、俺と妙に確実に当たるであろう物だけ弾く。
T・O・・・「つまんない。ちゃっちゃんと来てくれないかな。」
どうせ雑魚なんだろうけど。」

S・A「た、確かにな。“千刃の谷”で勝てないと理解出来てないから来ないんだろうし。」

T・O・・・「そゆことね・・・もう飽きた。私の力を見つめたまま蒸発しろー。燦燦煌煌さんさんしゅつしゅつ突き刺す光“スレイ・ライ・サントエク”。

「
妙の右手から鋭い光が放たれる。

光の軌跡が未だ放たれていた剣を熔かし、元を貫く。

T・O・・・「・・・死んだね。」

S・A「呆気なつ。こういう時のお約束はまだ生きているか、もつと強い奴が不意打ちを仕掛けてくるかだろ。」

T・O・・・「前者は確実じゃないよ。殺すと言ったら殺すし、蒸発させると言ったら蒸発させる。でも後者はありえるかもね。」

S・A「なんでだ？」

T・O・・・「静止。制止。止まり動かない。零は無力。正は動作負は動作。“ストップ”はそれなりにこなしてないと使える呪文じゃないの・・・で、お出ましのようね。」

S・A「そのようだ。Create剣。」
背後に生じた気配。

この威圧感 isNew西市に来てすぐ感じたモノだな。

「まさか、こんなに早く再会するとは思わなかったぞS・A。」

S・A「はん。俺もだよE・NEとやら。」

俺の目の前でBUITEを殺したナイトだった。

T・O・・・「左宇君E・NEのこと知ってるんだ？」

S・A「ああ知り合いさ。」

E・NE「その通りなのだよ獣騎士。」

獣騎士？

T・O・・・「はい。私がナイトもBUITeもやってるからよ。こいつはBUITeを毛嫌いしてるからねー。」

E・NE「その通りだ誇り低い獣騎士よ。」

T・O・・・「ち、鬱陶しいわね全く。」

E・NE「S・Aよ。騎士成り立ての君が、こんな獣騎士などと一緒に居ては穢れが移る。私と共に来たまえ。」

S・A「お前は気に食わないし妙を護衛するのが俺の仕事だ。お前に着いていく理由はない。」

E・NE「ふ、それを命じたのはOZだろ？そんなもの聞く必要ない。」

S・A「なんでだよ。得た報酬の分働くのは当然だ。」

サビ残はしないが。

E・NE「殊勝な心掛けだ殺したくなる。」

T・O・・・「全くね。」

S・A「・・・アホやってんじゃねえよ。どうするんだ妙？」

T・O・・・「勿論殺るよ。」

E・NE「同感だな。殺す。殺す殺す殺す。正義の下に殺戮。騎士の名譽に於て殺戮。殺戮の下に殺戮。魂の蒸発。体の昇華。死の頌歌。^{うた}集え裏切り指輪は点す。“ベルンズ・ニー・グリング”。」

T・O・・・「マジ？」

E・NEの手に刀身が深紅の剣が出現する。

ジークフリートのグラムだな。

E・NE「ついでだ。好みは流血。迫害の姫。反感する精神。天に召します最後の血。“BLOODY-MARY”。」

グラムの刀身が更に紅を増す。

T・O・・・「あんたさー10周してもないのに強くなりすぎ同胞殺しすぎでしょ。」

E・NE「同胞？笑わせるな。獣と騎士が同じ種族なわけがないだろっ？。」

に。巢くわせ蓄え喰らい尽くす。悪魔の剣。死を運び生とす。“ボスディア・ラ・グロアディ”。」

E・NEの紅い剣に対し、妙が召喚したのは黒い刀身の剣だ。

E・NE「ふん。流石は野獣だ。名も無し誇りも無しのような剣を召喚するなんて。」

T・O・・・「黙りなさい。」

E・NE「ふん。」

沈黙を覆うさらなる沈黙が場に浸透する。

二人の間に火花が散っているように見える。

いや・・・実際に散っているじゃん。

T・O・・・「まだまだ遅いねE・NE。」

E・NE「く・・・!」

仕掛けたのはE・NE、それをT・O・・・が楽々受け止めている。

武器の強さで言えば妙のグロアディの方が劣りそうなものだが・・・。

T・O・・・「幾つもの屍を越えてきた。この子は悪魔。強さを増しているの。」

E・NE「ぐう・・・!」

T・O・・・「早く終わりたいでしょ?」

E・NE「なに・・・?」

T・O・・・「終わらせてあげる。来い流星群。常世の闇をここへ。貫き、拘束。死を運び生とす。“千刃の谷・グロアディ”。」

E・NE「な!?!」

幾千もの悪魔の剣が降り注ぐ。

E・NE「ぐ!おのれえっ!」

ギャンギャンギャンギャンギャンギャン。

S・A「おっと・・・。」

とばつちりが激しい。

E・NE「ぐ!ぐ!ぐ!ぐ!ぐ!おのれ組み合わせだと!?!ふざけるなよおお!」

ギャンギン。

T・O．．「ふん。スピード上げるわ。」

E・NE「なにい!？」

ズガガガガガガガガガガガ!

E・NE「う!ぐあああああ!」

E・NEが段々後退していく。

更に弾ききれない悪魔の剣がE・NEの体を抉っていく。

E・NE「ぐおおおおお!」

右脚に一撃、悪魔の剣が食らいついた。

T・O．．「．．．ストップ。」

E・NE「ぐ．．．!」

T・O．．「とどめが欲しい?」

E・NE「ほざけ!来い流星群。貫——」

T・O．．「馬鹿。グロアディ。」

E・NE「ぬあっ．．．!」

剣が三本、全てがE・NEの心臓を貫いた。

E・NE「あ．．．ぐがあ．．．ごふっ。おえ。」

E・NEが口から鮮血と泡を噴き出す。

E・NE「おの．．．は、は、は．．．ぐ。」

T・O．．「喧しいわね。ついでに汚い血で汚さないでもらえるか

しら?ここは神聖な学び舎なのよっ」と

ザシュツ。

一閃、E・NEの首が宙を舞う。

E・NE「．．．必ず。必ず．．．だ。」

バシュン。

・・・とまあ俺にとって激動の一週間が過ぎていった。
うむ、はしよりすぎだな。

もう少し詳しく、俺が死んだ辺りから思い返そうか。

一週間前、つまり4月4日、俺は父親を殺し、そしてワレラの誰かに咎人として殺され、浄化された。

そして4月5日、5日だと思うが、OZに呼び出された。

そして『崇高なる輪廻に乗りたいか？ならば誓え。護ることを。』

なんてことを言われた。

黒い部屋に連れていかれ、ワレラについての説明を受け、二つ返事でワレラに成った。

言っちゃなんだが犯罪者を戒めるだけの楽な仕事だからな。

けど騙されたよ全く。

同胞同士の争いはあると聞いてはいたが、頻繁に起こるなんて聞いていない。

まさか新西市に行つてすぐ同胞の戦いを見る羽目になるとはね。

昨日死んだE・NEと名も知らぬBUITEとの戦い。

今の俺はBUITEには勝てそうだったが、E・NEと戦えば確実に死んでいたな。

結局戦うこともなかったが。

その二日後、高校に入り護衛対象であるT・O・・・、もとい大城妙に会い、俺以上に強い妙に何故護衛が必要かを聞いた。

そして顔も知らない雑魚からの襲撃を難無くいなし（妙がだけど）、その後のE・NEの襲撃も苦無く破りついでに（妙が）殺した。

その後は普通に授業を受け、そして下校。

そのまま二日無断欠席をし、今土曜日で学校は休みというわけである。

T・O・・・である。じゃないでしょあんばんたん。」

S・A「あんぽんたんて……。」「
可愛いな言わないけど。」

T・O「……ありがと。」

S・A「なんも言つてない。二日の無断欠席なんて大したことじゃない。理由があつたしな。」

大体卒業した高校をまた2年生から受けなきゃならんとかどういう冗談だよ。

T・O「……一日目はあんたが街を探索したいから休んだ。私も巻き込まれてね。」

S・A「ふん。護衛対象にボディーガードが着いていくのは当たり前。逆も然り、だろ?」

T・O「……聞いたことないわよ。ガードに着いていく護衛対象なんて。」

S・A「二日目はお前が強制零になったせいだろ?」

T・O「……別に学校に行つたつてよかったのに。」

S・A「お荷物抱えて街に出るなんてやなことだ。」

T・O「……はー全く。」

S・A「それに、お前ん家に居るだけで面白いからな。」「
罨ばつかで面白い。」

空き巣なんかもよく入るらしく、それ用に罨を張っているらしい。ただ……。

S・A「あれ本気で殺しにかかつてるよな。」

T・O「……当たり前でしょ。乙女の箱に忍び込むなら死ぬくらいの覚悟はしてなきゃ。」

S・A「……今まで何人が犠牲になつたんだ?」

T・O「……死んだのは7人。重軽傷者多数つてとこね。」

恐ろしいな乙女の箱。

S・A「それにしてもよ、昔から同胞同士の殺し合いはあつたのか?」

T・O「……そうね、私を知るだけで100人くらいはそれで死ん

でるわね。あゝでも30人くらいはまた輪廻した奴だからー。」

S・A「・・・そのうち何人殺した？」

T・O「・・・E・NEを合わせて5人くらいかなゝ覚えてナツシングー。」

S・A「思ったより倒してないんだな。」

T・O「あんたは私をなんだと思ってるのよ。」

S・A「すまんすまん。」

T・O「確かに新西市はワレラが多いからE・NEみたいに同胞殺しに走る奴も多いわ。でも全員が全員そうじゃないから安心して。BUITeが襲ってくるなんてことは殆ど有り得ないし、ナイトもナイトを狙うことは少ないから。」

S・A「あーそれについてなんだが。同胞殺しが多いのはなににも密度が濃いから、ってだけじゃないだろ？」

T・O「・・・そうね。同胞の方が経験値が高いから。」

S・A「それは知ってる。」

確かE・NEが言ってた。

T・O「・・・んゝまあいつか。どうせいつか知ることだし。あのね、同胞は咎人10人分なの。」

S・A「ん？だから経験値が高いんだろ？」

T・O「・・・あら。それすら聞いてないのね。全くOZの奴は・・・。」

・・・？

T・O「・・・咎人を10人殺すと零に戻るわけなんだけど、その時貰えるモノがあるの。」

S・A「あー・・・大体予想がつかないそこまで言われると。」

T・O「・・・言っちゃうと魂の補充なのね。」

T・O「・・・咎人を10人殺すともつかい輪廻に乗れるの。また10人殺ればもつかいって具合に増えてく。」

S・A「そして同胞を殺しても、か。」

T・O・・・「そ。クラスチェンジする必要がない奴にとっては同胞殺しのが楽なわけね。」

楽、か？

S・A「全然楽じゃないと思うんだが。」

T・O・・・「君みたいな新人さんを狙うのが常套手段なのよ。ね？
楽でしょ？」

S・A「嫌な手段だ。およそ騎士道精神なんかとは似ても似つかない精神構造の奴しかいないのかよ。」

T・O・・・「分かってないわね」。ナイトよりBUITeのがよっぽど綺麗よ？」

本能に従うことがか・・・。

T・O・・・「そーよ。ただ綺麗なのは美しいって訳ではないということじゃあないってね。」

S・A「・・・心を読むな。」

T・O・・・「いいじゃない。私に対して投げかけた心の声なんだから」。

S・A「はー。まあいいや。食後の運動がてらちょっと歩いてくるよ。」

T・O・・・「夜だよ危ないよ？着いてこうか？」

S・A「大丈夫だ。危険を感じたらすぐ逃げる。“我は成す我を成す”。」

T・O・・・「そー。いつてらー」。

日曜日深夜1時。

暗い夜道を歩いていく。

特に面白みもない散策だ。

当てるわけでもなく、目的があるわけでもない。

俺みたいな出無精がわざわざ目的もなく散歩なんてするわけがない

んだけど。

理由はある、あの嬢ちゃんの前に居たくなかったからだ。いたたまれないというかなんというか。

とにかくあれ以上あいつの前に居たくなかった。

今あいつは強制零でもなんでもないからほかつといても平気なんだろうが。

S・A「・・・ふー。危険に晒されているのはむしろ俺の方が。」

“千刃の谷”と“ソードフィッシュ”。

俺が今使えるのはこの二つだけだ。

咎人相手ならこんなもん必要ないが・・・同胞相手だとまずいだろ
うな。

BUI Teに絡まれることは少ないらしいけど・・・ん？

・・・ああそういうことね成る程。

俺が歩いている道の脇から男が一人曲がってきて、俺と同じ進行方向へと歩を進め始めた。

つまり俺はそいつの背中を見ながら歩いている訳だが・・・。

『空き巣』7回、『引ったくり』15回、『窃盗』細かいものも入れば数え切れず。

俺達ワレラは人間が犯した罪を見ることが出来る。

そしてある一線を超えていれば、“咎人”と背中に大きく書かれる。今日の前に居る奴はまごうことなき屑でありそれだ。

先に挙げた3つに加え極めつけがあった。

S・A「・・・コイツが第一の犠牲者か。始まりとしちゃ地味だし出来ればスルーしたいが・・・。」

男「おい！なんやてめえごちゃごちゃ後ろでブツブツ言いよってゴ
ラアッ！」

S・A「・・・日本語で喋れよネアンデル北京ピテクス。」

男「ア？んだよてめえは？！殺されてえのかゴラア？！」

S・A「そう・・・極めつけは『殺人』1回。」

Create 剣。

右手に名も無い剣が召喚される。

男「な、なんやワレ！やろうつてんか！？」

S・A「アホぬかせ。初戦だ、飾るためにせめて痛みがないように殺してやる。」

男「はあ……？お、おいなんだよてめえは……来るなよい！や、やめ……！？」

……ち、この野郎……。

ズバツ。

S・A「すまん。嘘は吐かない主義だったが、気が変わった。お前は苦しんで死ね。」

男「は……はひは……たた助け……。」

頸動脈と手首の動脈、ついでに脚の腱を斬ってやった。血はちびちび出るように斬りはしたが、出血が止まる事はない。歩いて逃げようにも腱が切れてりや歩けない。

S・A「ま、贖罪だと思って甘んじて受けなおっさん。それがお前の犯した罪の報いなんだから。」

男「あ……うわあわ……まっまっ……待ってくれ……。おねがだたずいで……。」

S・A「喧しい……。お？今日はお客がたくさんのだ。」
さつき男が曲がってきた道から次はパンチヤクザが出てきた。

男2「ワレえ一体どこのもんに手え出したか分かつとるんか？」

……ヤクザのパシリだったのかあいつ。

S・A「縄文人くらいの知能レベルは持ち合わせてるようだなあんた。」

男2「……嘗めたことぬかしとると一族郎党皆殺しやぞ？」

S・A「は。面白いやつてみるよパンチピテクス。」

男2「おんどれ……指じやすまさん。」

S・A「……ちまちました罪は重ねていない。やったのは『殺人加担』4回、『見殺し』7回、……『殺人』5回か。」

男2「な……！なにもんやキサマ！」

お、ヒ首を抜きやがった。

ホントにあんなもん持ち歩いてんだおもしろ。

S・A「俺は単にお前を殺す者だよ。さて祈りな。そして好きな神さんを思い浮かべる。そうすりゃ死んで幸せだろうよ。」

男2「ぬ、ぬかせえや！」

ヒ首がこちらに向かってくる。

実際はヒ首をもったパンチがだけど、パンチよかドスの危険でありパンチは危機感を持つ相手に相当しない。

S・A「・・・使ってみるか。来い流星群。貫き、拘束しろ。“千刃の谷”。」

ドスッ。

男2「・・・は？」

呆けた男2の顔と突き刺さった剣。

どうやら状況を理解できてないようだ。

鈍い野郎である。

ドスドスドス。

S・A「・・・ほら思い浮かべるよ？」

男2「が・・・あ・・・！」

S・A「ふん。」

ズガガガガガガガガガガ。

元はコンクリ、アスファルト？

どちらか知らんが砕け礫となり宙を舞う。

壊されたことに対する復讐か、俺に向かってくる礫も幾つかある。

が届く前に粉塵と化し、俺の目を若干痛めることしか出来ない。

男2、死亡もとい浄化完了。

ネアンデル北京ピテクスは・・・こつちも絶えてるな。

S・A「・・・はあ送るか。バイバイ。」

その言葉と共に二つの死体は塵と化し、夜空に舞い上がっていった。

TV「本日未明新西町16番地で道路が破壊されているのを近隣住民が発見。警察に通報しました。警察は、ここ最近起きている道路の破壊行為や土手が何かで削られる事案と関係があるか捜査中です。」

「シャコシャコシャコシャコ。」

あー・・・昨日のは俺のせいだっけか・・・？

これは見つかったら逮捕されるんだろうか。

だとすると困るなー、一応前科無しで通ってるからなー。多分見られていた。

大体あんだけズガガガやってれば誰でも気づくだろう。

少なくとも5人くらいの視線は感じていた。

全部が全部普通の人間かは分からないが。

T・O・・・これやったの左宇君？」

S・A「ああ。絡んできたヤクザ二人を送ってやったんだよ。」

T・O・・・そ。」

S・A「興味なさ気だな。」

T・O・・・無いもん。ワレラが相手なら心配くらいはしてあげけど人間相手なら心配するだけ無駄だし。」

S・A「まあ確かにな。」

T・O・・・君はなにか感想ないのー？」

S・A「なんのだ？」

T・O・・・初めて、でしょ？」

S・A「ああそういうことか。特になにも。感動もなきや罪悪感もない。」

別段これが初めてというわけでもないし。

更に言うならまるで無関係の人間だからなにか感じる方がおかしいと思う。

俺は人間じゃないんだし。

S・A「ん？なんだよその顔は。俺の返答が不服か？」

T・O「そーじゃなくてね、たった数日で心の中隠すの上手くなっちゃったなーって。」

S・A「ぱーぱーじゃ詰まんないだろ？」

T・O「むーそれはそうなんだけどねー。」

S・A「はいはいこの話はお仕舞い。で？今日はどうすんだお前。」

T・O「今日はねー日曜なの」

んなもん知ってる。

T・O「取りあえず歩く？咎人呼んで稼ぐ？」

S・A「あー・・・歩くのはいいがその後はいらんかな。」

T・O「そう？でも寄ってきたらあげるからその気でいてね。」

「

S・A「・・・あいよ。」

はー。

T・O「んーおいしー。」

S・A「よく食うな。太るぞ。」

T・O「・・・体重なんてナッシーング。でしょ？」

S・A「まあな。」

ベンチに座りクレープを食べている妙。

その脇にはクレープの包み紙が山となっている。

俺達は太らないし食わなくても死なない。

ワレラは一度この世から消えているので当然本体は消失している。

なので誰かに与えられた欺体^{ぎたい}で生活している。

欺体は姿形全てを自分で設定出来るので、身長2m体重30kgなのに筋骨隆々なんて体になることも出来る。

詰まるところ今の俺達には身長も体重も存在しないんだ。

T・O・・・「ある意味楽だけど人間離れしすぎよね。」

S・A「へえ。お前人間ばい方がいいのか？」

T・O・・・「んにゃゝそんなことないよ。ただなんでこんな特別製にしたのかなと思って。」

そりゃ狩る方だからだろと言おうとした時気づいた。

黒服の厳つい奴らがぞろぞろとこちらに向かってくるのに。

T・O・・・「んー？なにあの人達？」

S・A「昨日殺った二人があいつらの同業者だったんだよ。」

T・O・・・「へえ・・・みんな『殺し』やってるみたいね。」

正面から向かってくるのは7人。

『殺人』や『殺人加担』などがぶかぶか浮かんでいる。

左を見ると4人、右から6人、後ろから10人。

S・A「合計27人か。俺にも咎人が寄る体が与えられていたとはな。」

T・O・・・「どう考えてもお礼参りでしょ。良かったねー。2つの魂とお釣りが貰えるよ。」

S・A「・・・やらないかならんのか。」

T・O・・・「嫌なの？」

S・A「いや・・・。」

まあ仕事だからいいか。

男「おい兄ちゃん。」

ベラベラと話していたら27のヤクザに囲まれていた。

男「ちよつと面あかしてもらおうか。」

T・O・・・「あ、私の剣使う？というか使ってくれないかなー。経験値溜まるし。」

S・A「ん？別にいいけど。」

T・O・・・「おっけー待ってねー。」

男「おい無視してんじゃねえよ！」

S・A「あー？なんですか？」

男「くっ・・・てめえ・・・！」

男2「おおお落ち着いて下さい兄さん！ゴリアガキ！ちゃんと話聞かんかい！」

T・O「んゝなにがいいかしらね。」

S・A「別になんでもいいさ。」

・・・あららなんか銃をちらつかせてる奴も居るよ。

ここ街中だぞ？

男「おどれ昨日家の舎弟を殺りやがった奴だな？」

S・A「なんのことでしょうか？」

男「しらばつくれんじゃ——」

T・O「決めたー！“我は成す我を成す”。」

男「ぬおっ！？」

いきなり光った妙にビビったのかヤクザ共が若干俺達と距離を置いた。

T・O「サン・ピエールの齒。サン・パジールの血。司教サン・ドニの髪。サント・マリアの衣の布端。12勇士の魂。自傷の剣、されど壊れず眠りに就く。“デュランダル”。」

妙の右手に大剣が召喚される。

刀身180cm、幅20cm、鈍い紫色の刀身に黄金の柄。

ロランの歌に出てくる“デュランダル”それである。

T・O「はい。」

S・A「おう。」

ズシツとくるがけして重いわけでもなく、手にしっかりフィットする。

男3「な、なんやこいつら！？」

男4「馬鹿野郎！うるたえるな！あんなもん模造刀に決まっとうろっが！」

男5「男2も喚いている。

そりゃいきなりこんなもんが出てきたらビビるわな。

男「成る程・・・そっちがその気なら容赦せえへん。」

S・A「街中でチャカぶつ放すのか。今日日のヤクザは自由だね。」

男「じゃかあしいわ！」

喧しいのはてめえだよ屑。

спан。

ポトツ。

S・A「お!？」

超使いやすい!

男「え?な・・・なななな!?!があああああ俺のつうだが
あああつ!？」

わああ喚きながら目の前の男は地に落ちた自らの腕を拾おうとしている。

が、両腕とも肘から先が無いのだから広いようがない。

S・A「いやーすごい使いやすいんだけどこれ。」

T・O・・・『使い勝手』が付加されてるからね。初期で手に入る特性にしては便利なのよねーそれ。」

S・A「『使い勝手』?」

T・O・・・後で教えるよ。それよりビビっちゃってる他の咎人も
さつさと殺っちゃいなよ。」

妙の言葉に、目の前で起きた惨劇に言葉を失っていたハゲ共がビク
ンと反応した。

S・A「そうだな。」

デュランダルを横薙ぎに軽く振るう。

男2とかその他5人の上半身と下半身が分離。

下半身は立ったまま上半身が地面にずり落ちズチャリと音を起てる。

S・A「はいお大事にと。」

次いでデュランダルを振り上げ男8を縦に真つ二つにする。

S・A「Create 剣。」

左手に出現させた2本の剣を男9、男10に投げつける。

断末魔なんてあげられない。

だって喉を貫くんだから。

男11「なんやねんこれ・・・!がつ!?!はっ・・・!」

男11の背後から大剣を突き刺す。
痛いだろうな。

そのまま下に下ろし切り抜くと内臓が地面にバタバタと落ちてきた。
T・O・・・「うわーソーセージだよ左宇君。結構グロい殺し方するねー君。」

S・A「ほつとけ。」

あと16人か。

S・A「もうここまでやつちまったんだから“千刃の谷”とか使っていないか？」

T・O・・・「別にいいよー。」

S・A「オーケー。来い流星群。貫き、拘束しろ。“千刃の谷”。」

男「が・・・あく・・・。」

S・A「あーらまつ。まだ生きてるよこの人。」

腕を切り落としてから3分くらいしか経ってはいないが、まだ生きてるとは驚きだ。

ちなみに生きていて、かつこの場に残っているヤクザはコイツだけ。他は殲滅し既に送ってしまった。

S・A「さ、思い浮かべろよ。お前の信じる神さんをな。」

男「っ！？やめ・・・止めてくれ・・・。」

S・A「・・・阿漕な商売の“つけ”だ。甘んじて受ける屑。」

振り上げたデュランダルを振り落とし・・・頭が斬れた時点で男は塵と化した。

S・A「27人浄化。」

体内に何かを感じる。

T・O・・・「それが魂だよ。暖かいでしょ？」

S・A「二つの補充か。クラスも変わってないらしい。ま、戦闘の途中で零にされなくてよかったぜ全く。」

T・O・「そうね。じゃあさつさと此処を離れましょ。見物人も沢山居るみたいだしね。」

周りを見渡せば確かに人がちらほら見える。

S・A「そういや大丈夫なのか？俺達普通に顔見られてるんだけど。」

T・O・「なによーそんなことも知らないの？正か負に成ってる時の私たちの顔はぼんやりとしか分からないの。カメラなんかじゃ完璧に認識出来ないわ。つまり私たちが捕まることなんてない。心配事はそれだけかしら？」

S・A「あ、ああ。」

T・O・「じゃあ帰りましょ。同胞も居るみたいだし長居はむよー。」

P4・D1「ふむん。」

E2・D1「どう思うよ兄。」

P4・D1「いやそれよりだな。」

E2・D1「は？」

P4・D1「いやこういうのってお約束だよな主人公的な奴の戦いを影から見て意見するっての。」

E2・D1「あー確かにね。」

P4・D1「戦ってた奴は新人だな一緒に居たのはT・O・。だったがあいつらどういう関係だ？」

E2・D1「仲間なんじゃないこの前のE・NEの襲撃ん時も一緒に居たみたいだし。」

P4・D1「そういやそうだったな別段おかしなことじゃないが珍しくはあるな。」

E2・D1「まあいいんじゃない放っておけば俺達の邪魔する訳でもなさそうだし。」

「 P 4 ・ D 1 「 そうだな “ 俺 ” の邪魔をしなきゃ邪魔じゃないからな。」

T・O・・・「殺す。殺す殺す殺す。正義の下に殺戮。騎士の名誉に於て殺戮。殺戮の下に殺戮。魂の蒸発。体の昇華。死の頌歌。集え裏切り指輪は点す。“ベルンズ・ニー・グリング”。ダーインの遺産。生き血を。魔剣の真価。溶かし吸い尽くす。“ダーインスレイヴ”。サン・ピエールの歯。サン・パジールの血。司教サン・ドニの髪。サント・マリアの衣の布端。12勇士の魂。自傷の剣、されど壊れず眠りに就く。“デュランダル”。常世の闇をここへ。常夜に。巣くわせ蓄え喰らい尽くす。悪魔の剣。死を運び生とす。“ボスディア・ラ・グロアディ”。」

ジークフリートの剣グラム。

魔剣ダーインスレイヴ。

シャルルマーニュの12勇士の一人ロランの剣デュランダル。名も無き悪魔の剣グロアディ。

S・A「そうそうたるメンバーだがこれが一体なんなんだ？」

T・O・・・「さっき言った特性について説明してあげよーと思つてね。Createで創る剣とかと違って、ちゃんと呪文を練る剣は学習するの。咎人を浄化したり、同胞を殺したりすると経験値を積んでくのね。」

S・A「ほうほう。それ普通は説明書に書いてくことじゃね？」

T・O・・・「召喚呪文を覚えると追記されるよ。左宇君は今2周したよね？もしかしたらもう使える呪文ふえてるんじゃないかな？」

S・A「ふむ。“我は成す我を成す”。」

説明書を取り出し、ナイトの項目をぺらぺらめくる。

“千刃の谷”・・・“ソードフィッシュ”・・・

S・A「お、“たるんかっぺTarunkappe”と“BLOODY-MARY”が追加されてる。」

T・O・・・「あーじゃあまだ経験値溜まる物はないね。んじゃー

引き続き説明するね。まー簡単に言うと、咎人とか同胞を殺つちゃうとレベルが上がって、そうすると特性つてのがつくの。で、今出したグラムはLv2、ダインスレイヴもLv2、デュランダールがLv4、グロアディがLv5なのね。」

S・A「レベルだけ聞くと強いのかどうか分かんないな。」

T・O「何人倒すととかは説明省くねめんどくさいから。Lv1の特性が『折れにくさ』、Lv2は『使い勝手』、Lv3は『重さの無視』、Lv4が『形状無視』、Lv5が『追撃?』。」

S・A「・・・はあ?」

T・O「・・・特性の詳細もめんどいから割愛ね。」

S・A「・・・まあ大体分かるからいいけど。」

自分で確認すればいい話だしな。

T・O「・・・そうね。早く使えるようになるといいね。」

S・A「他人事だな。その通りではあるが。」

T・O「・・・なんなら私を殺す?魂補充50あるから余裕よ?」

S・A「そんなことしたら輪廻から即効外される。」

T・O「・・・だろうね。」

S・A「・・・。」

T・O「・・・喋る話題無くなつたね。」

包み隠さず言い過ぎだろコイツ。

S・A「そうだな。明日は学校だしそろそろ寝るわ。」

T・O「・・・私も寝よ。じゃあね。明日が零の日じゃないことを祈ってお休み。」

くらいくらいくらい。

太陽の届かない地上の楽園。

地上なのかどうかは知らない。

楽園なのかどうかは知らない。

分かるのは魂の抛り所であり環の一環であるということだけだ。
暗いが静かではない。

そこかしらから嘆きや悲痛な泣き声が聞こえる。
それとは対照的な明るく談笑する声が聞こえる。

此処は魂の抛り所。

地の獄に行く者は前者。

天の国に行く者は前者。

どちらも輪廻の環から外れる老いた魂。

輪廻の環に取り込まれた者は後者。

E・NE「・・・遅い。」

後者に混じり剣を片手に立つ一人のワレラ。

悪魔の剣により貫かれた彼は一度抛り所に戻ってきた。

魂補充は19あり輪廻に乗り続けるのは簡単である。

だが現世に戻るためにはそれなりのプロセスも踏まなければならない。
い。

それを華麗にスルーする強者もいるが、彼はそれ程の強さは持ち合
わせていない。

また割り込みする度胸も無ければ、これまた強さもない。

だから手持ち無沙汰に時を過ごしている。

時間を浪費、もとい消費したおかげか、彼の前に並んでいた魂は消
え、今受付している目の前の魂が消えれば次は彼の番である。

ただ目の前の魂が今までの魂の倍程時間をとっている。

E・NE「一体なんだコイツは・・・。」

コイツが座ってから既に1時間は経っている。

今すぐコイツにグラムを刺してしまいたい衝動を抑えるのを止めた
くなってきた。

“千刃の谷”の一小節目を詠唱したくもなってくる。

・・・

・・・

・・・

ああ、もうダメだ。

魂の背後に近づき言^{つか}ってやる。

E・NE「おい問^{つか}えてんだよさつさとしろ。」

D・W／－「でな、その時私は言^{つか}ってやったんだ。お前が私のために千本目にな^{つか}ったらどうだ？つてな。」

受付「ほーう。そんな逸話が隠^{つか}されていたとは。」

・・・・・。

受付と目の前の奴はまるで関係ない話をしていた。

E・NE「おい！」

D・W／－「んー？なんだ己は？」

E・NE「順番待ちだよ！問^{つか}えてんだからさつさと終わらせる！」

D・W／－「終わらせると言^{つか}ってもな。終わらせる事柄が私にはないのだから終わらせようがない。」

E・NE「はあ？なに言^{つか}ってんだお前？俺はさつさと現世に戻^{つか}って奴を狩^{つか}りたいんだよ！」

D・W／－「ふむ・・・また今度にしたら——」

E・NE「ふざけんなよ。」

グラムを相手の首筋に当てる。

受付「お、おい待てよE・NE。」

E・NE「喧^{つか}しいてめえは黙れ。」

イライラし過ぎて仮面が外れてきた。

E・NE「おら、最後尾に行きたくなかつたらさつさと退^{つか}け。」

受付「ばつかやろ・・・！」

D・W／－「・・・まあいいじゃないか受付。おい下郎、年上であり、格が違^{つか}う相手への口の聞き方を私が直々に教^{つか}えてやろう。」

E・NE「喋^{つか}るんじゃないよ。状況把握も出来ないのか？」

D・W／－「ふー。私が思^{つか}っているより己は格が下^{つか}のようだな。」

E・NE「なんだと・・・ッ！」

首筋に冷たい感^{つか}触。

これは・・・日本刀か・・・？

D・Wノ-「祢々よ、コイツは斬るに値するか？」

E・NE「祢々・・・？あ、もしかして“祢々切丸”ねねきりまる・・・？」

D・Wノ-「ほう、知っていたか。まだ使えないだろうになかなかどうして博識だな御主。」

そんな・・・。

“祢々切丸”を詠唱無しで召喚するなんてありえない！

一体コイツはなんだ・・・？

D・Wノ-「わだちだいこ轍醍醐、と名乗っておこう。」

E・NE「な・・・！」

D・Wノ-「御主程度の心など容易く読めるわ。聞えているのだったな。よろしい、ならば己が後ろに行け下郎。」

ドツドツド。

E・NE「・・・え？」

三本の“祢々切丸”が体を貫いた。

“千刃の谷”とのユニオン・・・？

いや違う・・・だ、だってこの攻撃は・・・！

D・Wノ-「特性『つるぎだけ剣岳』は初めてか下郎？よかったな、魂に余裕があれば次に生かせる。今はまた、最後尾に戻れ。」

E・NE「ぐ・・・。」

この短期間に・・・2回も失うとは・・・。

朝、喉が痛くなることが無くなった。

歯を磨かなければ払拭されることのない朝の不快感が消えるということがこれ程幸福なことだとは思っていなかった。

S・A「・・・。」

洗面所に立ちながら思う。

何故寝起きの気怠さは消してくれなかったんだ。

口内の不快感を消し去るのも重要だがこっちも重要だ。

大体軟体なのに血が出たり寝起きが悪いとか意味が分からない。

栄養摂取の必要が無く、身長体重も無い。

中途半端に人から離れてるな。

パシャパシャと水で顔を洗う。

冷たいけどなんか違うんだよな。

いやこれはワレラとか関係なく・・・。

T・O・・・「冷たいよね」。井戸水を汲み上げの浄水しーのなんだけど温度は変えずなのよ。夏はいいけど冬なんて凍りそうになるよ。」

S・A「いや温水も出るけどこれ。」

T・O・・・「私は温かゝいを使わない主義なの。」

S・A「・・・あっそうですか。」

T・O・・・「まー直ぐ綺麗に出来るから洗う必要ないんだけどね。」

「
と言いながらバシャバシャと顔を洗う妙。

今更だが俺達は同じ家に住んでいる。

妙が生前住んでいた家で、父母は共にいない。

そして超広い。

そして畏いっぱい。

うら若い女・・・もとい乙女と二人なんてやばいんじゃないか？と思うかもしれないが、そんな感情は全く湧かない。

ワレラだからなんなのかとは分かんが、まあどうでもいいことだから気にもならん。

人間の環から外れた奴が考えることではないからな。

T・O・・・「なーによー。こんなに可愛い女の子と屋根の下で生活してるのに襲おうとも思わないなんて君不感症かEDなんじゃない？」

S・A「アホくさ。俺の体は既に消えてんだから不感症もクソもないわ。」

T・O・・・「えーそうかな？」

S・A「はいはいそろそろ準備しないと遅刻するぞ。」
T・O「あはは“ストップ”あるから余裕よ。」
・・・ダメな奴だ。

ワイワイガヤガヤ斯く斯く然々。

S・A「・・・。」
喧しいなあ。

窓際の一番後ろの席はいい。

俺に話し掛けるためにはわざわざ後ろを向かなければならないし、
喧騒の環から外れてもいる。

T・O「ねえねえ左宇君。」

・・・右隣りのコイツが居なければ更に静かになるのに。

S・A「なんだ？」

T・O「先生遅いね。」

S・A「・・・。」

T・O「あれ？起きてる左宇君？」

S・A「・・・。」

T・O「あゝ“んなこと言わなくても分かる”ね。確かにそう
なんだけどさー、しようよ言葉のキャッチボール。」

早く来い来い先公。

T・O「先生だよー。」

S・A「・・・。」

何気にキャッチボール出来てんじゃん。

T・O「私は口から言葉を発するキャッチボールがしたいの。」

S・A「・・・はあ。お前も気づいてんだろ？」

T・O「まーねー。」

少々耳が良い奴なら聞こえるかもしれんが、廊下の隅の方からうちの
クラスの先公とあと二人名前も顔も知らん先公、そしてあと一人、

そいつらに囲まれている生徒が話している。

S・A「遅刻した奴を指導してるってどこか。」
でも遅刻ぐらいで三人に囲まれるか普通。

T・O・・・「かれこれ100回くらい遅刻してるからね。そろそろお祝いしなきゃ。」

S・A「誰が捕まってるかも分かるのか？」

T・O・・・「ワキュレル・ヒルデ・リュブン”。ワルキューレの一人ブリュンヒルデを召喚してるのよ常に。」

S・A「マジか。」

T・O・・・「マジだよ。ついでに言っちゃうと怒られてる人はワレラなんだ。」

S・A「そっちもマジかよ・・・。」

「マジマジ大マジ。」

S・A「・・・は？」

俺の前の席、さっきまで俺に背を向けていた奴が顔を向けている。

S・A「おいおいいいのか妙？普通にワキュなんとかと聞かれたっぼいぞ？」

T・O・・・「問題ナッシングなのよねーこれが。」

S・A「は？」

「だって僕たちも同族だから。」

今度は妙の前の席の奴がこちらに顔を向けていた。

S・A「同族って・・・。」

「そうつまりワレラだよ。」

俺の前の奴がテレパシーぽいので語りかけてきた。

「大丈夫戦おうとか考えてないからT・O・・・と同じで僕らの邪魔をしなけりゃだけどね。」

S・A「へえ。じゃあ取りあえず名前を教えてくださいよ。」

P4・D1「俺はP4・D1太宰たさい・ペルソナだ痛い名前とか言つなよ大体これ本名じゃないし。」

E2・D1「僕はE2・D1太宰秀一しゅいついちこれ本名ね。」

S・A「ふーん。ま、よろしくペルソナに秀一。」

P4・D1「ああよろしく。」

E2・D1「よろしく。」

P4・D1「よろしくとは言うが必要以上に絡むことはない。」

E2・D1「一般生活においては友達として過ごすのもいいね楽しいし。」

P4・D1「だがワレラの方では基本的に不干涉。」

S・A「不感症？」

E2・D1「不干涉ね話の腰を折らないでよ左宇。」

P4・D1「まあそれも相互理解相互利益が伴えばその限りではない。」

E2・D1「そういうことこちらにとって有益な話を持ち掛けるのは大歓迎だ。」

P4・D1「そしてまた逆も然りそちらにとって有益な話を持ち掛けることも大歓迎そうだろ？」

S・A「あ、ああそれは確かにそうだが。」

もうちよつと切って話せんのかこいつらは。

T・O・・・「相変わらずよく喋る兄弟ね。」

P4・D1「必要なことを話すのは当然だろ？」

E2・D1「そして今話しているのは必要なこと。」

二人「ドウヤンダスタン？」

・・・ドウユーアンダースタンド、か。

T・O・・・「イツエース！ザッツライト。」

S・A「分かった理解した。だから前向いてくれ鬱陶しい。」

P4・D1「そう邪険にすんなよ左宇。」

E2・D1「そうだよこれからの長い学校生活よろしくやってこうよ左宇。」

T・O・・・「そうだよー左宇君。友達とは仲良くしなきゃね。」

S・A「・・・。」

必要以上に干渉しないんじゃないのかよ・・・。

担任「こらー席着け黙れー。ほらそこ、お約束とか言っな。」

またペルソナが口を開きかけたところで担任が教室に入ってきた。

・・・はぁ助かった。

担任「おい阿部。」

S・A「・・・なんすか？」

担任「後でちよつとこつち来いな。理由は言わんでも、分かるな？」

S・A「・・・はいはい。」

助かってなかった。

T・O・・・「災難だったね左宇君」。

S・A「・・・不公平だろ。お前だって欠席したのに。」

T・O・・・「だってー私は無断欠席じゃないもーん。」

あの後なんと生徒指導室まで連れていかれ、一時限目を消費し説教していただいた。

学生の本分とはなんなのだろうか。

P4・D1「いや根本的に左宇が悪いだろ。」

E2・D1「悪いね。」

S・A「喧しい。それよりなんでお前らも居んだよ。」

P4・D1「別にいいだろ欺体とは言え学校内かわいこちゃんランキング10位以内に入ってるんだよT・O・・は。」

E2・D1「君だけ一緒にいると不自然だし妬みの対象になるよそれを防いであげてるんだ感謝してほしいくらいだ。」

・・・ふむ、男を三人も侍^{はべ}らかすビツ――

T・O・・・「それ以上考えたら1個削るよ?」

S・A「おうなんにも考えてないぞ。」

T・O・・・「よろしい。」

首筋から剣の感触が消える。

恐ろしい女だ。

T・O・・・「なんか言っただー?」

S・A「いやなにも。」

つくづく、である。

キンコンカンコン。

P4・D1「ありや昼休み終了5分前を告げる鐘だ。」

E2・D1「なんというか寸足らずな鐘だよこれ戻ろっ。」

慌ただしい二人が慌ただしいまま屋上から屋内へと行ってしまった。

S・A「俺達ももど――」

・・・はー。

またかよ。

灰色掛かる目前の世界。

“ストップ”だ。

誰かが“ストップ”を使い時の流れを遮断した。

S・A「今日は一体誰だよ。」

E・NE「私だ。」

お前かよ。

T・O・・・あらう思ってたより遅かったわね。込んだた？

E・NE「・・・聞くな。」

P4・D1「あつれーE・NEじゃん。」

E2・D1「お久しぶり。」

・・・なんで戻ってきたんだ

お前らが来たらますます面倒になるだろ。

E・NE「な！？太宰がなんでいるんだ。」

P4・D1「はー？」

E2・D1「此処の生徒なんだからいて当たり前だろ。」

E・NE「・・・成る程。もう一つ聞きたい。なんの用だ？」

P4・D1「久しぶりに稼がせてやろうと思つてな。」

E2・D1「たまには殺らせないと不機嫌になるんだよね。」

S・A「なんだお前らが殺ってくれるのか？」

P4・D1「出血大サービスだ。」

E2・D1「黙って後ろで見てろそして思い知つとけ。」

二人「力の差をな。」

T・O・・・そーねいい機会だしそーしましょー。」

妙に促され屋上の端に移動する。

E・NE「・・・クソマジかよ。」

P4・D1「不運だなかわいそうに。」

E2・D1「心にも思つてないけどいいよね？」

E・NE「・・・殺す。殺す殺す殺す。正義の下に殺戮。騎士の名

譽に於て殺戮。殺戮の下に殺戮。魂の蒸発。体の昇華。死の頌歌。集え裏切り指輪は点す。“ベルンズ・ニー・グリング”。隠れ蓑。受け取る返り血。竜の魂。不死の騎士。終局にて墮落。ニーベルングの指環“グール・ジフ・リートシズク”。

グラムと、ニーベルゲンの歌の主人公ジークフリートが召喚された。

E2・D1「は情けないね。」

P4・D1「その程度の呪文くらい詠唱拒否しろよ情けない。」

E・NE「・・・喧しい。喧しい喧しい喧しい！殺れジークフリート！」

ジ1「ウオオオオオオ！」

P4・D1「勇ましいな“グール・ジフ・リートシズク”。」

E2・D1「威勢はいいね“ボスディア・ラ・グロアディ”。」

ジ2「・・・。」

ペルソナ達もジークフリートを召喚し、グロアディを持たせた。

しかしなんだろうか。

同じジークフリートなのになにか違う。

・・・ああ視覚的な問題だな。

E・NEのジークフリート、ジ1とでも呼ぼうか、こいつの体の周りには青いオーラのなのが漂っている。

対してペルソナのジークフリート、ジ2とでも呼ぼうか、こいつは赤いオーラが漂っている。

そういえば持っている剣もそうだ。

ジ1のグラムは赤いオーラが、ジ2のグロアディには黒のオーラが漂っている。

E・NE「な・・・。お前、その剣・・・！」

ジ2「我が二人の主、貴様では及びもつかんことを理解したな。誇りが無ければ去れ。そうでないなら、私に向けたその切っ先を断ち切るまでだ。」

ジ1「嘗めるなよ。」

E2・D1「嘗めるなと申されてもね。」

P 4・D 1「実力に差がありすぎる。」

E・N E「く・・・ああ忌ま忌ましい！何故こうもついていないんだ！」

ジ 1「主、どうするのだ！」

・・・はーん、召喚体って普通に喋るんだな。

T・O・・・「レベルに関係なく人型とか悪魔、天使なんかは喋ってくれるよ。ちゃんと自我を持つてゐるからね」面白いよ。」

S・A「あれは、E・N E側が不利ってことでいいのか？」

T・O・・・「不利なんてもんじゃないよ」。Create 剣で戦えば勝つのは多分 E・N E だけど、そんな風に戦うわけないしね。」
ふーん。

P 4・D 1「ほらどうするんだ E・N E？」

E 2・D 1「早くしないと君のジークフリートがイライラで突っ込んでくるよ。」

ジ 2「・・・。」

E・N E「く・・・行けジークフリート。」

ジ 1「了解した。援護射撃は任せる！」

ジ 2「勇ましいのは良しとするが、蛮勇は誉められたものではないな。」

ちらつとジ 2 がペルソナに顔を向ける。

P 4・D 1「殺つていいよりセツトしてやれ。」

ジ 2「仰せのままに。」

パキン、ズクツ、ズガガキンキンキン。

E・N E「・・・く。」

・・・一瞬だったな。

ジ 2 が振るったグロアディは一閃、まるで反応出来ていないジ 1 のグラムを断ち切る。

そのままグロアディはジ1の体を貫いた。

が、ジ1の背後から無数の剣がジ2を襲うべく迫っていた。

一撃二撃はジ2の足元に撃ち込まれたが残りは全て弾かれてしまった。

ジ2「・・・ふー。」

P4・D1「残念だったなE・NE。」

E2・D1「グラムのレベル死んじやったねご愁傷様。」

E・NE「・・・Create剣。」

ジ2「ふむ。戦う姿勢は美しい。敗者に成るべく歩むのもまた然り。

」

E・NEがジ2との距離を詰めていく。

P4・D1「無理するなよE・NE。」

E2・D1「そんな剣爪楊枝にしかないよ。」

E・NE「喧しい・・・！」

ジ2「美しい、とは言ったがそれは激突の瞬間までだ。そして――

」

スパン。

E・NEの剣は無いが如く断ち切られ、E・NEの体はただ少しの障害としかならなかった。

E・NE「あ・・・か・・・くつは・・・。」

ジ2「散り際こそが最も美しいのは言うまでもない。」
バシユツ。

E・NEの体が灰になり消えていった。

ジ2「主よ、終わりましたがいかがなさいますか？」

P4・D1「オツケー帰っていいよゆつくり休め。」

ジ2「承知しました。E2・D1様グロアディをお返しいたします。

」

E2・D1「んじゃねー。」

続いてジークフリートが光に包まれ消えていった。

P4・D1「さてどうだったかな左宇。」

E 2・D 1「恐れ慄いたかそれとも感動したか？」

S・A「・・・いい気はしないな。」

P 4・D 1「あれ？」

E 2・D 1「なんで？」

灰の世界に色が戻ってきた。

S・A「ほら戻るぞ教室に。遅刻すんなって言われてんだよ担任に。」

P 4・D 1「“魂の権限を私に”。」

授業中、いきなりペルソナがBUITe化した。

S・A「・・・おいおい妙。こいつは一体何やってんだ？」

T・O・「『定時連絡みたいなもんだよ。』」

P 4・D 1「Hans von Hackelberg, Hans von Hackelberg。先導の梟^{ふくろう}。嵐の通過。猟の名手猟の名犬。食らい尽くせ“ワイルド・ハント”。」

風が一瞬吹き抜ける。

といつても窓の外からではなく窓の外へ、だ。

E 2・D 1「安心してなにも人を殺しに行ったとかじゃないから“ワイルド・ハント”は基本的に情報収集とか追尾しか出来ないから。」

P 4・D 1「そういうことだ街に新しいワレラが来てないか咎人はいないかなどを調べているだけだ。」

S・A「それ、今やる必要あんのか？」

P 4・D 1「時間を見な今は13時13分この世で一番悪い時間だ。」

E 2・D 1「この時間ならきつとなにか起きるはずだ。」
どういう理屈だよそれは。

P 4・D 1「む？」

E 2・D 1『なんだって?』

S・A『独り言だ。』

E 2・D 1『まあいいや説明してやるよ。』

P 4・D 1『何故13時13分を選んだかというと。』

その後授業を聞きつつ、兄弟の声を代わる代わる聞き、たまに右隣りからの笑い声を聞きながら一時間過ごした。
……気に留めるんじゃなかった。

男「ぐ、あ……!」

S・A「はいごめんよ。悪いのはお前だ。好きな神さんを思い浮かべな。」

男「やめ……てくれ……。」

S・A「……有りがちなやり取りだが、そういうお前は命乞いされてやめたのか?」

男「うぐ……やめてくれよ……。」

S・A「もうちょっとマシな乞い方をしろよ。」

T・O「……ちよつと……まだー?」

S・A『ああ悪い。もう終わらせる。』

S・A「Create 剣。じゃあな糞野郎。祈って、贖罪でもしてりゃ救われるかもな。」

ザクツと一突き目の前の咎人の心臓にくらわせる。

男「……!ぐ、は……。」

S・A「……そんな目で見るな。」

因果応報……回ってきたただけだ、対価を支払う時が。
巡り巡って帰ってくるものに、恩なんて結局存在しない。
せいぜい復讐くらいだ。

男が灰になり消えていく。

S・A「なあ、妙。」

T・O・・・『聞いてるよ。』

S・A「いつかこれも帰ってくると思うか？」

T・O・・・『さあどうだかね。君が今殺した男がワレラに成ればありえることね。』

いつになく真面目に答える妙。

T・O・・・『君は、行為に正当性を見いだせないの？』

S・A「さあどうだかね。」

T・O・・・『。。。』

あれ？

なんか怒ってる？

T・O・・・『まあいいや。さつさと帰つといで左宇君。』

S・A「・・・？あ、ああ。」

T・O・・・『。。。苦いよ。』

男「は・・・やめろ！？」

D・W／－「ふむ。腑抜けめ。他の命を奪っておきながら己にその覚悟がないとは。」

ビルとビルの間。

左宇が咎人を殺していたビルの真反対の路地で、違うワレラが今まさに左宇と同じことをしようとしていた。

D・W／－「全く情けない。人は世代を超える毎にその性根を腐らせていった。己はその最先端を行っているようだな。さあ名乗れ。死に際に名を残す。重要なことだ。」

男「あ・・・、田澤、田澤だ。」

D・W／－「田澤か。承知した。私は轍醍醐。拠り所に行った時、私の名を出せば少しは優遇されるかもな。重ねる祢々。」

醍醐の右手にある大太刀が田澤の首を撥ねる。

D・W／－「すまんな祢々。詰まらぬことで重ねてしまつて。」

太刀が若干振動した。

D・W / - 「ふむ。確かに。また今は殺人鬼だな。」
また振動。

D・W / - 「そうか。懐かしいな二度の大戦。ふ。まあ急くな祢々。意外と近いのかもしれないのだからな。」

まだ残っていた田澤の体が灰になり消えていく。
それと同時に轍醍醐の姿も消えていた。

あ、増えてる。

昨日で30人目、零化3回、ナイト4回目、魂補充が3に、そして使える呪文に“スレイ・ライ・サントエク”と“ベルンズ・ニー・グリング”が追加された。

S・A 「・・・よし。殺す。殺す殺す殺す。正義の下に殺戮。騎士の名誉に於て殺戮。殺戮の下に殺戮。魂の蒸発。体の昇華。死の頌歌。集え裏切り指輪は点す。“ベルンズ・ニー・グリング。”」
グラムが召喚される。

赤い刀身の剣が青いオーラを纏っている。

S・A 「・・・成程。レベルは1〜20まで。0〜5は青いオーラ、6〜10は赤、11〜15は銀、16〜19が金。20が黒か・・・。」

ということは秀一が出したグロアディはLv20ってことが。

そりゃE・NEに勝ち目はないわな。

あいつが出したグラムは赤いオーラだった。

6〜10の間の剣が20の剣に勝てる筈がないからな。

T・O・・・「なーに見てんの〜ってグラムじゃん。」

S・A 「昨日でジャスト30人だったんだ。“スレイ・ライ・サントエク”も使えるようになったぞ。」

T・O・・・「へー。やっと護衛として役に立てるくらいになったね

」。

S・A「そうかな。」

T・O「……そうよ。なんなら私と手合わせする?」

S・A「いややめとく。大体護衛対象と戦うガードマンなんかこの世にいない。」

T・O「……先駆者は素晴らしいんだよ。」

それが正しいとは限らない。

S・A「……消えろグラム。さあ準備しろよ行こうぜ学校。」

T・O「……もう出来てるよ。君がグラムに見蕩れてたんでしょ
「妬けるな。」

はいはい。

今日も学校に行くべく玄関の扉を開けた。
なにも間違っちゃいないはずだったのに。
俺は死んだ。

S・A「……。」

OZ「随分早い帰省だなS・A。」

S・A「ははは厭味かOZ。どうせ見てたんだろうが。」

OZ「あれはベレト。P4・D1が召喚した超上級魔神だ。お前では目の前に出ただけで魂が消し炭になる。」

ああその通りだった。

玄関を開け、奴の姿を見た瞬間痛みは感じず、魂が燃えるのを感じた。

S・A「で、気づいたら抛り所に戻ってきたわけだ。」

OZ「せっかくの魂補充が2になってしまったな情けない。特例だ、直ぐに帰してやる。まだベレトは居るようだから少しの間臆にしておいてやる。さっさと行け。」

S・A「は?ちよつとま——」

玄関に戻ってきた。

この間約3秒。

本来なら抛り所で手続きをしなければ、いくら魂補充があっても戻
ることは出来ない。

ま、今回は特例ってことでこんなに早く戻れたんだけど。
臙体ろうたいなので妙には見えていないが。

T・O・「あんたねーいきなりなによ全く。」

ベレト「僕とて暇ではない。」

T・O・「はー？意味分かんないんだけど。」

ベレト「酔狂で来たわけではないと言っておるのだ。僕に玄関の前
で待つ趣味はない。となれば理由は一つ。小僧、貴様の胸に聞け。」
そこまで言うとはベレトという悪魔は霧の様に消えていった。

T・O・「ん？帰ってきてるの左宇君？」

S・A「おう。」

ベレトが消えた1秒後に臙の効果が消えた。

T・O・「昨日は確かになにやってたんだっけ？」

S・A「あー……。」

思い返してみる。

S・A「咎人を一人殺つたのは覚えてるよな？」

T・O・「うん。序でに人助けもねーお節介ねー。そのせいで私
のアイス溶けちゃったね。」

S・A「……それについてはすまんと思ってる。」

昨夜、コンビニにお使いに行った帰りに人の悲鳴を聞いた。

そうだな、妙は恐らく気づいても気づかず帰るだろう。

アイスを買う理由として挙げられるのが“暑い”だ。

暑いということはアイスが溶けやすいことを意味する。

なら悲鳴などに構っている暇はないのである、というのは妙の持論

だ。

俺は気になったので見に行った。

無論アイスが溶ける可能性など考慮にいていない。

何故なら俺のアイスではないからだ。

悲鳴があがった方を目指し路地裏に入ると、サバイバルナイフを持った男と腰を抜かしへたり込む男が視界に入った。

へ男「た、たたた助けてくれ！」

ナ男「頼む！助けてくれ誰だか知らんが！」

S・A「は？随分特殊なケースだな。」

腰抜かし男が俺に対し助けを乞うのは分かる。

多分ナイフ男に襲われていたんだろうからな。

ただナイフ男も助けを求めるとはおかしな話だ。

S・A「んで、どっちを助けりゃいいんだ？」

ま、助けるとすりゃ腰抜かし男だな。

ナイフ男は『通り魔』に『殺人』をやっている。

助ける義理はない。

へ男「あああああれ！あれだよあれ！」

S・A「あれ？」

腰抜かし男が指す方を見ると・・・。

S・A「召喚体みたいだがこれは・・・どっかで見たような・・・。

」

思い出せんが、まあいいや。

“我は成す我を成す”。

S・A「Create剣。よっ。」

犬みたいな召喚体に剣を投げつけてやる。

逃げることなく剣に当たり召喚体は消えていった。

S・A「・・・しかしあんなもん怖くもなないだろ？」

へ男「奥にでかいのが居たんだよ・・・。それよりあんた今のは・・・

・？」

ナ男「へ、へへへ。なんだっていい。俺を見たからには生かして帰

しは――」

S・A「アホみたいな文句言ってるじゃねーよ。ほれ腰抜き男、さっさと行きな。」

ヘ男「へ？あ、ああどうも？」

ナ男「え？お、おいちよつと！」

S・A「はい待った似非殺し屋。お前は罪を償っていけ。」

ナ男「は？意味がっ！？」

取りあえずナイフ男の腹に蹴りを入れる。

ナ男「ぐ、あ・・・！」

S・A「はいごめんよ。悪いのはお前だ。好きな神さんを思い浮かべな。」

・・・って感じだったな。

S・A「それ以降のことはお前も知ってるだろ？」

T・O・・・んゝもしかしてさ、その召喚体のおでこに“ぺ”って書いてなかった？」

ぺ、だと？

んー・・・あ。

『時間を見な今は13時13分この世で一番悪い時間だ。』

そう言つて奴が召喚した無数の犬っころ。

その額に・・・。

S・A「・・・成る程繋がった気がする。」

学校に行ったら問いただしてやる。

P4・D1「お前が悪いんだぜ？」

E2・D1「僕らの邪魔をしたんだから。」

S・A「だからって殺すか普通？昨日までの和氣藹々とした関係はなんだったんだ。」

P4・D1「力の誇示は時に必要だそれが例え友人関係にある者に對してでもな。」

E2・D1「それに僕らの力を見られて幸運じゃないか魂一つでなら安いもんだ。」

P4・D1「ベレットを使役するのだって楽しいんだ。」

E2・D1「ホント感謝してほしいくらいだよ。」

こいつらはまあ・・・。

S・A「もういい分かった。」

P4・D1「大体お前が邪魔しなきゃ良かったんだよ。」

E2・D1「“ワイルドハント”の一体くらい倒すのは構わない痛くも痒くもないからでも狩りの邪魔はダメだ。」

いつの間にか俺に對する説教になつてゐるし。

べらべら出てくる言葉を聞き流しながら窓の外を見る。

・・・そう、昨日の犬にも、ペルソナの出した犬にも間抜けな“ペ”が踊つていた。

S・A「・・・あいつもつくづく律儀な奴だな。」

T・O「ホントね、もう気持ち悪いレベルよ。」

また“ストップ”だ。

昼飯時になると必ずある奴が襲撃にくる。

なんというかもう構つてほしくて来てるんじゃないかとも思える。

S・A「・・・。」

T・O「来ないわね。」

屋上に居るのは分かつてるはずだが・・・。

「が・・・は・・・！」

S・A「今の、聞こえたか？」

T・O・・・校庭の方ね。行きましょ。 “魂の権限を私に”。」

S・A「あ、おいちよつと待てよ！ “我は成す我を成す”。」
屋上から飛び降り校庭を目指す。

さっきの呻き声は・・・E・NEのか？

S・A「・・・！」

校庭に転がっている人影が三つ。

実際には全員人ではなく、ワレラが一人に召喚体が二人だ。

T・O・・・ブリュンヒルデとジークフリート、それにE・NEね
」。

召喚体は両脚が斬られているだけだが、E・NEは右肩から斜めに
斬られ血が溢れている。

E・NE「く・・・来るのが遅いぞT・O・・・。」

T・O・・・「あんた最近よく死ぬわね。」

S・A「で、誰に殺られたんだ？」

復讐なんてしてやらんが狂った奴を特定しておくのは大切なことだ。

E・NE「侍・・・侍だ・・・。 抛り所で談笑出来るレベルの・
・く・・・。」

侍？

S・A「妙は心当たりあるか？」

T・O・・・「轍醍醐ね。」

・・・こういう時は知らないってのがお約束じゃないのか。

S・A「で、それはどんな奴だ？」

T・O・・・「私も詳しくは知らないんだけど、この学校の三年生だ
よ。ほら、前遅刻して怒られてた奴がいたでしょ？あいつよ。」

S・A「そんな身近に居たのか。」

T・O・・・「まー襲ってきたりはしないだろうけどね。レベルが違
いすぎるから。」

S・A「ふーん。E・NEはなんで斬られたんだ？」

E・NE「太刀だ・・・。」

S・A「いや理由を聞いたんだが。」

E・NE「ふ、そっちか……。前に抛り所で会ってな、その時殺られたんで仕返しを……。と思ったんだがこの様だ……。」

T・O「馬鹿ね。私に勝てないのにD・W／＼に勝てるわけないじゃん。」

E・NE「……。そのようだ。く、げはっ。」

苦しそうではあるが死ぬほどではないらしい。
何故とどめを刺さなかったのだろうか。

T・O「。あいつは魂補充が1万以上あるのよ。それに武器は完ストしてるのね。」

つまり飽和してるってことかうらやましい。

E・NE「……。ん？ああ忘れてた。戻れジークフリート、ブリュンヒルデ。」

二つの召喚体は消えていった。

E・NE「しかし災難だ……。この短期間で三度も死ぬとは。おまけにグラムとジークフリートのレベルはリセットされるし……。ああクソ！ついてない……。」

S・A「おいおいなんか苦労話が始まりそうなんだが。」

T・O「。ホントね。鬱陶しい。」

……。こいつはまあ人を労る気持ちがないのね。

せめて心の中で言えればいいものを。

T・O「。ふん、ついでだから死になさいなE・NE。“ボスデ
イア・ラ・グロアデイ”。“我は成す我を成す”、“グール・ジフ・
リートシズク”。」

E・NE「大体なんで俺ばっか……。なにしてるんだ？いや、待て
なにをさせようとしている！？」

T・O「。え？言うなれば殺人かな？殺っていいよ。ジークち
やーん。」

ジ「御意。出来れば呼び方は改めていただきたいですがね。」

E・NE「また死ぬのかよ……。」

ご愁傷様。

血を見たいわけではないので校舎に向かって歩きはじめる。
スパンという気持ちいい音が聞こえた、そんな気がする。
数秒後世界に色が戻り喧騒も帰ってきた。

T・O・・・「詰まらない人。」

1（前書き）

猟奇嗜好。

いわゆる猟奇殺人が好きな奴。

なぜそんな捻じ曲がった嗜好を持つようになったのか。
分からないし、言ってしまうかどうかでもない。

ただ、それを見るのは相当ムカつく。

何故かと聞かれても分かりはしない。

・・・同族嫌悪という言葉をこれ程身を感じる存在はそういないだろう。

殺人の行く末が、実は同族嫌悪の成れの果てだなんて普通は考えない。

けれど考えてみれば分かる。

人間の同族は人間、嫌悪し殺すのだからやはりそれは、同族嫌悪なのである。

「ま、待てよ！いや待ってください・・・。」

悪男「あ？んだよてめえ？」

「あ、あのですね、死んでくれませんか？」

悪男「・・・ぷ、ははははいきなりなに言うかと思ったら。てめえこそ殺されてえのか？あ？」

「ひ！？あ、いやその・・・。」

・・・なんじゃありゃ。

気弱な方はワレラみたいだが・・・なんであんなにビビってるんだ？

悪男が犯した罪は・・・『窃盗』無数、『強姦』7回、『引ったくり』17回、『恐喝』無数・・・。

屑だな即刻死ね。

というかさつさと殺っちまえよ気弱め。

「え、えーっと・・・く、Create剣！」

悪男「うお！？刀出てきたしやべー。なにそれマジック？」

ちなみに気弱が出したのは両刃の剣であり刀じゃない。

ん・・・悪男も腰からなにか抜きやがった。

あれはサバイバルナイフだな。

こいつはつくづく屑のようだ。

悪男「へっへへ。どうよこれかつちよいいっしょ？あんたのダサ刀とはえらい違いよ分かる？これモノホンね。切れるよ痛いよ？」

どうしてああも頭の悪そうな話し方しか出来ないんだろうか。

見ていて不憫になってきた。

「な、なめるなよ・・・！うわああああ！」

悪男「は？え、ちよっ！？」

気弱がブンブン剣を振りながら悪男に突進した。
しかしどうだ。

悪男「あはははははどこ行くだよ！」

・・・目を瞑ったまま突進とはある意味勇者だな。

悪男「おらっ！」

「いっつ・・・あ切られた・・・!？」

あーあー・・・。

いくらなんでも酷すぎる。

悪男「へへへ。これくらいで許しといてやるよ。おら財布よこせ。」

S・A「許したんじゃないのかよ屑。」

悪男「・・・ん?・・・は？」

S・A「ふん。なに死にかけの金魚みたいに口をパクパクしてやがるんだ気色悪い。」

悪男「は・・・?いや、なんだ、お前誰？」

S・A「その気弱の変わりにお前を殺しに来たんだよ屑。」

悪男「・・・ぶ、マジで言ってるのそれ?だとしたら超うけるんだけど。つつかさ、てめえ俺より年下だな?口の利き方知らねえのか?あ?」

S・A「とことん馬鹿だなお前。」

悪男「あ?んだとコラア！」

「き、君！」

S・A「・・・君って俺？」

「そうだ。は、早く逃げなさい。」

こいつはなにを言っているんだ。

せつかく助けに入ってやったのに逃げるとはこれ如何に。

S・A「アホだな俺はあんたと同類だつての。」

「同類・・・どど同類、だつて?」

S・A「ああそうだ。しかもあんたよりは強いな。“ベルンズ・ニ

ー・グリング”。」

どうせなら経験値を稼いだ方がいいよな。

悪男「んだよてめえもマジック使うのかよ。超赤いなんだそれ。」

S・A「よっ。」

取りあえずナイフを弾き飛ばしてやる。

悪男「な！？てめっ！」

S・A「喧しい黙れ。好きな神さんを思い浮かべろ。」

悪男「はあ？なにいつ——」

グラムを振るい一氣に首を落とした。

「ひっ！？」

胴体がその場で倒れ、切り離された頭部は気弱の方に転がっていった。

S・A「あばよ悪男。」

指をパチンと鳴らしてやると悪男の体は灰になり消えた。

S・A「・・・さて、立てるか？」

未だにへたり込んでいる気弱に手を伸ばしてやる。

「え、あ、ありがとう・・・。」

S・A「・・・あんた名前は？」

E・C「こん、近藤栄治（こんどう えいじ）です。」

S・A「俺は阿部左宇。何時ワレラになったんだ？つと、こんな路地裏で立ち話なんて詰まらんな。何処か適当に茶店にでも行こう。」

よく考えれば俺は、いや考えなくても相当なんだろう。

S・A「んじゃま改めて、阿部左宇だよろしく。」

E・C「あえつと、近藤栄治ですよ、よろしく。」

久しぶりに握手なんてしたな。

S・A「それで、あんたはなにをやってワレラになったんだ？ああ、聞いたいてなんだが答えたくないことは答えなくていい。」

E・C「あ、いえ。助けられたんですから。えーつとですね、私は生前医者をやっていました。犯した罪は『見殺し』。救急医療の場で働いていた時、5人の患者が一度に運び込まれた時がありました。近くの工場で事故が起きましてね、一人は右腕単純骨折。後の4人は複雑骨折、内臓破裂など重傷。単純骨折の患者は他に任せ、4人

の治療に専念してありました。．．．まあ結果から言ってしまうば最初の1人だけ、死亡しました。私の診察ミスでね。」

S・A「．．．。」

E・C「それで随分責められましてね、贖罪のつもりで．．．。自殺、か。」

S・A「成る程。」

E・C「正直気乗りしませんでしたけどね。私に殺しなんて．．．。」

┐

S・A「さっきのを見れば大体分かるがな。後悔してるのか？」

E・C「いえ．．．。これが罪滅ぼしになるなら、と思っています。」

┐

罪滅ぼしね。

S・A「しかしあの様^{さま}じゃな。」

E・C「慣れなければ、とは思うんですがね。」

S・A「何度かやってはいるのか？」

E・C「あ、いえ大しては．．．。」

．．．。

S・A「そうか。まあまた会ったらよろしく。」

E・C「あ、はい今日はありがとうございました。」

コーヒー代計500円をカウンターに置き、俺は喫茶店を後にした。歪な視線を背に受けながら。

T・O「．．．お人好しね。」

S・A「まあそう言うなよ。俺の経験値になったんだからさ。」

T・O「．．．まーそーかもしれないけど。E・Cだっけ？最近来たワレラにそんな奴いたかしら。」

S・A「いちいち確認してんのか？」

T・O「．．．OZの奴が送ってくるのよ。役に立つっちゃ立つん

だけだね。」

・・・なんでこいつは――

T・O・・・「こんなに特別扱いされてるか？私が特別だからだよ。こんなによくある話よ。」

S・A「特別？お前の特性についてか？」

T・O・・・「へー鋭いね」。その通りだけど教えてはあげないよ。」

「

S・A「誰も教えるとは言っていないだろ。そんなに踏み込む気はない。」

T・O・・・「そ。いい心掛けね。E・Cとかいうのにもあまり踏み込まないほうがいいよ。これは忠告。」

S・A「あいよ。」

・・・これまた酷い殺され方だな。

転がっている死体は咎人が3人。

S・A「それにワレラが一人、ね。」

なんだろうか、俺はこういうことに遭遇する確率が高い気がする。街を練り歩いているからというのもあるし、路地裏とかそういう所を好んで歩くから確率が上がるんだろうけど。

どうやら殺した直後らしい。

出なければ消えているだろうからどちらの死体も。

つまり、ついさっきまでここに殺した奴が居たってわけだが・・・。指は一本残らず切り落とされ、右足を斬られ、左目が刳り貫かれている。

ワレラもそうやって殺されている。

相当な手練れか、ただの猟奇好きか。

どちらにしてもおかしい奴に違いない。バシユという音と共に死体が消える。

S・A「妙。」

T・O「……なにー？」

S・A「前言つてた轍醍醐、だっけか。そいつに猟奇嗜好はあるか？」

T・O「……んにゃー。あの人はねー他人を辱めたりしないよ。魂の尊厳を誰より重んじるからね。」

S・A「へえ。じゃあそういう奴に心当たりは？」

T・O「……さーねー。私そんなこといちいちきにしにゃーから。それより、今日は零の日なんだよ？早く帰ってきてよ。」

S・A「あーはいはい分かった。」

……ん。

これは……。

男「く……！」

S・A「悪いが、いや悪くもなんともないか。因果応報、支払う時が回ってきただけだ。“ベルンズ・ニー・グリング”。」

男「や、やめてくれ……！」

S・A「好きな神さんを、ッ！」

男「がつ！？あ……。」

背後からの投擲。

目の前の男の喉には刃物。

スカルペル、ランセット。

日本ではメスと呼ばれる医療用刃物だ。

それは俺の背後から投げられ、男の喉に突き刺さった。

S・A「……何しやがるE・C。」

E・C「この前の恩返し、のつもりだったんだが、気に食わなかったか？」

S・A「……。」

E・C「ああ、この態度？俺の特性は『猫被り』。相手の動かぬ優位を切り崩す楽しみは本性を隠さなきゃ楽しめない。」

S・A「成る程。用は済んだろこいつを殺してさっさと失せろ。」

E・C「止めは刺す。だが見ていて、気持ちの良いものではないぞ。」

カツカツとE・Cが寄って来る。

その手にはメス。

男「あ……く。」

E・C「苦しいだろ。もう少し苦しめ。」

E・C「が持つメスが男の手元に運ばれていく。」

E・C「先ずは、親指。」

男「……ッあああああああ！？」

男の体が激しく痙攣する。

E・C「……う！うおえ！あ、がほっ！」

S・A「な！？」

E・C「がいきなり吐き出した。」

E・C「く……、次人差し指……。」

男「あああああああ！やめ、やべろ……やめろおお！」

E・C「げほっ！がほっごほ……！」

中指、薬指と次々切っていく。

その度にE・Cはえずいている。

S・A「聞いていいか。」

E・C「っはあ、はあ……なんだ……ッ！」

男「が……あ……。」

既に男は絶叫する力を失っている様だ。

全ての指が切られ血を垂れ流している。

失禁もしている様だ。

S・A「……何故そこまでやる。お前もあまり良い気がしていない様だが。」

E・C「好きだからにッ！決まって……おえっ……！」

ぼと。

左目が視神経から断絶され地面に落ちる。

男はピクピク動いているがもう意識がないらしい。

E・C「は、は、うおえ！げば……。せ、脊髓反射……。」

S・A「……。醜い思考だ。」

E・C「なんとも言え……。！ふ、ふふふははは。こいつはもういい。“千刃の谷”……。！」

ズドドド。

アスファルトの埃が散る。

視界が晴れた時、男の体は消え、E・Cの手にはグローアデイが握られていた。

S・A「20……。」

E・C「そうだ。お前のグラムは1〜5らしいな。」

S・A「だったらどうした。」

E・C「分かるだろ。勝ち目がないことくらい。」

S・A「……。『猫被り』だったかお前の特性。」

E・C「そうだが、それがなんだ？」

S・A「いやなんでもない。お前はここでリタイアしろ下衆。」

S・A「……。ふー。」

T・O「。あー！また煙草吸ってる。」

S・A「いいじゃないか別に。」

消化しきって疲れた。

E・Cの魂補充は3578あった。

それだけの数をあれを使用して消せば疲労困憊するに決まってる。

“人の価値や尊厳なんて同族であれば無いに等しい。そうだろ左宇君。責められたものではなかったはずなのに、直接の原因を紡いだ奴が私を責めた。結果的にそれは私の死へと繋がった。許すべきで

はない。”

とかなんとかほざいて死んでいったなあいつ。
意味は分からなかったし、どうでもいい。

ただ、あいつが歪んだ要因に触れた気はする。
ただ、それだけ。

人は醜く、それこそが人であると。

俺も歪まなければ生きてはいけないのだと。

1（前書き）

膝を抱え泣く。

ただただ毎日を怯えて過ごした。

仕方ない。

敵わない対象からの暴力に対しやることなど、やれることなどそれしかない。

でも飽きた。

殴られつづけたある日のこと、目が覚めるとそこは黒い部屋だった。私が目覚めるといつもは暗い部屋だったのに。

「やあ。見ていたよ。遂に来てしまったね。」

そこに居たおじさんは、拳で語りかけてくる私の憎む相手と違って、優しく私を慈しむ様に話しかけてくれた。

「君は機会を得たんだ。君は正義の下に制裁を加えられる。」
憎む相手に対しても・・・？

「君はそれを優先しなければならない。さあ決めろ。」

・・・悩むことなんてない。

膝を抱え恐れ泣く日々にはもう飽きた。

私、やるよ。

殺る・・・。

T・O・・・「じゃあちよつち行ってくるね。」

S・A「本当に着いていなくていいのか？」

T・O・・・「大丈夫だよ。今日は零の日じゃないんだし。心配性ね。」

そこが君の良いところですごく甘いんだけど。

S・A「なんかあったら呼んでくれ、直ぐに行く。」

T・O・・・「ホントに？」

S・A「本当だ。ふあ、あーあ。お呼びが掛かるまで寝てるからよ。」

T・O・・・「はいはい了解しました。ほいじゃーね。」

S・A「いつてら。」

ボタン。

T・O・・・「魂の権限を私に。」

取りあえずBUITe化し近くの民家の屋根に飛び乗る。

今日は生憎の空模様。

今にも落ちてきそうな厚く灰色の雲が青を覆っている。

雨が降って濡れても直ぐ乾かせるしどうでもいいけど。

ひよいひよいと屋根から屋根へ、猫ちゃんみたく移動していく。

猫が屋根の上を歩くか知らないけど。

T・O・・・「新しい子はどんな子猫ちゃんかしらね。」

楽しみね！。

「おい。」

T・O・・・「。。。。。」

背後から掛けられた声に振り向くことなく寧ろスピードを早めてやる。

「ちよ、ちよつと待て！」

T・O・・・「待つわけないじゃない。君ばかり？」

「頼むから、待ってくれ！なにも襲撃とか、そんなじゃないから！」
T・O・・・「はあ。」

鬱陶し。

E・NE「や、やっと止まってくれたな・・・。」

T・O・・・「で、なんの用よさつさとして。」

E・NE「いやさ、ヤバい奴が現れたんじゃないかと思ってさ。」

T・O・・・「は？」

E・NE「お前がOZから新しくワレラになった奴の情報を貰ってるのは知ってるんだぜ？」

T・O・・・「隠してないからね。」

E・NE「でお前はそれに興味がない。」

T・O・・・「ち、回りくどい言い方してないでさつさと喋りなさいよ。急いでるんだから。」

E・NE「そう、それだ。お前一体そんなに急いで何処に行く？」

T・O・・・「あんたいつかからストーキングナイトになったの？」

E・NE「お前も話をはぐらかしてるだろ。なら言つてやる。普段は興味を示さない新しいワレラを見に行くんだろ？詰まるところ、そいつはヤバいってことなんじゃないかと思っただ。」

T・O・・・「成る程死にたいのね。」

E・NE「わわつと待て待て！ちよつと気になったただだって！それに変な奴が現れたら詳細を知っておきたいもんだろ！」

T・O・・・「そーねー確かに。じゃあ着いてくる？」

ちようどいい当て馬だ。

E・NE「いいのか？」

T・O・・・「いーよ。たまにはサービスしてあげるー。」

街外れの団地。

ここの6階、607号室に新しい子がいる。

昨日ワレラになって、一番の目的をこの部屋で果たした。
まだ警察も誰も気づいていないから静かなものだ。

ドアノブに手を掛ける。

鍵は掛かっていない、のがお約束でしょう。こういう時は。

T・O・・・ほら壊して。」

E・NE「は？なんで俺がはいやらさせていただきますすみません。

」

T・O・・・分かれればいいのよ。」

E・NE「ち・・・Create剣・・・って壊していいのか？」

T・O・・・いいよ。どうせ此処に住人は残らないし、警察はあんなを捕まえられないしね。」

E・NE「・・・まあいいか。は！」

一閃、扉は斜めに斬られ下半分が中に倒れ込んだ。

T・O・・・はいはいお見事」。ホント剣捌きだけは凄いいよね。」

E・NE「なんか含みを感じるが褒め言葉として取っておこう。」

T・O・・・じゃあその勢いで中に行つて。」

E・NE「任された。」

・・・ゴミが散らばつてるかとも思つたけど存外綺麗ね。

住んでいた奴が汚かつただけか。

狭つくるしいリビングを抜け、E・NEが引き戸を開けると畳の部屋だ・・・。

T・O・・・あらら。悲惨ね。」

この家主は包丁で胸を貫かれ絶命していた。

E・NE「つつてもよ、こいつは糞だったわけだろ？因果応報つてわけだ可哀相とは思えんね。」

T・O・・・右に同じよ。さ、子猫ちゃんはどこにや？」

E・NE「ふ。T・O・・・よ。お前には洞察力が足りないようだな！
！こういう糞が住む部屋に閉じ込められる姫さん坊ちゃんはな、狸と同じで押し入れに住むと相場が決まつてんだよ！」

T・O・・・それ洞察力関係ないじゃん馬鹿死ね。」

E・NE「ちよつと！名前じゃないよな！？悪意しか感じられなかったぞ！」

T・O・・・「喧しいわね」。さつさと開けなさいよアホ。」

E・NE「・・・はあよいしょつと！」

多分、E・NEは着いて来たのを後悔しただろう。

だつて死んだから。

T・O・・・「ただいま」。

S・A「おうおか・・・誰だその子？」

J・A5「おじゃまします。」

T・O・・・「あーこの子今日から家の子」。

S・A「は？」

J・A5「よろしくおねがいします。」

S・A「え、はいよろしく・・・。」

制裁を受けた男とE・NEの死体を片付けた。

E・NEは私が片を付けてあげなきゃ終わってたわね。

T・O・・・「はーい着いといで」奈保ちゃん。」

J・A5「うんお姉ちゃん。」

とととと着いて来る。

んゝ超キュート」。

S・A「おい一体なんなんだよ？」

T・O・・・「知りたい？」

S・A「当たり前だろうが。」

T・O・・・「よくある話よ」。あの子はね、ジゴロから暴力を奮われてたのよ。」

S・A「成る程。罪は『親殺し』ってところか。」

T・O・・・「んーん違つよ。ジゴロが死んだのは奈保ちゃんがワレラになつた後だから。」

S・A「え？じゃあなにをやったんだ？」

T・O「殺ったのは糞ジゴロよ。」

S・A「はあ？」

T・O「それ以外に言うことはないわ。じゃ、ここから先は更なる乙女の園だから男子禁制。」

S・A「え？ちよつとま——」

ボタン。

くいくい。

T・O「ん？なにかな奈保ちゃん？」

J・A「ジゴロつて、なーに？」

T・O「悪いおじさんのことよー。」

J・A「悪い……おじさん？」

おつと地雷かな。

J・A「じらい？」

T・O「なんでもないよ。さあ此処が奈保ちゃんの部屋よー。」

「

S・A「で、どうすんだあの子？」

T・O「さっきも言っただしょー今日から家の子よ。」

奈保ちゃんが寝てから4時間、リビングに集まりお茶を飲み飲み左宇と話している。

S・A「いや家の子つて。あの子がワレラで、親を殺して家に居られなくなつたつてのは分かる。けどここまで世話をやく必要はあるのか？食べなくても死なない、眠らなくても死なない。それがワレラの売りだろ。」

T・O「あらら以外と薄情ね左宇君。見た目は16、7つてところだけど中身は10歳の女の子なのよ？」

S・A「……まあ此処はお前の家だし、お前に危害を加えなきゃ

それでいい。」

T・O・・・大丈夫よ。災厄は、目の届く位置に囲んでおくのが頭良しよ。」

S・A「そういうもんかね・・・災厄？」

風は虚ろ、空虚から悪いことは訪れる。

身近に置いておけば対応は簡単で、死ぬのも簡単。

災厄は最悪になる必然はない。

そのまま最上にするのが楽しいのよね。

「・・・そーいうもんよね私？」

1（前書き）

金があるのに万引きをやめられない。

何故か分かるか？

癖になるからだよそれが。

成功すると達成感を得る。

気づけなかった店員に対し優越感を抱く。

それらは麻薬として作用し、万引きを依存の対象に進化させる。

何にでも言えることさ。

活字が好きだから小説が好き。

面白いからゲームが好き。

爽快感があるからマラソンが好き。

野球が好き、サッカーが好き、サーフィンが好き、演奏が好き、歌

うのが好き、万引きが好き、殺人が好き。

対象は違えどそれらは全て人にとって依存の対象だ。

私も依存しなきゃ生きていけない糞しよばい人間の一人だ。

何かを殺すことに依存している、糞人間だ。

E・NE「・・・。」

私の名前はE・NE。

本体の名前なんて語るに値しない。

呼ばれ方もどうでもいい。

最近、なんだかキャラが崩壊していると思われがちだが・・・。

本来俺は、真面目くさった話し方が嫌いだ。

生きていた頃は快活が人になったような奴だったから俺は。

やっていたことはあれだが。

ああ、こんなモノローグは必要ないな。

察しの通りこれは俺の話。

詰まらないし、これまた語るに値しない。

けれど俺にだって酒を傾けながら独り言したい時がある。

話半分で聞いてくれれば幸いだ。

S・A「それで、何を手伝えればいいんだ？」

E・NE「・・・まあ取りあえず、一服どうだ？いけるんだろお前

？」

S・A「貰つとく。」

バチ、ジジジ・・・。

E・NE「ふー。5年前俺は死んだ。」

S・A「驚いた、大先輩だったんだな。」

E・NE「茶化すなよ。」

近くの山の展望台。

の屋根の上はとも見晴らしがいい。

こんな所で吸う煙草は普段の2倍美味く。

S・A「ん、ん、ん、ぷはー！うめー久しぶりに飲んだぜビール。」
ビールは普段の5倍美味いし。

E・NE「ほれほれ日本酒に肴もようけある。」

日本酒は普段の10倍、摘む肴は普段の15倍美味い。

S・A「展望台、の屋根の上で月見酒つてのも乙なもんだな。」

E・NE「だろ？此処は俺の取って置きだったんだが、お前は他とは違う。共有するに値する。」

S・A「そうか。甘んじて受けておこう。」

何故かは分からない。

分からないが、こいつだけは信用出来る。

俺の心を読めないからか。

E・NE「俺の罪は『裏切り』。生前与していた組織を裏切ってな、そのせいで何人が死んだ。悪いこととは思わなかったが。」

S・A「ふー。つまり悪の組織だったわけか。」

E・NE「そうだ。ま、何をやってきたかなんてどうでもいい。一人、な。一人だけ組織の中に殺したい奴がいた。」

S・A「よくある話だ。恨みか、しがらみか。」

E・NE「恨みもあった。ただ俺は、そいつを殺す事でそれまでにやってきたこと全てを正当化しようとしただけなんだろうな。そしてそれはまだ出来ていない。」

S・A「成る程。つまりそいつを探すのを手伝えと。」

E・NE「そういうことだ。」

S・A「だからお前変なワレラをいちいち探ってたのか。」

E・NE「ああ。そして察しがつくだろうが・・・。」

S・A「BUITEばかり狙う理由、か？」

E・NE「そうだ。奴が死んでワレラになったとすれば、必ずBUITEになる。」

S・A「何故？」

E・NE「奴は獣だ。蛇の道は蛇、獣は獣にしかねないし、それ以外になる資格がない。」

だから俺は獣を殺す。

S・A「んぐんぐ。このスモークチーズなかなかイケるな。しかし、そりゃあとんだとばつちりだな無関係のBUITeからすりゃ。」

E・NE「確かに。だが結局俺もお前も罪を犯し、ワレラになり重ねている。殺されても文句は言えん。そうだろ？」

S・A「まあな。」

そうだ・・・だから俺はその日のために罪を重ねてきた。

E・NE「それで、結局手伝うのか、それとも・・・。」

S・A「承ろう。」

E・NE「そうか。ありがとう。」

S・A「アホかよ。感謝なんて見つけて殺した後にしろ。」

E・NE「ふ、そうだな。まあ今日は無礼講ってことで飲み明かそう。」

大体何故なんだろうか。

ピチャ。

最初の対象はなんだったか。

ピチャ、ピチャ。

まあなんでもいいか。

ピチャ、ピチャピチャ。

今日も今日、明日も変わらず同じ事しかない。

ピチャ、ピチャピチャパタタタ。

「・・・あー煩いなあ！」

ドン、バタリ。

単純に好きだからなのかもしれないが、なら何故・・・。

ジワ。

「・・・垂れるね。」

T・O・・・「久しぶりに出たわね。」

S・A「なにがだ？」

T・O・・・「えゝ知らないのー？殺人鬼よ殺人鬼ゝ。ホントに知らないの？」

S・A「知らん。」

T・O・・・「女の子ばっか殺す悪質な奴でねゝ、喉を軽く掻き切った後逆さ吊りにするの。で出血死するまで眺めてるそゝよ鬼畜ねー。」

S・A「・・・反吐が出そうな野郎だな。」

T・O・・・「ホントよー。女の子を逆さ吊りにするなんて信じられないわゝ。」

S・A「突っ込むのはそこか。・・・そいつ、相当罪を重ねてそうだな。なんで誰も殺さない？」

T・O・・・「理由があるからでしょーよー。たかが人間一人消さないってことはそういうことよ。」

S・A「理由、か・・・。そいつについて分かっていることは？」

T・O・・・「男ゝどつかの組織に飼われてるってくらいかねゝ。」

S・A「組織ねえ。」

T・O・・・「なに隠してるの？」

S・A「いやなに、男同士の約束だ。見逃してくれ。」

T・O・・・「そー。まあなんでもいいけどねゝ。死なないようにだけしなさい。」

S・A「おう。」

E・NE「・・・成る程昨日か。」

S・A「取りあえず現場に行ってみるか？」

E・NE「ああ・・・。」

S・A「・・・おい。」

E・NE「ああ。」

やってしまった。

また守れなかった。

力を得たはずなのに・・・。

S・A「おい！」

E・NE「つと、なんだよ？」

S・A「大丈夫かよお前。魂抜けてんじゃねえか？」

E・NE「は。んな馬鹿な。さつさと現場に行こう。」

S・A「・・・おう。」

屋根を駆け街外れの波止場を目指す。

今回の殺害現場は倉庫。

なんでこの街に波止場があるんだか。

船が来たことなんて一度もないくせに。

どこかおかしいと感じる俺はおかしいんだろうか。

それこそちゅ——

S・A「おい！」

E・NE「どわっ！？いきなりなんだー！」

S・A「・・・お前ちよつと抜けすぎだろ。」

E・NE「悪い。警察はどうだ？」

S・A「ばつちりいるが・・・。」

どうしたと言いかけて気づく。

E・NE「『横領』、『収賄』、『賭博』。この街の咎人に比べり

や屁でもない罪だが・・・。」

S・A「問題なのはこれを使った連中が秩序の一環を担っているということだ。」

E・NE「その通りだ。更に言うなら犯した罪を償うことなく他人を裁こうなんて言語道断だ。」

S・A「ああ許されることじゃない。鉄槌を下す。」

E・NE「だが殺す程じゃない。せいぜい骨折くらいだな。」

S・A「・・・公務執行妨害とかで引つ張られないか？」

E・NE「ワレラの間は人じゃ上手く視認出来ないから平気だろ。

殺意を向けない限りな。左の2人は任せろ。右は俺が行く！」

S・A「オーケー。」

屋根から飛び出し刑事の背後に降り立つ。

刑事1「・・・？」

刑事2「どうした？」

刑事1「いやなんか誰かが後ろに来たような気がしたんだが・・・。

」

E・NE「ふん。」

取りあえず刑事1の右腕を掴む。

刑事1「な！？だ、誰だおまうぎゃああああ！？」

そのまま俯せで押し倒し右腕を折る。

刑事1「く、あああああ！？」

刑事2「・・・お、おいいきなりなんだ？」

殺意を向けていないから俺をつまく視認出来ない刑事2の腹を

蹴り上げる。

刑事2「が！？なんだ・・・お前・・・誰だ！？」

E・NE「答えるわけないだろ馬鹿。」

膝を正面から、踏み付ける様に蹴る。

ゴキヤ、という気味の悪い音と共に刑事2の膝は曲がらない方向に

曲がった。

刑事2「あ・・・ぐあわ・・・！？」

E・NE「良かったな可動域が広まって。」

S・A「気絶させろよ煩いから。」

後頭部を殴り気絶させていく。

E・NE「よし、じゃあ中に入ろう。」

E・NE「……。」

死体は逆さ吊りにされたままだった。

地面に垂れた血はカラカラに乾き、靴で擦ると簡単に剥がれていく。滴る血はもう無く、首筋の傷にも同じく乾いた血がこびりついている。

S・A「……首の傷以外に外傷が見当たらないな。打撲傷どころか擦過傷すら見当たらないってのはどういうことだ？」

E・NE「奴のポリシーだな。“傷は一つ、ただそれだけで人は死ぬ。なんて単純な生き物なんだろうか。”よく言ってた。」

S・A「はん。なかなか面白いな。」

脚を縛る縄を解き死体を下ろす。

……16、7といったところか。

E・NE「接天。火送り。安らかに眠れ。“火葬”。」

S・A「燃やしちまつていいのか？警察は困りそうなんだけど。」

E・NE「いいんだよ。こんな姿、人に見られて気持ちがいいわけないんだから。」

……やはり証拠はなにもないか。

E・NE「鑑識がいなくてことは刑事達は今来たところってことだな。いつそ全部焼き尽くしちまうか。」

S・A「確かにそれで……ん？」

E・NE「どうした？」

S・A「刑事達が来たばかりということは情報はまだ世に回っていない。」

E・NE「……お前確かT・O……に聞いたんだよな？」

S・A「ああ。一体なんで……。」

まさか……。

E・NE「……ま、取りあえず此处を燃やしちまおう。話はそれからだ。」

T・O・・・「なーにーよ？」

E・NE「答える。お前は昨日見たのか？」

倉庫を焼却後、T・O・・・の家に来た。

T・O・・・「私が見たのは死体だけよ。行ったときにはもう犯人はいなかったわ。これホントー。」

S・A「妙はなんで倉庫なんかに行ったんだ？波止場なんて用がなきゃ行かんだろ。」

T・O・・・「用があつたのよ。ペルソナじゃないけど私も召喚体であちこち見回つてんの。んでー昨日の夜ヒルデが波止場に行ったのよ。」

E・NE「自動操作か？」

T・O・・・「もちろ。束縛はするの也被るの也被なの。でも一つだけ命令があるの。街から外れようとするワレラを発見したら追跡すること。」

S・A「何故？」

T・O・・・「そこまで教える必要はないよね？私たち仲良くしてるけど踏み込めるラインはあるってことを忘れないで。」

S・A「スマン。続けてくれ」

T・O・・・「それで、一人のワレラが波止場なんて間抜けな方に行つたからヒルデは追っかけたのね。レベル低いから離れすぎで会話は出来ないけど、簡単な信号を送ることは出来るの。」

ワレラを追つて・・・。

まさか奴は既に？

E・NE「・・・ふむ。つまりお前のヒルデから信号が送られてきたのか？」

T・O・・・「そ。危険信号がね。だから私は召喚体キャンセルしようと思つたのよ。殺されると勿体なかったから。」

S・A「出来なかったのか？」

T・O・・・「ええ。相手に捕まるか、攻撃を受けるとキャンセル出来ないからね。だから仕方なく波止場に行ったのよ。驚いたわ。だってあの子が犠牲になってたんだから。」

E・NE「あの子？犠牲者と知り合いなのか。」

T・O・・・「知り合いじゃないけど知ってる。だってヒルデが追ったワレラがその子なんだもん。」

S・A「成る程。ん？だったらヒルデが犯人の顔を見た可能性があるんじゃない？」

T・O・・・「その子の特製は『忘却^{リスイ}』と『植付^{サアーダ}』。特定の記憶を排除し、特定の記憶を上書きする。ヒルデの記憶は、お花畑を駆け回ってたことになってるわ。」

じゃあ結局情報なしか・・・。

S・A「その子の魂補充は？」

T・O・・・「分かんない。ついでに名前も分かんないのよね。」

E・NE「・・・ち、火葬するんじゃないかった。」

S・A「・・・え？」

E・NE「ん？どうした？」

S・A「火葬してやったのか？なかなか気が利くな。」

・・・ん？

んんん？

話が噛み合っていない。

E・NE「だってお前・・・いやちょっと待て、倉庫は燃やしたよな？」

S・A「なんで燃やしちまうんだよ。・・・ん？まさか・・・これはもしかして。」

E・NE「ああ多分。」

T・O・・・「生きてみたいねその子。」

そしてまた波止場へ。

倉庫は灰と化していた。

S・A「・・・燃えてるな。」

E・NE「ということは俺の記憶が正しかったわけか。」

警察が大量にいるので屋根の上から見ているが、腕や脚にギプスをはめた刑事が4人いる。

E・NE「仕事熱心、言いかえりやワーカホリックな奴らだ。」

S・A「だな。俺達が折ったんだからなんとも言えないが。」

E・NE「そうなのか？俺達ってT・O・・・と？」

S・A「・・・成程。お前はそれを忘れているわけか。」

E・NE「と、いうことは俺とお前がやったんだな？」

S・A「ああそうだ。」

・・・記憶を無くす箇所が違うことになにか理由はあるんだろうか。
E・NE「まあいい。お互いの記憶に齟齬があるってことがちゃんと認識出来たんだからな。」

S・A「そして齟齬があるってことはつまり、変な言い方だがあの死体は生きていた。」

E・NE「ああ。そして火葬された振りをした。俺達を見張っている可能性もなくはない。」

今のところ不快な視線などは感じないが。

E・NE「・・・今更だがスマンな。こんなことに巻き込まれて。」

S・A「恩はなんのために存在するか知ってるか？」

E・NE「・・・さあ？」

S・A「売って、倍にして返してもらったためさ。」

E・NE「実益主義者が良い心掛けだ。そして俺は恩を買い倍で返すことで死の回数を減らせるわけだ。命より高いってもんがないのは本当だな。」

S・A「魂何個も持つてるお前が言っても説得力ないけどな。」

E・N E「ははは確か．．．に．．．。」
なんだ．．．？

S・A「どうした？」

男．．．。

男を探す？

本当に男だったか？

E・N E「．．．ダメだ一旦帰ろう。どうせ此处に居たところで収穫は無いし。」

S・A「．．．？そうだな。」

結局俺にはなにも出来ない。

今から幾年か、“全てを束縛する国”が崩壊するまで俺はそいつの招待を掴めなかった。

いや、その後も掴めていない。

そしてそのために魂が循環した数は8000以上だった。

プロローグ（前書き）

集団心理。

弱かろうが強かろうが、群れば群れる程人間の増長を呼ぶ。
集団行動が大事なのは分かる。

でなければ規律などなんの意味も無くなるからだ。

ま、わけの分からない規律であれば即座に切り捨てるまでだ。
心理と行動の間に境界を見いだせない奴は殺してやる。

プロローグ

D・W / - 「……。」

この世に生まれ落ちて八百数年。

今まで静かに世を眺めてきた。

移ろ移ろい行く世は、時に美しさに溺れ、時に醜怪さに身を任せていた。

そして今日の前で行われている、この世で最も愚行と呼べる集団心理に依る行動。

許せるものではない。

E・01 「ひひひ。さあ来いやお嬢さん！」

E・02 「そ、そうだよ。これ、こ、これみ、見えるだろ？刀だひよ、よ刀……。」

E・03 「ぬははお主噛みすぎよ。」

女「やめて……来ないで……。」

Createで剣ではなく刀を創りだしている辺りは褒めようもある。

刀こそ至高の武器なのだから。

D・W / - 「だが貴様ら下郎が持つてよい物ではない。」

E・02 「へや……？ただただだつれだよあなた！」

D・W / - 「男児がそう簡単に狼狽えるな見苦しい。」

E・01 「あーん？てめえ誰だコラ？」

ナイフを持った男がこちらにやって来る。

E・01 「おいおいおい。てめえなんだ？あれか？正義の味方ぶつてんの？んん？この女助けて、ええつと……なんだっけ……？」

E・03 「ぬははちちくりあう気だるぬははは。」

E・01 「そう！それぞれ！あひやひやひやひや。分かってんのかくソガキ？俺達が一体誰なのか知ってんのか？」

……どうやら全員B U I T eらしい。

D・W / - 「・・・E・NEを呼んでやろうか。」

E・01 「あ？なんだって？」

いや、もうダメだな。

スパッ。

E・01 「え？」

D・W / - 「貴様達もワレラだろう？ふざけた輩もいるもんだな。全く、02の奴は何を考えているのか。」

E・01 「は？おい。ねえ。俺の右腕は？」

E・02 「あえ・・・？」

E・03 「そこに落ちてぬははは・・・。」

E・01 「ッ！？いつてえ！？」

ナイフ男の右腕から血が噴き出す。

女は既に意識を向けられていないのでなにが起きているか分からないようだ。

D・W / - 「安心せい。痛みはそれまでだ。“千刃の谷・祢々切丸”。」

男3人「へ？」

祢々切丸が天空より降り注ぐ。

E・01 「が！？ぬわたあなまやなあ！？」

E・02 「ひiiiiiiiiiiiiあああごぼっ！」

E・03 「ぬはははぐたなばな！？」

D・W / - 「消えろ下郎共。」

男2と3が消えていく。

E・01 「あ・・・がが・・・て、てめえの顔・・・覚えたぞ・・・。」

D・W / - 「喧しい。さっさと失せろ。」

灰になり消えていった。

D・W / - 「・・・さて。」

ん？

D・W / - 「成る程。彼女もそうであつたか。」

屋根から屋根へ飛び移り離れていく女の後ろ姿が見える。

まあいいか。

D・W / - 「済まなかったな祢々。下衆の血で汚してしまつて。」

さ、明日も学問に勤しまねばならん。

早く帰って寝るとしよう。

最初の烏合

先生「であるからしてこいつは——」

こいつとは随分上から目線の奴だなこの男。

そもそも学問の場において“こいつ”など使うに能わない。
ふざけた野郎だ。

大体この教科書に書いてあることは事実となんら一致しない。
可哀相なあいつである。

先生「おいこら轍！聞いてんのか？」

D・W / - 「聞いている。さっさと続ける。」

先生「・・・てめえ後で生徒指導室に来いや。」

D・W / - 「構わんが？」

先生「ち・・・クソガキが・・・・・・授業を続ける。」

生徒1「おいおい大丈夫かよ醍醐。」

D・W / - 「ああ。心配ない。それよりお前は授業をちゃんと聞いておいた方がいいぞ。この男の授業以外をな。」

生徒1「ははは違いないや。」

こいつは良い奴だ。

直感的に良い奴の役とその逆が世の中にはいる。

前者の最たるが俺の右隣りの男子生徒。

後者の最たるが先程の非教職者だ。

学生という身分に就いたからにはある程度の束縛に従うのは仕方あるまい。

どうせ大したことではないのだし。

しかし私の信念を曲げようとすれば、例え誰であろうと切り捨てるまでだ。

キンコンカンコン。

先生「ではこれで授業を終了とする。轍、生徒指導室で待ってるからちゃんと来いよ？」

D・W / - 「分かっている。」

非教職者は引き戸を乱暴に閉め教室を後にした。

生徒1 「ったくよくたまんねえよな。」

生徒2 「ホントよ。ああやって偉ぶったり大きい音を出して脅そうなんて、えーつと・・・。」

D・W / - 「自己顕示欲が強く、可哀相な男だな。」

生徒2 「そうそうそんな感じ。」

この子も良い役の最たるだな。

D・W / - 「では行くとするか。」

生徒1 「がんばれ醍醐。」

生徒2 「がんばー。」

ガラッ。

D・W / - 「轍醍醐、入る。」

先生 「ちゃんと来たな。その行動だけは褒めてやる。」

回る椅子に座りキーキー音を発している。

D・W / - 「それで何の用だ。」

先生 「ち・・・てめえ年上に対する口のききかた知らねえのか？」

ふ、真実を言えば私の方が相当年上なのだが。

D・W / - 「では、何の用でしょうか歴史の教師。」

先生 「それも嘗めてるだろ・・・。まあいい。お前、俺の授業に何か文句あんのか？」

D・W / - 「いいえなにも。あるとすれば今だぞ下郎。」

おとしまったつい本音が出てしまった。

先生 「てめ・・・！今なんて言いやがったコラア！」

D・W / - 「お前本当に教師か？この国の教育は根本から腐っている様だな嘆かわしい限りだ。」

・・・もうダメだ。

D・W / - 「抜けば玉散る氷の刃。 “村雨” 。

先生「な・・・お前・・・！」
ん？

D・W / - 「まさか貴様もか？」

先生「す、全ての人は肉塊にぐわが！？」

取りあえず右手を村雨で貫き机に固定してやる。

D・W / - 「全く・・・先日ていの小物と言いなんだこの体たらくは。
ワレラの質が悪すぎる。

何故このような下衆がワレラになっているのだ。

先生「ぐ・・・放せよてめえくつ・・・は・・・！」

D・W / - 「何故貴様がワレラなのだ。」

先生「わ、悪いかよ！」

D・W / - 「・・・。」

先生「！？待てやめぎゅああがああああ！？」

刺さった刃を手首の方へ倒していく。

先生「は・・・はつく・・・。そりゃあぐが、死んだからに決ま
ってるだろ！」

D・W / - 「なにをやり、なにを理由に崇高な輪廻に乗った？」

先生「さ、殺人だ。だが勘違いするな！やられたから殺っただけだ
！」

D・W / - 「そうか。見るところが無いかと思えばなかなかどうし
て、復讐は正式な権利だ。むしろ施行したことは誇っていい。」

先生「へ、へへひひひふ。だ、だろ？」

D・W / - 「だが、崇高な輪廻に乗る程の者ではない。」

先生「は？お、おいやめろよ？今ここで俺がいなくなれば疑われる
のはおおお前だぞ？」

D・W / - 「構わないさ。一個人、更に言うなら学生程度が出来な
いレベルで殺し、浄化しなければ俺が捕まることはない。」

取りあえず村雨を引き抜く。

先生「いつつ！？」

D・W / - 「ちょうど貴様の他には誰もいないしな。」

村雨を歸し、代わりに名もない刀を取り出す。

D・W / - 「ただ、貴様は村雨や祢々で斬るに値しない。」

先生「やめる・・・！」

D・W / - 「ふん。男児ならば覚悟を決める。たまには良いだろう細かに唱えるのも。」

先生「く・・・！来い流星群。貫き、拘束しろ・・・。」

D・W / - 「ほう。その心意気は誇れ。来い流星群。貫き、拘束しろ。」

意外と骨が・・・。

D・W / - 「ん？」

先生「隙あり！“千刃の谷”！」

D・W / - 「・・・。」

狩りをするなら量で攻めろ

ジリリリリリリリリ！

何かの警報機が鐘を鳴らし、天井からスプリンクラーが水を撒き散らす。

非教職者の放った“千刃の谷”を塵の如くいなし、幾十もの刃で以て非教職者を貫いた。

壁は抉られ見晴らしがよくなっている。

D・W / - 「貴様もか？ いやお前は・・・昨日の女か。」

女「あら。よく分かったわね。」

“千刃の谷”を放つ直前に気づいた視線は、入り口に立つ女からのモノだった。

D・W / - 「なにか用か？」

女「いーえーなにもーないよ？ 昨日のお礼を言おうと思って。」

D・W / - 「・・・。貴様の言うお礼は、お礼参りのことを意味するのか？」

教室にぞろぞろと人が入ってくる。

よく見れば昨日殺した奴らもいた。

女「いーえーお礼だよ？ 邪魔してくれたことに対するね。」

E・01 「このガキだったのかクソ野郎。」

E・02 「ひひ、こぶ。きよ、今日は殺す今日は殺す。」

E・03 「ぬはははこんだけ数いりや余裕つしよ。」

教室に入ってきたのは3人。

どうやら背後にもう少し控えているらしい。

D・W / - 「・・・ほう。外で悲鳴をあげている脆弱な男共が役に立つと？」

女「なんですって？」

E・015 「・・・は、は、は、たたた助け。」

「喧しい。」

血をだらだらと流しながら入ってきた男が、鋭い一閃の下、体を縦に真つ二つに切り裂かれた。

女「な・・・！誰よあんた！」

S・A「S・Aとでも呼んでくれ。全く、真昼間から何事かと思えば、えーと・・・。」

D・Wノ-「轍醍醐、だ。」

S・A「ああそうだった。妙とかペルソナからちらつと聞いたよ。よろしく。」

D・Wノ-「こちらこそよろしく。」

・・・珍しいな。

こいつはどちらの役か見当がつかない。

E・O1「お、おいどうすんだよこれ・・・。」

女「ち・・・！引くわよ！」

女は残りの集団を引き連れ、私が空けた穴から飛び降りていった。

S・A「ふん。面白みのない捨て台詞だな。」

D・Wノ-「全くだ。ところで阿部左宇、何をしに来たのだ？他のワレラは我関せず焉のようだが。」

S・A「単純に煩かったから、てのじゃダメか？」

D・Wノ-「では次の質問だ。この“ストップ”は誰が使用したのだ？」

女が姿を見せて直ぐに“ストップ”がかけられた。

女が去った今も持続しているということはあの集団がかけた訳ではないだろう。

S・A「妙がかけてくれたんだよ。理由は“警報機が喧しいから”らしいけどな。」

D・Wノ-「ふ、成程。T・O・・・らしい理由だ。」

S・A「俺からも質問いいかな。奴ら何者だ？集団行動するワレラなんているんだな。」

D・Wノ-「あれは集団行動などというモノではない。ただの集団心理だ。あの女に釣られているのだよ奴らは。何者かは知らない。」

S・A「そうか。俺が言うのもなんだが、随分程度の低い奴らだったな。」

D・W／-「全面的に同意だ。」

しかし心配には及ばない。

なぜなら奴らは私が駆逐するからだ。

S・A「ん・・・分かった。そろそろ“ストップ”を切るそうだ。

それ、送らないのか？」

ああ、非教職者のことを忘れていた。

D・W／-「いいんだ。私が疑われないための伏線なのだから。」

S・A「・・・そうか。ま、こういう状況かまるで分からないから口出しはしないよ。じゃあな。」

D・W／-「ああ。」

開いたままの引き戸から左宇が出ていった瞬間、“ストップ”が切れ、色と音が戻ってきた。

駆逐する・・・久しぶりに。

P4・D1「成る程“ワイルド・ハント”でその雑魚共をおびき出してほしいと。」

D・W／-「そうだ。あの女はどうだか知らんが、取り巻き共は“ワイルド・ハント”の存在を知らんだろう。」

E2・D1「弱そうな召喚体がうろろしていれば追うというわけね頭良いじゃないかなかな。」

放課後の屋上に溜まる3人のワレラ。

利害が一致した時のみ集まる3人が集まったのは、利害が一致したためだ。

D・W／-「そういうわけだから頼みたいのだが。」

P4・D1「オーケー承るHans von Hackelberg
g,Hans von Hackelberg。先導の梟^{ふくろう}。嵐の

通過。 獵の名手獵の名犬。 食らい尽くせ“ワイルド・ハント”。
100頭の霊体犬と100体の霊体狩人が召喚され、方々へ散らばった。

P4・D1「今が17時そいつらが何体いるかは知らないが取りあえずその女の臭いがついている奴を見つけアプローチするよう命令しておいた。」

E2・D1「いくら“ワイルド・ハント”と言ってもそうやってちまちま探すのだからそれなりに時間はかかる所定の位置に全てが集うのは恐らく4時間後21時頃だ。」

D・W/-「構わないさ。それより少し聞きたいことがある。」

P4・D1「ふーん珍しいな今日は。」

D・W/-「たまにはこんな日があってもいいだろう。今狙っている奴らのことだが、何故群れていると思う。」

E2・D1「弱いからじゃないの？」

D・W/-「今までそんなことがあったか？」

P4・D1「いやないな少なくともこの街ではだが。」

いくら弱いワレラでも他と組むなんて滅多にない。

そもそもそんなことをしてもお互いのためにならない。

E2・D1「確かに不可解ではあるけどいいじゃない理由なんて。」

P4・D1「些末なことだ一閃に伏せる。」

E2・D1「どうしても気になるなら抛り所かOZの所に行けばいいじゃないか君なら自由に出入り出来るだろ？」

D・W/-「そうだな。“ワイルド・ハント”が有象無象集めを終えるまで抛り所に行くつもりだ。」

P4・D1「そうかい俺も少しばかり今回の件は気にかかるまっただからお前に協力したわけだが。」

E2・D1「しっかり見返りを聞いてこいよ。」

D・W/-「分かっている。私を導け魂の抛り所よ。」
指を一度パチンと鳴らし、自らを抛り所へと送った。

抛り所に至る

D・W / - 「やあ受付。」

受付「D・W / - じゃないですか久しぶり。」

相変わらず陰鬱と喜悅が入り混じる面白い空間だな此処は。

今日も今日とて、悲喜こもこも入り混じって意味不明だ。

D・W / - 「どうだ景気は？ 崇高な輪廻から外れた魂、どれくらいあつた？」

受付「いや、それがね最近はとんと。ワレラは来ても、外れる魂はなかった。」

ということは今日左宇が倒した奴は魂補充があつたというわけか。

受付「それで何しに来た。世間話は建前の建前。あんたは本音を語るが最も好きだろう。」

D・W / - 「さすがに付き合いが長いだけはある。」

受付「約500年ですから。」

D・W / - 「ふむ。では聞こう。今日の昼時、10人程のワレラが抛り所に来たな？」

受付「ああ来たよ。おかげで折角のカツ丼が冷めたよ。」

D・W / - 「名はE・0415、そうだな？」

受付「なんだよD・W / - が送ったのか？」

D・W / - 「いや違う。関わってはいたがな。」

非教職者も送っていないのだから受付に迷惑はかけていないだろう。

受付「そんなつまらないことを聞きに来たのか？」

D・W / - 「いや違う。真に聞きたいことと通ずるから聞いたまでだ。何故あのような下衆共がワレラになっている。そして何故群れて軍を成す。」

受付「女とE・0か。」

D・W / - 「知っているなら話は早い。全て語れ。」

受付「OZに許可は……。」

D・W / - 「いらん。どうせ後でOZに会いに行くからな。」

受付「そうですか。まあいいでしょう。E・Oは全部で100人います。と言っても全員屑の様なワレラですがね。」

ワレラのくせに現世のナイフを使っていた奴がいたくらいだからな・
・。

受付「それらが何故皆同じ名前を冠しているかといえば、大体予想がつくでしょうが同じ場所で100人が死んだからなのです。」

同じ場所で100もの咎人が死んだ・・・。

D・W / - 「成る程。先月の伍堂刑務所の全焼事故か。」

受付「そうです。あの“事件”にもワレラが関わっていたようすがね。」

D・W / - 「どういうことだ？」

受付「事件が起きたのは火の気の無い深夜の刑務所。燃えたのは刑務所のみ。」

D・W / - 「刑務所のみ？」

受付「伍堂は特殊でしてね、刑務所内に警察がいません。夜は完全に監視カメラに任せています。もし脱獄などすれば自動照準のライフルで蜂の巣ですがね。それで宿直室等は刑務所と同じ敷地内、10m程離れた場所にあるんです。」

D・W / - 「10m・・・あれほどの大火であればそれくらいの距離は無いに等しいはず。」

それなのに燃えたのは刑務所のみ。

受付「ふふふ。加えて言えば、刑務所付近の雑草一本も燃えていませんでした。通常の火事ではそんなことにならないでしょうよ。」

D・W / - 「成る程。それについては現世に戻ってから調べる。それで、何故E・Oはワレラになった？」

受付「実はですね、伍堂には一人ワレラがいました。女のね。」

それが奴というわけか。

受付「彼女が浄化したことにより死んだ罪人達はワレラになった。」

D・W / - 「おいおい。何故いきなりそんなに急いだ？大体あの刑

務所に入る奴はどうしようもない屑のはずだ。極刑を待つ者しかいなかっただろう？何故それがワレラになる。」

受付「・・・すみません。これより先はOZに聞いていただきたい。」

「

D・W／－「そうか分かった。迷惑かけたな。現世に来た時は声を掛けてくれ。」

指を一度パチンと鳴らす。

受付「その時はまた美味しい酒を――」

OZ「珍しいなお前が此処に来るとは。」

D・W／－「まあそう言うな。極上の酒も持ってきてやった。」

OZ「ほう・・・牛歩？聞いたことがない。」

D・W／－「私が100年ほど前に作り置きしておいた物だ。多分美味しい。」

私が作ったのだからな。

OZ「ふむ。まあいい前の代からの好だ。何を聞きに来た。」

D・W／－「現世に下衆共が蔓延っている。ワレラの選別者よ、これは一体どういう見だ。」

OZ「ふむ・・・E・Oのことか。」

D・W／－「察しが付いているのならば話してもらおうか。」

黒い皮張りのソファーに身を埋める。

これもまた召喚体。

特性『使い勝手』により座る者を悦楽の国に誘う。
とても心地が良い。

OZ「伍堂の女は知っているな。」

D・W／－「無論だ。」

OZ「女の特性は、『他者の愛』^{トウット・アモール}。惑う魂を集め自らの傀儡とする。
どうだ？これで納得出来ただろう？」

D・W / - 「貴様との面会無くか。」

OZ 「我とて万能じゃない。特性などは万物が干渉しえない事象だ。例えそれが呪文だとしてもだ。防ぐ手立てはあるうが、曲げるに能力などこの世に存在しない。」

D・W / - 「つまり貴様は全てを見過ごしていたということか。」

OZ 「そう悪く言うな。それに悪いことばかりではないだろうて。質の善し悪し問わずワレラなのだからな。」

狩ればそのまま我が身に宿る、ということか・・・。

OZ 「悪質が蔓延ろうとさして問題ではない。むしろ良質が昇るに樂であるう。」

D・W / - 「確かにそうではある。悪質は悪質しか狩れない。それに基本的にワレラは人を襲えはしない。そう考えるならば根本的な所で不具合などない。だが、悪質は制約を違える存在に成りえる。騎士道など掲げるに値しないが、常の者に害なすを私は善しとしない。」

OZ 「まあいいだろう。我は現世に干渉などしない。」

D・W / - 「貴様が地に赴く必要は無いし、出来ないだろう？高望みをするなよ選別者。」

OZ 「分かっている。」

集団の末路、頭を潰せ

P 4・D 1「……。」

E 2・D 1「……。」

現在時刻 20 時 37 分。

既に明かりの消えた校舎の屋上。

風は吹き付けるが二つの影を揺らぐに能わない。

P 4・D 1「……ん。」

E 2・D 1「……来たな。」

D・W / - 「どうだ首尾は。」

影は三つになり屋上を少し埋める。

P 4・D 1「順調だ今のところ 75 体を集めている。」

E 2・D 1「いつもこいつも取るに足らない雑魚共だけだね。」

ドン！

D・W / - 「……所々で“千刃の谷”や“ラムテイル・ヴィーグ”が放たれているな。」

剣の反射した光をどこからか出現した黒が飲み込んでいく。

やはり制約を違えているな。

E・O も、そして伍堂の女も。

奴ならば“ストップ”くらいわけないはずなのに。

P 4・D 1「それでどうだったんだ。」

D・W / - 「……E・O は女の傀儡。あれらは確かにワレラであるがそこに意思など存在しない。」

E 2・D 1「集団心理の下に集う愚者共というわけね。」

D・W / - 「その通りだ。」

許すべきではなく、値するとすれば駆逐の対象としてだけだ。

D・W / - 「では私はそろそろ行く。指定の場所に頼んだ。」

P 4・D 1「了解。」

E 2・D 1「久しぶりに見せてもらっよ君の勇姿をね。」

D・W / - 「は。それに似合う戦闘は起きないだろうがな。」

新西市郊外。

ある会社のビル建設予定地。

ビル、と言っても一棟ではなく十程建てる予定らしい。

D・W / - 「全く。不況の時勢に随分大仰なことをする馬鹿者がいたものだ。しかし、これ以上に戦うに値する地はないな。そうだろう伍堂の女？」

女「気付いていたのね。」

D・W / - 「当たり前だ。この謀を企てたのは私なのだからな。」

E・01 「ち。またてめえかよお！」

E・02 「おひ・・・馬鹿だよねうひ。」

E・03 「ぬはははは。」

・・・残りも集まったか。

E・0100 「まで・・・いぬ・・・はあはあ・・・ん、ん？これは一体どういう状況だ？」

女「E・0を全員集めてなにをする気なのかしらお侍さん？」

D・W / - 「害虫とはなんのために存在するか、簡単なこと。貴様らと同じ駆逐の対象だ。」

カデユタ・プロフォンダ。

女「・・・え？」

E・0全員「・・・な？」

女の懐に入り込み、袂々で左肩口から右腰にかけ切り裂く。

女「なにこれ・・・？だつて・・・あんたとの距離・・・100mもはなれ・・・。」

体が断絶され、女の魂は一つ消え去り死体だけ残した。

D・W / - 「・・・『他者の愛』、だったか。それは貴様が現世に存命の時のみ他者を救う。」

E・O1「やばい・・・い、いい今殺されたら！」

D・W / -「自らの死の予感には敏感か。」

今抛り所は空いている。

女が戻つて来るのに10分と掛からないだろう。

D・W / -「掛けるわけではないが十分だ。来い断ち切る大太刀。流星となり波瀾とす。拘束するは金。“千刃の谷・祢々切丸”。」

愛する愛した愛してくる者が全て消えた地に女は舞い戻ってきた。

女「・・・私の、私の・・・。」

D・W / -「貴様の、なんだったのだあれば。傀儡ではないのか。」

女「・・・そうね確かに。あんなのは私の寵愛に値しないわ。でもね、それでも・・・。」

D・W / -「ふん。要領を得ない問答は好きではない。表現出来ない程度のことならば今すぐ切り捨てる。」

女「私は・・・。」

女の魂補充は不明。

やるなら速やかにやらなければ明日の学業に差し支える。

D・W / -「行くぞ女。速やかに崇高な輪廻から外れる。」

女「私は、全てを愛していたの。」

エピソード

朝日に照らされた建設予定地。

元々地均しされていなかったたので地面は凹凸で覆われていたが、今はそれに輪を掛けて高低差が激しい。

P4・D1「激しい攻防だったな。」

E2・D1「伍堂の女だったつけまともな名前も持ち合わせていなかったくせに随分耐えたね。」

D・W / -「・・・。」

計3747回だ。

彼女はそれだけ死んだ。

D・W / -「・・・最低の幕引きだ。そして最悪の劇だった。」

愛だのなんだのと宣いながら奴は何度も何度も我が刀身の前に切り捨てられた。

それも1000回目以降は反撃へと切り替えしていたがな。

伊達に魂を稼いでいなかった。

その証拠に私も二つの魂を消費した。

P4・D1「ん、んー疲れた学校行かなきゃならんし帰るかな。」

E2・D1「そうだね。」

二つの影は言葉を残し去った。

下衆共の掃除は出来た。

その大本も断った。

残ったのは私の心の不快のみ、か。

この様な戯れ事は金輪際お断りだ。

朝日は地を照らす、人は照らさなかった。

千堂隆の場合1（前書き）

得たからには行使すべきだ。

権利は行使されなければ何の意味も示しはしない。

それが例え人を幸せにする権利であろうと、人を貶める権利であろうと関係ない。

そしてそれが、復讐の権利だとしてもだ。

人は斯^かく在るべきなのだ。

権利の行使者であれ。

時と場合など無視しろ。

必要なのはタイミングだけだ。

いや、それすらも必要ない。

私に従う、それだけで十分だ。

千堂隆の場合1

裁判官「判決。被告、千堂隆を懲役30年とす。」

千堂「な．．．！ふざけるな！あいつが、あいつが真犯人だって言ってる——」

裁判官「静粛に。これにて閉廷。お疲れ様でした。」

．．．また一人、救うべき羊が増えたか。

黒のロングコートを纏い、黒のフェルトハットを目深に被った老人彼が今傍聴していた裁判は被告人の有罪判決で幕を降ろした。

被告人は憤怒し、裁判官はただただ冷静であり、そして証人席に座る男は笑みを湛えていた。

『強盗』1回、『殺人未遂』1回。

所謂強盗殺人の殺人だけ未遂である。

ただ、被害者は植物状態であり、更に言うなら回復の目処は立っていない。

実質強盗殺人と言えるだろう。

そしてその罪を犯したのは被告人ではなく証人の男だ。

証人「いや、安心しましたよ。」

裁判所の前に出た証人が安堵の表情を浮かべ記者達に答えている。

全く以って不愉快な表情である。

被告人は既に行ったか．．．。

とりあえず夜が楽しみである。

千堂隆の場合2

伍堂刑務所。

全焼してから一ヶ月と経たず刑務所は元の形に戻っていた。

ワレラが関わった事案なので02が対応したらしい。

詳しくは知らないしどうでもいい。

「・・・さて。彼の部屋は此处か。」

臙体化し壁の中に入っていく。

ふむ・・・3大欲求とはよく言ったものだ。

失意の底に落とされてなお睡眠欲はしっかり湧いてくるらしい。

「これ。起きよ青年。」

千堂「・・・あ？んんん・・・？朝、ですか？」

「君にとつての朝の定義が起きた時であるのなら現在は朝だ。だが基本的にこの時間帯は夜と呼ばれると思われる。」

千堂「・・・？」

寝ぼけているか、まあそれも致し方ない。

「無実の罪で投獄されたとあつては、現実逃避の虜になつてもおかしくはないのだからな。」

千堂「・・・えーと、ところで貴方誰？看守？」

「ほう。これは驚きだ。ここの刑務所の看守はロングコートを来て見回りなぞをしているのか・・・。」

千堂「あれ・・・？確かここの刑務所つて夜は見回りとかなかったような・・・。」

「いい加減目を覚ましてくれ。」

千堂「・・・看守じゃない。ここは一人部屋。・・・っあ——」

「おっと。悲鳴は止してくれ近所迷惑だ。」

千堂「・・・！・・・！」

取りあえず寝転んだままの男の口を足で塞ぐ。

無論靴は綺麗であり、更にタオルを巻いてある。

「さあ、黙る気になったかな？」

こくこく頷く青年に満足したところで足を退けてやる。

千堂「げほっ・・・そ、それで貴方は誰ですか？」

D・G O「ようやく名を冠することが出来るか。私はD・G O。裁断介添人とでも呼んでくれたまえ。」

千堂「裁断・・・介添人、ですか。」

D・G O「そうだ。君の無実の罪に対する報いを君に、あの男への報いを君に遂げさせるために、君に協力しに来たのだ。」

千堂「・・・どういう意味ですか？」

D・G O「復讐させてやると言っているのだ。あの男にな。」

千堂「復讐？」

D・G O「そうだ。」

起き上がった男はまだ頭の整理が出来ていないらしい。

クエスチョンマークが頭上に浮かんでいそうだ。

千堂「あの、えーと、まだあまり意味が分からないんですけど。」

D・G O「よろしい。万事は常にそういうものだ。自らの知りえないことは遥か彼方でのみ蠢く。取りあえず体感してもらおう。」

千堂「へ・・・あぐ！？なにを・・・？」

男の頭を鷲掴み、締め上げる。

とても老人の力とは思えない。

D・G O「ではいくぞ。『クーディキウム裁断介添人』。」

千堂隆の場合3

千堂「こいつは酷い。『殺人』7回ですって。」

D・G O「ふ。その程度なんてことはない。どうだ、これでようやく納得に至ったか？」

千堂「はい・・・俺に何かしらの力が宿ったということは。」

D・G O「よろしい。ではここにもう用はない。」
再び男の頭を掴む。

臍体となり我に続け。

刑務所の壁を通り抜け外に出る。

千堂「んー・・・まさか一日で出られるとは思ってもみませんでした。」

D・G O「満足してもらっては困るな。君の目標はあくまでも復讐だということを忘れるな。」

千堂「分かってますよ。・・・あ、一つ聞いていいですか？」

D・G O「なんだね。」

千堂「復讐するのはいいんですけど、その後俺はどうなるんですか？」

D・G O「そんなことは終えた後で構わない。」

・・・久しぶりに伍堂から連れていくのだから挨拶くらいしていくか。

D・G O「少し宿直室によって行くぞ。」

千堂「え？あ・・・いや、そんなに堂々と脱獄する人は映画でもみたことないんですけど。」

D・G O「ふん、安心しろ此処伍堂はワレラの管理下にある。それに君は脱獄をするのではない。何故なら、君は投獄されるようなことをしていないからだ。此処には日帰り旅行で来たんだと思えばいいのさ。」

千堂「な、成る程。それは脱獄ではありませんね。」

今伍堂に居るのは確か“伍堂の女”と“関係ない男”だったな。
3年ぶりか。

相変わらず女はE・Oを待^はっているのだろうか。

千堂隆の場合4

関男「これは裁断介添人。お久しぶりですね。」

D・G0「久しぶりだな関係ない男。伍堂の女が見当たらないが、此処に非番などという制度はあったかな。」

関男「貴方は今まで京東きょうとうに行っていたんですよね。・・・ならばご存知ないのも致し方ないということ。」

ということは・・・。

D・G0「外されたか。」

関男「ええ。殺ったのはD・W/-です。」

D・W/-・・・轍醍醐ちくどだったか・・・あの侍相手では伍堂の女は勝てるはずがないか。

D・G0「そうか。まあ良いわ。彼が動くときは基本的に常成る者達のためにだからな。」

関男「確かに伍堂の女はE・0を野放しにし過ぎましたからね。私もあの殺しは正当と感じています。と、外れた奴の話なんてどうてもいいんです。今回は・・・千堂隆、そいつの介添えですか？」

D・G0「その通り。ふ、せっかくよったんだ。今回はちゃんと手順を踏むか。」

関男「分かりました。では千堂隆。」

千堂「はい？」

関男「この紙に記入していつてくれ。なに、選択肢にYesかNoで答えるだけの簡単なものだ。」

以下紙面の内容を示す。

- ・私は罪を犯していない Yes/No
- ・私は復讐を遂げたい Yes/No
- ・私は裁断介添人であるD・G0のやり方に賛同する Yes/No
- ・私は復讐を遂げたい Yes/No
- ・私はワレラについて理解した Yes/No

・私は復讐を遂げたい Yes / No

・私は魂の権限を取り戻したい Yes / No

・私は復讐を遂げたい Yes / No

・私は最終話を D・G O に任せる Yes / No

・私は復讐を遂げたい Yes / No

千堂「書き終えましたけど・・・どれだけ復讐させたいんですか。」

D・G O「愚問だな。今の君にとってそれ以上に重要な事などないだろう。」

千堂「あ、まあそうですね。ところで最終話ってなんですか？」

D・G O「言葉の通りだよ。最終話を私に任せればいいというだけだ。」

千堂「・・・はあ？」

D・G O「さて、無駄話はこれまでだ。さっそく向かうぞ。第54
2 回目の“復讐劇”へ。」

千堂隆の結果

新西市の中央付近に建つマンションの最上階。

証人だった男がワイングラスを片手に外を眺めている。

証人「ふ・ふ・ふ。いやぁ愉快だった。面白い劇をありがとう
ございました先生方。」

弁護士「いやなに。君のためだ一肌脱ぐのは当然だろう。」

検事「ははは、そうですね。」

裁判官「うむ。では静粛におのおの方。」

証人「では、今日という日を彩った私のための喜劇に乾杯。」

全体「乾杯。」

・・・成る程。

不自然なほど千堂に不利な裁判だったがこういうことだったか。

千堂「く・く・く。こいつら・・・。」

臍体となり部屋に侵入した我々を待っていたのは証人だけでなく、
裁判の主要人物が全員集まっていた。

隣に立つ千堂の顔は紅潮し、今にも目の前の証人を殺さんとする程
いきり立っている。

D・G O「まあ落ち着きたまえ千堂。君が殺したいのは取りあえず
証人だけだろう?」

他3人は確かに罪を犯しているが、咎人と呼べるレベルではない。

D・G O「『犯罪の透視』で君にも見えるだろうが、他3人は大し
た罪を犯していない。あれでは殺すことは出来ぬ。」

両腕を折るくらいが限度だろう。

千堂「じゃあさっさとこいつを殺しましょうよ!」

D・G O「ふむ良いだろう。先ずは舞台を整える。暫し待て。」

さて・・・どの偽装空間に行こうか。

塔か煉獄か冬か。

D・G O「・・・よし。中途の地獄。贖罪の地。ある意味での報い

ある意味での封印。逃げ出す術は無く許されない。“煉獄プルガトリウム”」

千堂「うわっ!？」

灼熱が辺りを覆い尽くす。

1秒と経たず、私達は煉獄へ歩を進めていた。

証人「・・・あ?なんだこれは・・・!？」

千堂「こ、此処はどこです!？」

D・G O「煉獄だ。此処で存分に復讐劇の主演を演じるといい。」

指を鳴らし『朧体化』を解く。

D・G O「さあ証人に殺意を向けろ。そうすれば『朧の見掛け』の効果は無くなる。」

千堂「もう、やってもいいんですか？」

D・G O「ああ構わんよ。存分にやりたまえ。」

そして私を楽しませろ。

証人「なんなんだよ・・・ん？」

千堂が証人に殺意を向けたことにより証人は千堂を視認する。

証人「お前・・・! 刑務所に居るんじゃない・・・。」

千堂「この糞野郎。よくも俺を、俺の、俺という存在を穢してくれたな。」

証人「・・・は、ははははは。そうかそうかこれは夢だ。所謂^{いせきむ}明晰夢というやつだな。ふ、全く私も焼きが回ったようだな。お前ごときに同情するとはな。はははははは。」

千堂「く、Create 剣。」

名も無き剣がゆっくり形成されていく。

証人「ほう。さすが夢の中だな。そんなマジックが使えるとは。」

千堂「・・・あのD・G Oさん。あいつ完全に夢だと思っているみたいなんですけど。」

D・G O「ふん。痛みで以って覚醒させればいい。その後ならば恨みの文句も届くだろう。」

千堂「成る程。ハッ!」

千堂の投げつけた剣は、正確に証人の左腕を貫いた。

証人「・・・え？あ・・・痛い？つは！？があああ痛い痛い痛いああああ！」

千堂「正気に戻ったか下衆野郎。」

証人「ぐがあああ痛い・・・。」

千堂「おい！」

証人「ひあがつつあ！？」

千堂が証人を蹴り飛ばす。

・・・今回は一番のシナリオで終結を迎えるか。

千堂「この人で無しが・・・。他人を牢屋に30年も閉じ込める様な罪をよく擦りつけられるな貴様は。」

証人「は・・・くあっ！？止めてくれ・・・。で、出られたならそれでいいじゃぎあぐあああ！？」

二本目の剣が証人の右腕に刺さる。

千堂「ふん、つくづく屑だな。まあいいさ。俺は別に謝ってほしいわけじゃないからな。Create剣。」

更に右脚と左脚を貫き地面まで剣を刺す。

証人「ぎやああああ！やめるおお！こ、この俺にこんなことをして、ただで済むとあああぎやあああ！」

脚に刺さった二本の剣を段々倒していく。

血が溢れると共に、骨が断ち切られていく音がする。

臍もプチプチ音を発てながら切れていく。

証人「いたい！やややややめ、やめはあやめてくれくはがつああああああ！」

遂には両脚が両脚共太もより下が二つに分かれた。

証人「か・・・りゅぽ・・・ぽがあお・・・。」

ふむ、最早まともに思考出来る状態ではないな。

千堂「はあ、はあ・・・く、くくく。あーつははははははは！ざまあないな糞野郎！痛いかな？なら泣いて叫んでせいぜい生を謳歌しろよ！あはははははは！」

・・・一番つまらないシナリオで幕引きだ。

千堂「よし、これで止めた！くらえ“千刃の谷”！」

・・・。

“千刃の谷”は降り注がない。

千堂「・・・いや、もう死んでるかこいつ。これ以上ばらばらにしたら勿体ないですよ。見てくださいよこの顔。涙と鼻水と涎、それに吐瀉物でぐちゃぐちゃだ。両腕に剣が刺さって、両脚は真つ二つ、おまけに失禁してる。こんな醜態晒して死んでいくってのはどんな気持ちなんでしょうねえ？」

D・G O「私を知るはずもない。随分饒舌になったな千堂。復讐を果たし爽快か？」

千堂「ええそりやもう！貴方には感謝してもしきれないです。」

・・・“煉獄プルガトリウム”解除。

千堂隆の終演

裁判官「う、うわぁなんだこれは!？」

弁護士「う、うぼれぁ!ごぼっ……。」

検事「く……。」

突如現れた凄惨極まりない殺され方をした死体に、一人は単純に驚き、一人は単純に不快感を最高潮まで達し結果嘔吐、一人は冷静に眺めるだけだった。

千堂「こいつらも許せないです。いや許しちゃいけない。法により人を裁きまた助ける奴がそれを破ったんだ。万死に値します。」

D・G O「許可出来るのは両腕を折ることまでだそれ以上は――」
言い終えるより早く、千堂はグロアデイで裁判官の首を墮とした。

弁護士「今度はなんだ!？」

千堂「貴様のような奴は死ね。」

弁護士「へやっ……!？」

弁護士の体が上と下に分かれる。

検事「……。」

そしてソファ―に座りワインを酌み交わす私と検事。

千堂「……って、なにやってるんですかD・G O。」

D・G O「それは私の台詞だな千堂。忘れたか?君は裁断介添人であるD・G Oのやり方に賛同する。それにY e sと答えたはずだ。」

検事「……その通り。全く、興奮めさせてくれる。」

千堂「どういうことですか?そいつはなんです?」

「忘れたかな?この顔を。」

千堂「お前は……証人……?」

検事だった男はいつの間にか証人になっていた。

証人「検事なら、ほらそこに。」

検事「う……がは……。」

証人が指差す先には両腕を折られた検事が床に蹲っていた。

証人「コクツ。うむ。死んだ後でこんな体験を普通に出来るとはね。驚きだね千堂隆。いや、君はまだ死んでないか。」

千堂「どういうことですか？」

D・G O「私は言った、君の復讐を手助けしてやるとね。ただ君は誤解している。復讐などは一代で切れるモノではない。二代、三代、と永遠に続いていくのだよ。怨嗟の連鎖が復讐の輪を紡ぎ、そして終えた復讐をまた誰かが受け継ぎ、新たな復讐者として私に招かれる。ま、復讐された者が招かれた場合などはこれで切れることもあるのだけどね。」

千堂「・・・裏切ったな。」

D・G O「ははははは。面白いことを言うな君は。先に裏切ったのは君だ。裏切られた者には裏切る権利が与えられるし、裏切った者には裏切られる権利が与えられる。更に言うならこれは裏切りなどではないよ千堂隆。君は私の仲間でもなんでもない。約束を反古にしようが裏切りにはならない。君と私は、たまたま会っただけに過ぎないのだからな。」

千堂「・・・く、糞野郎が。ならお前も殺してやるよ！」

D・G O「強大な力を持った弱者は、それで自らが強者になったと勘違いしがちな。未だに『裁断介添人』が君に掛かっていると思っっているのか？」

千堂「な・・・？く、Create剣！」

唱えたところで剣が現れるわけもなく。

言葉だけが現れ消えていった。

千堂「な、なななな・・・。」

D・G O「君も既に復讐される者に成り果てているのだよ千堂隆。さ、証人よ。権利を行使したまえ。」

そして私を楽しませろ。

エピソード・千堂隆の終演その後

私の力により猶予された証人の魂は、あの１件で消去された。

千堂隆の死体はマンションに残したまま。

警察は脱獄した千堂隆が証人に復讐しに来たが、その時証人は不在。代わりにそこにいた裁判官、弁護士を逆恨みで殺し、検事の両腕を折った。

その後持参した日本刀で自らも命を絶った。

それだけの推理で今回の事件は収束し、証人について言及されることはなかったという。

終わり方としては私の氣に入るモノではなかったが、たまにはこんな復讐劇もいい。

私は裁断介添人。

貴方の復讐を手助けする功労者であります。

ブローグ

S・A「あ。」

P4・D1「む。」

田舎に住む奴は何故デパートが好きなんだろうか。

休みになると表の駐車場は勿論、立体駐車場も満車になるなんてのはざらだ。

今日も例に漏れず満車の様だが、車に乗らない俺には関係がない。ついでに言うなら俺は別段デパートが好きというわけではない。

用があるから来ただけで、用もないのになんとなく来る奴らとは違う。

まあその用というのも俺のではなく妙のなんだが。

自分で行けばいいものをあの女、用事があるとかでこつちをほっぽって行っちまいやがった。

P4・D1「成る程なかなか難儀な理由だな左宇。」

S・A「だろ?・・・一人か?珍しいな秀一と一緒にじゃないなんて。」

P4・D1「確かに仲良し兄弟だが俺達にだってプライベートはあるんだぜ此処に来るときは大抵一人だしな。」

S・A「へえ。何を買いにきたか聞いていいか?」

P4・D1「ふむお前も一緒に行くか恐らくT・O・・はまるで興味を示さないだろうがお前はそれなりに興味が湧くと思うんだがな。」

S・A「いいのか?ならついていかせてもらおう。」

秘密の本箱

S・A「・・・はー。知らなかったな。生前もこの街で生活してたしこのデパートにも来たことあるが、こんな所に本屋があるなんて。」

P4・D1「それはそうだろうな大体予想は出来ると思うがこの店を経営しているのはワレラだ俺より長くワレラをやっている奴でな俺が逆立ちしても敵わない程の奴なんだがそれくらいの奴でもない」と集められないような本が此処にはたくさんあるんだ。」

S・A「・・・いつも増してましく立てるな。」

P4・D1「秀一がいないからな秀一の分も喋るんだから仕方ない。」

大体なんでこんな変な話し方なんだろうか。

・・・めんどくさそうだから突っ込まないけど。

P4・D1「さあ入ろうぜ超面白いからな。」

引き戸の扉を開けると、古書特有の匂いが漂ってきた。

P4・D1「御免よA5・Ev。」

A5・Ev「おおペルソナか入れ入れ。」

P4・D1「言われなくても入るさほら左宇も。」

S・A「お邪魔。」

引き戸を閉めると暗くなった。

暗いがしつかり周りが見えるという若干不思議な感じだ。

A5・Ev「阿部左宇だな。」

S・A「驚いた知ってるのか？」

A5・Ev「無論だ。現世だろうが後世だろうが抛り所だろうが煉獄だろうが地獄だろうが天国だろうが私の知らぬことはない。」

そりゃ凄い。

全知全能と謳われる神さんも裸足で逃げ出すレベルだ。

P4・D1「それで今回の新作は？」

A 5・E v「ちゃんとピックアップしてある。自由に回れ。」

P 4・D 1「分かった行こうぜ左宇。」

S・A「お、おう。」

ペルソナについて奥に進んでいく。

なんというか、遠近感覚が狂う。

とても遠くにあると思う本が、その実すぐ近く手の届く所にある。

P 4・D 1「それは違うぜ相手がこっちの意思を読み取って寄って来てくれるんだよ。」

S・A「ほー。世の中には俺の知らないことが溢れてるな。」

P 4・D 1「神秘が詰まっている世界なのさ此処は。」

S・A「で、お前はなにを探してるんだ？」

P 4・D 1「ああ光っている本が新しく入荷された本だ見つけたら教えてくれ。」

S・A「それならあそこに、つといや此処にある。」

遠くにあつた光る本に意識を向けるとこちらに来た。

S・A「ふーん、見た目は大学ノートみたいだな。」

表紙には“Dynamic World”と書かれている。

P 4・D 1「動的の世界かA 5・E v。」

A 5・E v「その昔世界には、権限者と呼ばれる世界を一度だけ思うままに変えられる存在が居た。そのノートは、権限者が世界を変える時に使用していた物だ。」

ペルソナがぺらぺらとページを捲っていく。

びつしり詳細に世界の構造が書かれているページもあれば、一言で済ませているところもある。

A 5・E v「そのノートの特性は『実体験』。体験したいページに触れ“g i r o”と唱えれば体験出来る。ただ気をつける。中で死ねば魂は消費される。つまり中の人間が干渉してくるということだ。」

S・A「へーそりゃ面白い。」

金持ちになりたいとか独裁者になりたいだとかいう世界は詰まらな

さそうだが、殺人が常套化した世界つてのと小説の世界つてのは面白そうだ。

P 4・D 1「気に入ったみたいだな左宇 A 5・E v これ幾らだ？」

A 5・E v「負けて1京だな。消費税も負けといてやる。」

P 4・D 1「買った振り込んでおく。」

A 5・E v「まいど。」

・・・1京つて。

国家予算でも聞いたことがない。

P 4・D 1「まこれは後で秀一と妙を交えて遊ぶか。」

ペルソナが別の光る本を手にする。

にんびそつていほん

P 4・D 1「へえ人皮装丁本が久しぶりに見たな魔術関連の本かふむ人皮装丁本は欲しいが今更この程度のグリモアを貰ってもなキマリスの“図書館”に行けば腐るほどあるしてもキマリスは人皮装丁本は持つてないんだよな気に入らないとかでうーむこれは幾らだ？やっぱり秀一も連れて来るべきだ。

一度にこれだけの会話情報を盛り込まれても困る。

A 5・E v「それはな、お前が言う通り人の皮というところしか価値が無くてな。1億でいい。」

P 4・D 1「1億が大したことないな買った。」

A 5・E v「まいど。」

その後1時間に渡りペルソナは新書を漁り、べらべら感想を言い、全てをアホみたいな値段で買っていた。

俺は適当にその辺の本を立ち読みし、着実に本来の目的を忘れていった。

・・・だって面白いんだもの。

いざ小説へ

T・O・・・「ふーん。嘗めてる？」

S・A「いやだから悪いって謝ってんだろ……。」

P4・D1「まあいいじゃないかT・O……。」

E2・D1「そうだよせっかく面白そうな本を買ってきてあげたんだから。」

E・NE「……ところで、なんで俺が此処にいるんだ？」

S・A「呼んだ結果お前が此処に来たからだろ。」

T・O・・・「まあいいじゃない。どーせこの回はギャグ回なんだからさー羽目外そーよ。」

D・W／－「ははは。私も呼ばれているくらいだからな。」

一応知らない世界に行くということ、頭数いた方が安心という考えに至った。

そして知り合いのワレラに呼び掛けた結果、この面子になったのだ。

P4・D1「やっぱE・NEは構ってちゃんだよな。」

E2・D1「自分を殺した奴らと絡むなんて意味分かんないよね。」

・・・うーむ、それは俺にも言えることなんだろうか。

E・NE「か、構ってちゃん違う！」

D・W／－「なんでもいいが、そろそろ行かないか？私も何気に楽しみなのだが。」

T・O・・・「そーねー私も楽しみ〜。」

P4・D1「オーケーじゃあ準備しよう。」

E2・D1「さあみんな声を揃えていっせーのーで。」

全員「“g i r o”。」

プロローグ・彷徨う彼方・

この世を統べるのはただ一つの存在。

それがそれに気づくことは確定ではない。

気づけば変化し、気づかなければ時は経つのみ。

統治者が望んだ世界に世界は移行し――

S・A「なんだこれプロローグか？」

T・O・・・「そうみたいねー。」

P4・D1「A5・Evに聞いた話によると基本的にこの世界の時間に沿って進んでいくが早送りも可能らしいあと常時^{ろうたい}臙体でいるのも有り一回死んだら後は鑑賞モードになるそしてこれが重要なところだがこの世界にも俺達みたいな異能者が存在するイヴって言うんだがそいつは咎人50人分らしい。」

S・A「秀一にも話させるよ・・・。」

E2・D1「無理だよ僕はA5・Evから説明を受けてないんだから。」

そついえばそうだった。

常に情報を共有してるもんだと思ってたな。

「今、なんて言った？」

「おいおい耳悪いのかよ。早めに――」

D・W／-「む、本編が始まったようだな。」

E・NE「何時まで臙体でいるんだ？」

P4・D1「もうちよつとゆっくり見てようぜ。」

E2・D1「どういう話か探るのも大事だからねってあれ？」

S・A「どうした？」

D・W／-「T・O・・・ならさつき外に行つたぞ。」

・・・さすが協調という言葉を嫌う者だ。

「てめえらの為に働く事がだよ糞爺。察しろ馬鹿。」

「そうか。そうならそうと、はつきり言えばよかったんだ。そうす

れば、さつさと貴様を殺せたんだから」

ボタンと扉が開かれ、10人の武装兵が部屋になだれ込んできた。

「用意がいい・・・ってあれ？」

「お、おいどうした!？」

S・A「・・・はあ。」

壁を突き抜け廊下に出ると、15の死体が生産されていた。

T・O「・・・ははは死んでるのに生産っておつかし。」

S・A「いきなり物語を捻曲げてやるなよ。困惑してたぜ中の2人。」

「あれ、爺消えてるし・・・まあいいや帰るか。」

E・NE「あーあー。わけ分からなくなっちゃったな。」

P4・D1「まあいいでしょ。」

E2・D1「大抵こういう場面は主人公がどんな力の持ち主かを表現するところだしさ。」

飛ばしても問題はない、か。

T・O「・・・グロアデイが一気に10になったよラッキー。」

・・・先が思いやられる。

詰まらん、早送り

「というわけで敵が全滅してたんだが。」

「えらい楽に済んで良かったやん。」

「そういう問題じゃないと思うんだけど。」

「それについては追いついて追いついて考えればいいだろう。では今我々が一体どんな——」

S・A「ここは見る必要あるのか？」

P4・D1「もう少しすると最強クラスの奴が襲撃に来るみたいだ。」

E2・D1「で主人公（仮）が戦闘でも見逃されて終わりという有りがちな話だね。」

T・O「じゃーその強い奴を——」

S・A「いやこれ以上ごっちゃになるとかわいそうだ。もう少し早送りしようぜ。」

P4・D1「オーケー。」

E2・D1「早送りスタート。」

T・O「しかしみんな汚い言葉を使うわね。まるで洋画みたい。」

確かに出てくる奴の殆どが悪態をついている。

これ考えた奴はさぞ口汚い奴か、妙の言う通り洋画気触れの奴なんだろう。

ドカーン！

E・NE「爆発だな。」

D・W「あつちだ。」

臙体の便利なところは宙を浮いて移動出来る点だな。

超楽。

音の方に向かっていくと、関西弁の杵築宗司とかいう奴が壁に張り付きその先を見ていた。

行ってみると2人の男が対峙している。

「いちゃ悪いのかよ糞野郎。」

「いや。俺には関係ないしな。お前が此処で捕まりや好都合だし。」

P4・D1「1人はさっき如月薫達が自己紹介しあつた奴だな。」

E2・D1「もう1人は出宮真いわゆるラスボスみたい。」

ネタバレ早いな。

「子供つてのに警戒心働かせる奴は少ないんだよ。見た目が優等生、ん？」

出宮真は、杵築宗司が隠れている方に視線を向けかけたが・・・。

D・Wノ「あやつ、今こちらを見たな。」

S・A「やつぱりか？ 臙体のままだよな俺達？」

E・NE「鏡にも写らないしそうだろ。」

出宮真の方を向くとバツチリ目が合った。

・・・まあ流石はラスボスってことなのかな。

「なんだよ。」

「なんでもねーよボケ。ああ因みに——」

P4・D1「詰まん早送り。」

E2・D1「スタート。」

所変わって此処はアフリカらしい。

・・・暑い。

S・A「なんで臙体が暑さを感じるんだよったく。」

T・O・・・「あゝついー・・・。」

E・NE「今日も元気だ・・・水がうまい・・・。」

P4・D1「飛ばす？」

E 2・D 1「でももうちょっとで面白いシーンだから飛ばさない。」
じゃあ聞くな馬鹿。

「目に見えないものなんて無いのと同じだよ。探しているリモコンは、実は目の届く範囲、手を伸ばせば届く範囲にあるのに気づかない。それは探している当人にとっては存在していないのに同義だろ？ 僕の足場もそうさ。僕には見えるけど君には見えない。僕にとっては当たり前が存在するそれも、君にとっては架空の物体にしか過ぎないんだよ。だから触れることも壊すことも不可能なのさ。」

E・NE「なあ、あの田中太一とかいう奴が言っている見えない足場ってあれか？」

E・NEの指差す方には宙に浮いた土台。

S・A「みたいだな。」

普通に見えるんですけどが。

P 4・D 1「あれはどうやら俺達が出す剣や召喚体に近いらしい。」

E 2・D 1「言わばあれも霊体みたいなもんだからね田中太一は今の僕達を視認できるかも。」

・・・うん。

田中太一はさつきからちらちらこちらを見ている。

そのせいか田中太一と対峙している切裂男はイライラしている様だ。

S・A「これはいつそ堂々と観戦した方がいいんじゃないか？」

D・W / -「・・・いやあそこを見ても。」

T・O・・「あらー・・・春日井直太とセキムなんとかね。」

P 4・D 1「あと車に乗った組もいるからな。」

E 2・D 1「今出ていくと大分混乱しそうだね殺るなら一人ずつでしよ。」

殺すのは決定なのかよ。

P 4・D 1「あーそうじゃあ先に一応のラスボスを倒しにいか。」

E 2・D 1「んーじゃあチャプターは夢の後だねスキップ。」

飛ばさないんじゃないのか——

神は此処に。

神「ん。誰だ貴様らは。」

S・A「臆体意味ないみたいだな。」

可視体に戻る。

よく分からない空間に、高校生くらいの少女が居た。
シンプルな石造りの椅子に座している。

神「・・・ほう。外の世界から来た者とな。」

E・NE「なんかいろいろバレバレみたいなんだが。」

P4・D1「それはそうだろうな。」

E2・D1「なんたつてこの世界の神なんだから。」

神「よく分かっているようだな。全く、話を曲げおつて。」

T・O「それで、誰があの子とやるの？」

既にやる気満々の奴が1人いるな。

D・W「・・・私だ。」

そうお前だ。

D・W「・・・“祢々切丸”。」

神「ほう。面白い刀だな。“光の剣”。」

醍醐の祢々切丸に対し、神は光で形成された剣を構えた。

神「ああそうだ。貴様らも待っていることはないぞ。」

D・W「・・・この私に多勢に無勢をしろと言うのか？」

神「そうではない。出る光。」

光「はい。」

男が出てきた。

神「神話“聖者の行進”。“ゼウス”、“オーディン”、“トール”。」

P4・D1「おお・・・。」

E2・D1「これは・・・。」

・・・初めてこいつらの台詞に文末の句読点以外の符号が入ったな。

それも仕方ないか。

俺達も英雄、悪魔、天使、神話の生き物は召喚出来るが、神となると話は別だからな。

或いはそういった呪文があるかもしれないが、気軽に召喚したあいとと違い相応に支払わなければならないだろう。

P4・D1「・・・面白い。こいつらは俺達が殺る。72柱の1柱。序列13、85の軍団を収める魔神。怒りの召喚、ハシバミの杖を向け描く。奏者の鼓動に合わせ出陣。護符となる銀の指環。忘れることなく死の指へ運べ。我は告げるソロモンの封印を破る主。来たれ怒髪衝天の王“ベレト・ソロモン”。72柱の1柱。序列66、20の軍団を収める魔神。勇猛なる黒光りの戦士。文学。を与え、勇猛心を与え。悪霊の統括。迅速なる行動値。来たれ勇猛果敢の戦闘神“キマリス・ソロモン”全てを知る者、回答者。罪悪に対する行為を施行する者、報復者。鎖の断絶、壊せぬ物無し。“フラガラツハ”。」

E2・D1「光は左宇と妙に任せるよ“ボスディア・ラ・グロアデイ”。」

ベレト「なかなか面白い場面に召喚されたようだなキマリス？」

キマリス「その様です。」

ゼウス「ベレトか・・・。久々に現世に呼び出されたかと思えば素晴らしい娯楽が用意されていたなオーデインよ。」

オーデイン「ふん・・・確かに面白い。」

トール「ふははははは。」

やばいな。

あいつらが此処で暴れたら皆死ぬ。

S・A「おい、せめて偽装空間に入ってくれよ？」

P4・D1「だそうです頼みますベレト。」

E2・D1「じゃあそっちはよろしく。」

ベレト「仕方あるまい。44の軍勢、無限であり夢幻の攻域。最高末路の生き地獄、解放にして開放の死路。準備は出来た。最上の待

つ戦争を辿れ。“ロード・デス・ウォーヘル”。」

2人の人と2柱の悪魔、3体の神、2本の剣はベレトの世界に飛んでいった。

D・W／－「私はその様な呪文を記憶していない。移るなら早く移れ。」

S・A「了解。任せた妙。」

T・O・・・「あいあい。中途の地獄。贖罪の地。ある意味での報いある意味での封印。逃げ出す術は無く許されない。“煉獄プルガトリウム”。」

S・A「なんで煉獄をチョイスし——」

E・NE「俺も——」

光「・・・——」

T・O・・・「行つてきま——」

異種格闘技戦1

光「『光は創世の彼方より来、火に煌めきを、水に潤いを、大地に清々しさを、電気に鋭さを、物質に形を与えた。』」

S・A「たんだ！」

E・NE「行くのかよ！」

T・O・・・す。」

“煉獄ブルガトリウム”は中途半端な死後の世界を体現する偽装呪文。

此处で死ねば魂の数など意味はなく輪廻の環から外される。

T・O・・・いいじゃない。此处で生産される死体は一つか二つな
んだから。」

E・NE「おい、そのうちの一つは俺とか——」

T・O・・・あらよく分かったわねーえらい。」

E・NE「最後まで言わせる！」

・・・コイツ完全にキャラ崩壊してるな。

ある意味美味しい役ではあるが。

光「残念だが俺の死体は作れない。なぜなら俺には個人という概念がないからだ。光は名、影は体^{たい}。光が写し出せるのは、所詮影だけなのだから。」

S・A「意味は分かんが、取りあえずお前は倒させてもらおう。」
ストーリーはぶつちぎりで無視しているがこうなった以上さつさと殺ってさつさと本編に戻るしかない。

T・O・・・大丈夫。確実に殺す。“ボスディア・ラ・グロアディ”。

E・NE「戦乙女。戦死者を選ぶ女。バルハラの運び手ニールベルンの歌。“ワキュレール・ヒルデ・リュブン”。隠れ蓑。受け取る返り血。竜の魂。不死の騎士。終局にて墮落。ニールベルグの指環“ゲール・ジフ・リートシズク”。殺す。殺す殺す殺す。正義の

下に殺戮。騎士の名誉に於て殺戮。殺戮の下に殺戮。魂の蒸発。体の昇華。死の頌歌。集え裏切り指輪は点す。“ベルンズ・ニー・グリング”。

S・A「相変わらず詠唱拒否出来ないんだなどうでもいいけど。“ベルンズ・ニー・グリング”。“BLOODY-MARY”。

この3人の中で一番弱いのは俺だな。
T・O．．「んー一応やつとこうかな。輝け魂。昇華に継ぐ昇華。神聖の下に更なる誓いを。“サブゴッド・オブ・リメイション”。

おお。
妙の体がなんとか人みたく光る。

“サブゴッド・オブ・リメイション”はナイトの力を倍増させる呪文。

英語っぽいがこんな単語はない。

光「代理、Agenzia」。

代理「“Infinite army”無限の軍勢。出現するは真の影。」

Agenzia「“Gun Spada infinito”無限の剣銃。出現するは真の武器。」

S・A「．．．！」

E・NE「て、P4・D1にE2・D1！？それにD・W／-だと．．．！」

更に言うならその手には“フラガラッハ”、“ボスディア・ラ・グロアデイ”、“祢々切丸”。

しかも黒を纏っている。

E・NE「．．．済まないがT・O．．、召喚剣を貸してくれ。」

T・O．．「はいはい。“ダインスレイヴ”。サン・ピエールの歯。サン・パジールの血。司教サン・ドニの髪。サント・マリアの衣の布端。12勇士の魂。自傷の剣、されど壊れず眠りに就く。“デュランダル”」

E・NE「あ、ありがとう。」

ヒ「感謝します。」

S・A「俺は醍醐を殺る。E・NE達は太宰ペアを頼む。」

E・NE「分かった。」

光「では始めよう。」

神「貴様の名、D・Wノ-とはどういう意味だ？」

D・Wノ-「ふん。ちゃんと呼んでいるじゃないか。それで合っているし、轍醍醐のイニシャルだと思ってくれて構わん。」

神「そうかい。“Creativity is a Human Treasure”創造は人間の宝。“Slower than Light・But Quick”光よりは遅い。でも速い。“World of Ice”氷中の世界。“I Shouldn't Run out of Words・If it is Not of this World Have No”斬れぬ物など無い刀。有るならばそれはこの世の物ではない。」

D・Wノ-「・・・。」

なかなかどうして、こいつは恐らくP4・D1より強い。

神「さあやろう。きつと、暇潰しにはなる。」

D・Wノ-「己が潰れ、それで終わる。」

ベレト「真の影。スキア・ステマ“影の王冠”。」

キマリス「真桎梏しんしつこくの力。ただ単純に圧巻し殺す。アリスヤゼ・デオス“真戦闘神”。」

P4・D1「さてどうしたものか。」

E2・D1「僕らがツール。」

ベレト「うむ。それでいい。儂がゼウス。キマリスはオーディンをそれぞれ殺れ。」

ゼウス「ケルキオン。」

オーデイン「神馬スレイプニル。グングニル。」

トール「俺の相手は小さい弱者2人か詰まんね。」

P4・D1「言ってるデカブツ。」

E2・D1「確実に殺す。」

トール「神に対する態度を改めさせてやろう。ミヨルニル。」
神狩りか、一度やってみたかった。

異種格闘技戦2

S・A「千刃の谷」！」

偽轍「……。」

全て弾かれる。

所詮偽者と偽物なのにこれか。

“祢々切丸”を折った回数は既に三回。

光が出したAgentziaとかいう奴は武器を影で構成している。

どうやら見た物を光で投影しているらしい。

黒いオーラも見たまま投影しているだけだから実際のレベルは0っぽい。

もし20なら折れるはずがないし、逆に俺のグラムはとっくに折られているはずだ。

偽轍「ボソボソ。」

S・A「ッ！」

ストドドド。

“千刃の谷”か……！

S・A「ハアッ！」

偽轍「……！」

ガン、キン、カンカン、ギン。

偽者だが……太刀筋は本物だ……！

E・NE「ぐっ！」

ジ「く……！」

ヒ「ぬ……！」

どうやらあちらも強敵の様だ。

S・A「つと！」

繰り出される斬撃をぎりぎりで避ける。

そのままバク転して……。

S・A「とは、おっと。いかな！」

キン、ギギギバリン。

Create 剣・・・!

偽轍「・・・!」

“ 祢々切丸 ” を折り、勢いに任せて剣を投げつける。

S・A「げ・・・。」

あの至近距離で避けるか――

S・A「がつ!？」

D・W / - 「・・・。」

逆に蹴りを入られた。

S・A「げ!？」

また・・・ “ 千刃の谷 ” だ!

しかも祢々切丸とユニオン!

D・W / - 「・・・。」

S・A「間に合え “ 千刃の谷 ” !」

キンキンキンキン。

S・A「くそ・・・!」

ただの剣と、偽物とは言え祢々切丸だ。

差は歴然すぎ・・・る!

S・A「ぬわっ!？」

ズガガガガガ!

T・O・・・大丈夫かなー? 左宇君、おっとつと。」

光「大した奴らだ君達はっ!」

光の斬撃を難無く避ける。

T・O・・・そーでしょ? “ Gun Spada infinity

to ” 無限の剣銃。光の刃端^{じんたん}。」

光「ッ!」

細かい光の刃を投げつける。

体にしっかり着弾したが。

T・O・・・「やっぱりくらわないのねー。」

光「いや・・・そうでもない。」

T・O・・・「あららホントねー。体のあちこちが形成仕切れなくなってるねー。」

強いけど、大したことないわー。

代理の方が強そうね。

どうやらまんまコピーしてるみたい。

そりゃーあつちのが強いわよねー。

T・O・・・「ちっ読み間違えたか。」

光「無限の剣銃。光の刃た——」

T・O・・・「甘い。」

光「ぐ!?!」

光の右手を切り落とす。

T・O・・・「終わらせるね。“イステーク・ネスダク”！」

光「ぬわ!ぐはぎこつ!」

地面に礫にしてやる。

T・O・・・「・・・痛い?」

光「ふ・・・痛くない。けど終わりだ。良かったな如月薫。これで君も、更に——」

ザクッ。

T・O・・・「なーにわけ分かんないこと言ってんの。さっさと消えなさい。」

S・A「つと・・・!」

E・NE「あれ・・・?消えた・・・?」

ジ「・・・。」

ヒ「・・・助かりましたね。」

偽轍の“千刃の谷”の内の一刀が俺に直撃する寸前で消えた。

T・O・・・「だいじょーぶ？」

S・A「あ、ああよく分かんが助かった。ってお前のグロアディそれ・・・。」

銀のオーラを纏っている。

つまり11以上になったってことだ。

T・O・・・「ごちそーさまでした」。なんと500人分よ。」

そりゃすごい。

俺なんて15人分しか得ていないのに。

T・O・・・「じゃあプルガトリウム解くね。」

・・・他はどうなったかな。

異種格闘技戦3

P 4・D 1「げほ何回目だこれ。」

E 2・D 1「さっきので17回。」

トール「生意気な口を叩くだけはあるな。それなりに強く、魂を多数持つているとは。」

P 4・D 1「ははそうだろう貴様のミヨルニルも大したものだ。」

E 2・D 1「流石は本物だ是非頂きたいメギンギョルズとヤールングレイプルも合わせてな。」

トール「いや大したことはない。なにせ君達の脆弱な体、か細い腕、その手に握られる串の様な剣、どれも壊せないんだからな。」

復活すると壊したことはないのか。

P 4・D 1「そうだなだがそれはミヨルニルのせいではない。」

E 2・D 1「そうだね僕らが強いだけだよ。」

トール「そうか。では仕方ない。アースガルドの力を。」

ミヨルニルに雷と炎が絡み付く。

P 4・D 1「あらら。」

E 2・D 1「もう一死は覚悟だね。」

トール「良い覚悟だ。構えよ、その魂消えぬようにな。“雷鳴大光天蓋之炎”。」

天から炎と雷が降ってくる。

ついでにトールが振るうミヨルニルからも。

P 4・D 1「まあタダでは死なないよいくぜ“フラガラッハ”。」

E 2・D 1「その通りいくよグロアディ。」

ベレト「・・・やはり一筋縄ではいかないか。」

ゼウス「当然だ。一介の悪魔に負けていては、神など名乗ってはお

れんよ。」

ベレト「一介の神に負けては魔界の王とは名乗れん。」

ゼウス「……。」

ベレト「……ん、どうやらキマリスの奴は片を付けたいらしい。」

ゼウス「なに!？」

折れたグングニル。

もがれたスレイプニルの脚。

上半分が消えた、オーディンの体。

キマリス「……わはははははは。さすがに疲れたわい……。」

ベレト「よくやったキマリス。」

ゼウス「ぬ……。」

主はどうやら何回も死んでいる様だが……。

奴らを心配する暇は僕にもない。

ベレト「ふ。まあよいわ。僕も本気になる。これで終いだ。祭壇に

捧ぐ全能なる象徴。霞の向こうに残る眠り。水平線が地平線に混じ

り極光。錆つく鉄鎖に刻印。天蓋に昇る終焉の柵。砂上の楼閣にて

黎明の寝に就け。 “ D e u s O c c i d i t u r T e r r a r

u m ” 」

ゼウス「——」

異種格闘技戦 4

神「・・・！」

D・W / - 「どうした。」

神「・・・いや。ただ、オーデインとゼウスが倒れたというだけだ。」

ほう、もう2体もの神を殺したか。

神「ふん。貴様他人の心配をしている場合か？」

D・W / - 「ははは。未だに一度も殺せぬくせに大層な口をきくんだよ。」

左腕を切り落としたくらいでいい気になってもらっては困る。

神「確かに。累計すれば、入れられた数は私の方が多くくだかな。」

D・W / - 「千刃の谷・祢々切丸」、固定。“千刃の谷・村雨”、固定。」

しかし片腕が無いとバランスが取りにくいのは確かだ。

“千刃の谷”でカバーしないと若干厳しい。

神「ふふふ。面白いものだ。違う世界の住人だというのに、同じ名前で、同じような技が存在するとはな。」

D・W / - 「・・・なに？」

神「ふははは。比べるか？来い流星群。貫き、拘束しろ。“千刃の谷”」

D・W / - 「な・・・！ち、固定解除射出！」

キンキンキンキン。

済まない祢々、堪えろ！

右手にある真の祢々切丸を神に向かって投げつける。

神「小癪、な・・・！」

小賢しい手だが、『剣雨』を使わせてもらった。

D・W / - 「これで相子だな。」

一本の祢々が左腕を切り落とした。

D・W / - 「あまり好みではないのだ特性を使うことは。戦いにおいて、自らの力を信じていないことになるのだからな。」

神「構わぬ。そもがそもそも神性を持たぬ貴様が私との戦いで小狡い戦法を使うのは当然だ。」

D・W / - 「成る程。嘗められているな私も。」

神「そんなことはない。私もこれで、かなりの力を出している。だが、高次の生命体である私が貴様を未だに一度も殺せていないというのはなかなか由々しき事態だ。というわけで死ね。」

D・W / - 「阿呆な。」

神「逃れられぬ死を感じるがいい。一の雨、十の雪、百の風、千の死。世界に散らばる全ての狂気を貴方に。“インス・レド・インスデーノウ”。」

馬鹿な・・・！

神「ほう。知っているようだな。初弾が当たれば確實死、ということも分かっているな？」

D・W / - 「ふ、勿論だ。」

初弾に当たれば様々な痛みに蝕まれ死んでいく。

避ければなんということはないが・・・。

神「さあ踊れ。そして避ける。でなければ死だ。」

問題は初弾が億の雨ということだ。

D・W / - 「ふ、まあいいさ。抜けば玉散る氷の刃。“村雨”。」

呪文を詠唱し万全の体勢をとる。

そして村雨の特性『凍獄』に加え共通特性『氷纏』。

神「全てを凍り尽くすか面白い。行け死の雨。」

D・W / - 「いくぞ村雨眼前の敵を零に落とせ。」

異種格闘技戦5

ゼウス「……よくもやってくれた、悪魔の分際で。」

ベレト「ふん……。あの空間でここまで抵抗されるとは思わなかった。流石はゼウスだ。誇っていいそのまま死ね。」

ゼウスの体が光と散り消えていった。

ベレト「……主よ、僕は少しばかり疲れた。帰らせてもらう。」

P4・D1「はい……。かえ、ごふつ……。」

E2・D1「は……。がはっ、しんど……。」

返事はままならなかったがベレトは帰ってしまった。

トール「……は、ははははは。た、タンギリス二とタングニョー
ストを……。つれ、げほっがほ……。連れて来るべきだったなふは
はは……。」

トールの右腕は腐り落ち、腹には大きな穴が空いていた。

P4・D1「ま……。俺の魂は21消費されて、おまけに今は右脚
が無い。」

E2・D1「魂26消費……。右腕無し……。」

P4・D1「スマンな秀一特性を使わせたせいで。」

E2・D1「いいよ別に使わなきゃ勝てなかったろうし。」

トール「くはははは……。余裕だな貴様ら……。まだやれるが、
面白かったしこの辺で許してやる。」

ゼウスが消えた時のように光に包まれ消えていった。

P4・D1「最後まで……。」

E2・D1「豪快な奴だった……。」

いや……。待てよ、なにか忘れてるような……。

二人「……。あ。」

P4・D1「……。もう一回召喚する力はちよつとないな。」

E2・D1「シャックスなら召喚出来るでしょ代理を頼めば?」

P4・D1「仕方ないか。72柱の1柱。序列44、30の軍団を

収める魔神。命を運ぶ鳥。感覚の与奪者。財の限りを集め与え。来たれ虚言の侯爵“シャックス・ソロモン”。」

・・・

パチン。

シャックス「お呼びか主よ。」

P4・D1「あのさ指鳴らさないと出てこないってのやめてくれない？」

E2・D1「めんどくさい。」

シャックス「まあそういうな主よ。それで用件は何ぞや。」

P4・D1「此処が何処か分かるか？」

シャックス「ふむ。詰まらないテストですな。“ロード・デス・ウォーヘル”、ベレトの箱庭ですな。・・・ふむ、ベレトが見当たりませんか？」

E2・D1「そこまで気づいたなら察してくれ。」

シャックス「つまり解除してほしいということか。任せなさい。頂くモノは頂きますが。」

P4・D1「はいはい構わないよ100か1000か？」

シャックス「主です。100で構いませんよ。では頂きます。」

P4・D1「ぐ。」

体から抜けていく100の魂。

シャックス「確かに。ではいきます。解明。一重二重三重四重。連なる列なる層44。対象“ロード・デス・ウォーヘル”。“解除”。

「

エピソード・彷徨う彼方・

D・W / - 「……。」

決まった。

勝者は私だ。

「おいおいおい！どういうことだよこれは！未来！」

「私が知るはずないだろう。」

神は、壁に礫にされ絶命していた。

S・A 「……それで、どうする？」

T・O . . 「私はまだ余裕あるけど。」

E・NE 「……無理。」

P4・D1 「ま俺も遠慮しておきたいかな。」

E2・D1 「右に同じ。」

D・W / - 「私も限界だろう。」

全ての神族を殺し、偽装空間から帰還した俺達は現在臚体になり神の部屋に居る。

そこに真・ラスボスが来た。

戦うか戦わないかを議論しているが、反対多数でやめだな。

T・O . . 「えゝつまんないよ。」

S・A 「馬鹿、お前は良いかもしれんが俺達は良くないんだ。ちょっとは協調してくれ。」

T・O . . 「むゝ左宇君が言うなら仕方ないか。」

S・A 「よし。というわけだperlソナ。さっさと出よう。」

P 4・D 1「・・・あ。」

E 2・D 1「ペルソナもしかして。」

P 4・D 1「出る方法は聞いてないやあはは。」

おいおい勘弁してくれよ・・・。

「帰りたいか？」

・・・此処に来てから一番最初に聞いた声が響く。

S・A「・・・醍醐。」

D・W / -「感触が軽すぎたからな。想定範囲内だ。」

神「ふむ。貴様はとて素晴らしい戦士だ。誇れ。」

D・W / -「ありがたく頂戴しようその誉れ。」

神「では改めて聞こう。もう帰りたいか？」

P 4・D 1「今回はここまでだ。」

E 2・D 1「消費し過ぎた。」

神「そうか。では帰そう。さらばだ。これが今生の別れとならぬよう祈れ。」

エピソード・奇妙な一日・

S・A「・・・は!？」

いつの間にか妙の家に居た。

T・O「・・・んゝ。眠い!。」

隣で妙が目を眠そうに擦っている。

E・NE「・・・。」

P4・D1「いやー楽しかった。」

E2・D1「疲れたけどね。」

D・W / - 「楽しいこととは往々にしてそういうものだ。疲れを最後に感じてこそ、その体験は楽しかったことだと認識できる。多分。

」

醍醐も疲れているようだ。

多分なんて普段は使わないだろうに。

S・A「・・・あー体が痛い。とりあえずお開きか？」

T・O「・・・そーねー。いつまでも家に居られると不快だし!。」

E・NE「・・・ずばずば言い過ぎだろ。」

P4・D1「しかし実際そうなのだとお暇するでしょう。」

E2・D1「そうだね“スロトル・オロスケル・ハウンドヘルベ”

バイバイ。」

太宰兄弟はケルベロスの背に乗り出ていった。

そういう生き物じゃないだろ・・・。

S・A「あれ? 醍醐はいつの間にか居ない・・・ん?」

紙切れが落ちている。

「また会おう。」

・・・これじゃ泥棒とか悪者みたいだぞ。

E・NE「んー・・・! じゃあ俺も帰るかな。」

T・O「・・・さっさと出てっ。」

E・NE「・・・酷い奴。じゃあなS・A。」

S・A「ああ。」

E・NEは颯爽と窓から飛び出し落下していった。

E・NE「ぎゃー!？」

そしてその下には確か電気の罾が仕掛けられていたな。

S・A「尊い犠牲がまた一つ。」

T・O・・・「あはは酷い奴ね〜左宇君は。」

お前が言うな。

S・A「あれ？ペルソナの奴Dynamic Worldを忘れてるぞ。」

床に放置された大学ノート。

ぺらぺら捲ってみる。

S・A「・・・あーあ。」

T・O・・・「どつたの？」

S・A「見てみるよ。」

所々に、幽霊という言葉が追加されている。

・・・全く、おかしい一日だった。

プロローグ・絶者の予言・（前書き）

またか。

これは一筋の希望を勝手に見出だされ勝手に目覚めさせる。
してやったりはただの絶者。

絶つ者が希望に繋げるなんて馬鹿らしい。
全てを絶たぬのなら貴様を絶つまでだ。
朧の夢に身を任せていたかつたんだな。
永久にそこから抜け出せなくしてやる。

ブローグ・絶者の予言・

「もしそこのお嬢さん。」

女「ん？あたし？」

「そうそう。いやー君は今日ついてるよ。」

女「いきなりなに？ナンパみたいな？」

「なに、私はしがない占い師さ。今日の君は最高についているよ。今朝食べた卵が双子だった、なんてことはないかな？」

女「双子だった……。嘘マジで占い師？だとしたら超凄いなだけど。」

「君は今日運命の人に出会うよ。その人とは赤い縁で結ばれているようだ。」

女「えーそれマジ？」

「私の占いはそれなりに当たるんだ。まああまり期待せず待ってみたまえ。」

女「そう？ま、いいやありがとじゃあね。」

高校生くらいの女が遠ざかっていく。

全く、アホの至りだな。

占い師が今朝の卵の双子か否かなんて分かるはずもないのに。赤い縁で繋がっている人と出会うのは本当だけど。

「……赤い。赤過ぎる縁だね。」

珈琲片手に会話は弾まず

「緊急ニュースです。本日午後4時過ぎ、新西市新西町15番通りで女子高生が男に刃物で刺され意識不明の重体に陥りました。男は通行人に取り押さえられ通報を受け到着した警察により現行犯逮捕されました。調べに対し容疑者は――」

・・・虫酸が走るニュースだ。

カウンター奥から聞こえるアナウンサーの声に思わず舌打ちしたくなった。

E・NE「落ち着けよD・W/-。ムカつく気持ちは分かるけどそれは全ての前に立ってからぶちまけりゃいい。」

D・W/-「分かっているさ。」

コーヒーを飲み気を落ち着かせる。

E・NE「しかしなんだな。2回も殺してくれた相手とこうして喫茶店で話すなんて俺はやっぱおかしいのかも。」

D・W/-「男は拳で語り、背中では和解し、そして友になっていくものだ。」

E・NE「そういうもんかね。まあいいや。で？今日はなんでまた俺なんかを呼び出したんだ？」

D・W/-「それはだな――」

「えー速報です。先程病院に搬送された女子高生ですが、搬送後間もなくして死亡が確認されました。」

E・NE「まさか、と思うが今のニュース関連か？」

D・W/-「なかなか察しがいいなE・NE。あれに関わったのはdIn/。」

E・NE「は？それ・・・本気で言ってるのか？」

D・W/-「本気だ。」

E・NE「・・・で、なんで俺なんだ？」

D・W/-「お前が良い役だからだ。」

E・NE「は？」

D・W / - 「いやなんでもない。兄弟は損得感情で動く。ハンシャはそもそも興味を示さない。」

E・NE「左宇はどうなんだよ。」

D・W / - 「お前が断った場合当たるつもりだ。」

・ ・ ・ ま、十中八九乗るだろうがな。

E・NE「・・・いや協力する。」

D・W / - 「そうか。それはありがたい。」

E・NE「俺はなにをすればいいんだ？」

D・W / - 「世界のワレラベスト30なんかに入っている輩は、大抵常の者と同じ様な生活をしている。私やハンシャ、左宇に兄弟のようにな。だからお前はdInノが働く会社を見張ってほしい。」

E・NE「・・・いや。いやいやいや。ちよつと待て。なんだその

“世界のワレラベスト30”って。」

D・W / - 「おや知らないのか。0Zが纏めたベスト30があるんだ。ただ0位が3人いて22、23、24がいないがな。」

E・NE「なんだそりや・・・。あ、俺！俺は入っているのか？！」

D・W / - 「ふむ。ちょうどいい機会かもしれないな。教えておいてやろう。お前が知る名も多数入っているのだからな。ではモノローグスタート。」

E・NE「は？」

モノローグ・世界のワレラベスト30 -

先ずは第0位の3人から紹介しよう。

何故0位かと言うと、戦闘をしないからである。

戦闘をしないのに何故ランキングに入れるのかと言えば、誰も手出しが出来ないからだ。

戦わなければ勝ちも無し、逆もまた然りというわけだな。

では第0位の1人目、言わずと知れた0Z。

奴はあの空間から出られないし、あの空間での戦闘は不可能。

第0位に入るには十分すぎる奴だ。

2人目はXanaこと佐奈。

奴はワレラになってから今まで、自らの特性である『桃源郷^{パラディソス}』の中に引きこもっている。

干渉は不可能であるから第0位。

最後に3人目、h/s。こと椎名サンザ。

『存在値^{ソマ}は光の屈折^{フォス}』という自らを透明化させる特性を使っており干渉不可能。

さあここからまともなランキングの開始だ。

口を挟むんじゃないぞE・NE。

第1位、Ve・IEこと不快者。

特性は『確率破綻^{タクスイスバオ}の国^{アフトラリア}』、詳細は不明だ。

第2位、は目の前にいる私D・W/-こと轍醍醐^{カデユタ}だ。

特性は『深部^{カデユタ}に至るは全てを知った^{プロフォンダ}』、あらゆるモノの“深部”に入り込む。

第3位、G・X、詳細不明。

第4位、G4・NE、詳細不明。

第5位、T・O。こと大城妙^{レフレクシオ}。

特性は『反射^{レフレクシオ}>ハンシャくの国^{テッラ}』と『強制解除』。
詳細は省く。

第6位、P4・D1こと太宰・ペルソナ。

特性は『ブックレット古書』、詳細は省く。

第7位、d0GCこと選択者。

特性は『ファイトウス神の意志などないに等しい。ムーターテイオー取捨はまた容易く』、全ての事象に対して等しく“選択”する権利を得る。

第8位、DIEことダイオレス。

特性は『ヤクトルザイル殺意の咆哮響く国』、空間転移特性で詳細不明。

第9位、Deetことディート。

特性は『ソヴァロ繊細なる殺意の国』、空間転移特性で詳細不明。

第10位、d0SIことディオス。

特性は『アベルヒズムスアリウム殲滅帝国』、詳細不明。

第11位、S・Aこと阿部左宇。

特性は『エラヒストス最奥の地下水路』、詳細は省く。

第12位、J・A5こと古賀奈保。

詳細不明。

第13位、E。Xこと出宮真。

特性は『ハコニワ真理の国』、詳細不明。

こいつはそもそもワレラかどうかも怪しいらしい。

第14位、SIONことシオン。

特性は『フォティア火となり灰となれ』、人以外のモノを爆破したり出来る。

第15位、IEIことサナイ。

特性は『インフニターカケル無限の廻廊続く国』、詳細不明。

第16位、THUNことサン。

特性は『プロエレスラヴノス原点の雷』、詳細不明。

第17位、Ningこと中田。

特性は『バゴノ凍える寒さの水面に落ちろ』、空間転移特性で詳細不明。

第18位、CAbTこと兜。

特性は『スコタディ暗闇の空』、詳細不明。

第19位、EUことレンゴウ。

特性は『エヒロギ選択するは個人の自由』、詳細不明。

第20位、dInノことルチアーノ。

特性は『アベルヒスミア望みを絶つ海』、99の希望を与えてから1の絶望を与えることで100の絶望に変える。

第21位、A・A0こと吾桑。

特性は『エビスイミア快楽主義者の空』、対象に快楽をぶつけ溺死させる。

第25位、E2・D1こと太宰秀一。

特性は『エモニ支えの空』、詳細は省く。

第26位、D・G0こと裁断介添人。

特性は『ウェールス真偽じゃ我の前に明快』と『ベッルス裁断介添人』。
詳細は省く。

第27位、DIE/Kこと殺人請負人。

特性は『スコトノバリヤツオス殺人請負人』、詳細不明。

第28位、D・G0ノこと裁断請負人。

特性は『ディカステイリオ裁断請負人』、詳細不明。

第29位、Ediaこと自殺介添人。

特性は『自殺介添人』、詳細不明。

第30位、伍堂の女。

特性は『トウツト他者の愛』、死んだ魂を束縛し投げ所に連れていくことでワレラとする。

これが現在のランキングだ。

消費税は我社が負担

D・W / - 「一人語りというのは疲れる。」

E・NE 「ご苦労さん。しかし左宇の奴も入ってんだな。俺より後にワレラになつたくせに・・・。」

D・W / - 「奴の特性はかなり特殊だからな。」

実際に使われれば抜け出すのはほぼ不可能。

基本的に殺されることしか選べないらしい。

E・NE 「ふん、まあなんでもいい。実際にd I n / とやるのはお前なんだよな？」

D・W / - 「当然だ。お前はなんとなく見張っていればいい。」

奴は特性以外そこまで特筆すべき力は持っていない。

恐らく、まともにやればE・NEなら勝てる。

だが奴は私がやらなければならない。

E・NE 「ああ分かった。」

D・W / - 「あまり近づくと、お前が奴の特性に巻き込まれる可能性があるからな。」

E・NE 「オーライオーライ任せとけ。で、絶者の野郎はどこに居るんだ？」

D・W / - 「奴が今潜り込んでいるのは萩矢^{はぎや}建設。市街地のビル群を建設中の会社で、奴はその指揮を任されている。」

E・NE 「へえ。かなりの遣り手だな。」

D・W / - 「建設現場から東に50m程離れた場所に部屋を確保しているから、そこを使ってくれ。」

E・NE 「準備がいいこつて。じゃ早速行ってくるわ。マスター、勘定置いとくぜ。」

E・NE はカウンターに小銭を置き出ていった。

全く、頼んでおいてなんだがお人よしな奴だ。

奴は実益主義者じゃないのか？

マスター「相変わらず威勢がいいなあいつは。」

D・W / - 「む。マスターはE・NEと知り合いだったのか？」

マスター「ああ。あいつが生きておる時から知っている。ハハハ。それに、なにを隠そうあいつをワレラにしたのはこの私なのだ。」

D・W / - 「ほう。それは初耳だ。」

マスター「だろうな。時に醍醐。」

D・W / - 「なにかな？」

マスター「あいつ10円3枚ばかり置いていきよったわ。あと270円、立て替えといておくれよ。」

D・W / - 「・・・。」

奴に頼んだのは間違いだったか。

情報は光より速く

T・O・・・聞いたわよ。D・W／－？」

D・W／－「・・・いきなりなんだハンシヤ。」

翌日の放課後、屋上から街を見渡していたところにT・O・・・が来た。

因みに昨日はE・NEからの連絡は無かった。

定時連絡は義務付けておくべきだったかもしれない。

T・O・・・「ルチアーノを殺るんではよー？　ようやく99溜まったのかしら？」

D・W／－「いやまだだ。が、随分良い夢見させてもらった。次は奴に快眠を貪らせる番だ。」

T・O・・・「ふーん。頑張つて。」

とだけ言い残しT・O・・・は屋上から飛び降りていった。

D・W／－「階段は昇るためだけにあるのではないんだぞ。」

大体奴はなにをしに来たのやら。

ん・・・次は召喚体か。

D・W／－「E・NEのジークフリートか？」

ジ「よく分かりましたね。主からの報告を伝えに参りました。まず、昨日はdIn／の出現が認められなかったので報告はしませんでした。」

D・W／－「それについてはどうでもいい。なにと言わないということは基本的になにも起こらなかったか、若しくは黙っていなければ不味いことが起きたという場合だからな。」

今回の場合で後者は有り得ないだろう。

ジ「報告を続けます。本日午後3時dIn／が現場に来ました。」

D・W／－「死者は？」

ジ「・・・よく分かりましたね。」

D・W／－「伊達に奴を殺そうとしているわけではないんだよ。」

ジ「成る程。昨日の死者は4人、2人は転落死、1人は後退するトラックに巻き込まれ死亡。残る1人は・・・人柱になっているでしょうね。」

絶望の真骨頂だな反吐が出る。

ジ「ただ不思議なことに、他の作業員はまるで意に介していませんでした。」

D・W / - 「奴が制御しているからだ。奴の特性である『希望を絶つ海』は、貴様も知っているかもしれないが、99個の希望や幸福感を与えてから1つの絶望を与えることで全てを絶望に変える。」

最後の絶望で死ぬのが希望である。

D・W / - 「あの現場の奴らで死んでいない奴は、まだ99個の希望を得ていない。」

ジ「・・・要点だけ教えてもらえますか？」

D・W / - 「ふん。なかなか言うなジークフリート。まあいい。奴らにとつては“同僚の死”も希望と同等ということだ。だから疑問に思わない。これでいいか召喚体？」

ジ「成る程十分です。」

D・W / - 「報告は以上だな？帰ったらE・NEに伝えてくれ、何か起きようと起きまいと半日毎に私に連絡をくれ、とな。今日みに召喚体を使いに出すのもよし。電話なりをするもよし。E・N Eが自分で報告に来てもいい。」

ジ「随分適当ですね。」

D・W / - 「常時見張っている必要はない。基本的に奴は昼間しか現れないからな。」

だが、奴があのか社に入りあの現場の監督になったことにはなにか訳があるはずだ。

D・W / - 「・・・ああそうだ忘れるところだった。奴をこれから1ヶ月監視する中で、夜現れた日にちを記録しておくことも伝えておいてくれ。」

ジ「了解しました。では私はこれで。」

D・Wノ「ああ。よろしく頼む。」
ジークフリートは消えた。
私も帰ろう。

Hello “Despair” Goodbye “LIFE”

dInノ「じゃあ一旦休憩。解散してよし。」

掛け声を切つ掛けとし、作業員達は方々に散らばって各々弁当を広げはじめた。

今日も今日とて5人作業員が死んだ。

いやあ着々と死んでいく。

ビルの建設は捗らないが、こちらの用は順調に終わりへと近づいているな。

男1「ん？どうした青い顔して？」

男2「や、やややつちまった。この弁当消費期限が10日も過ぎてる……。しかも生牡蠣……。なんか臭うとは思っただけど……。」

「

あいつは牡蠣が好物だ。

あの弁当は差し入れとして私のボスが持ってきたものだったな。

……。ふ、全く乙なことをする奴だ。

男2は99個目の幸せを牡蠣で得たが、最後の絶望も牡蠣で得た。なんと皮肉なもんだ。

男1「監督！」

dInノ「ああ聞いていた。直ぐに病院に行つて胃洗浄なりをしてもらえ。誰か車を出せ。」

あははははははは、今日は好調だ！

これで6人目、合計54人が死、若しくはそれに等しい絶望を味わい堕ちていった。

この調子ならば地の蓋が開くのも時間の問題だな。

男1「しかし奴も不幸ですね。大体あの弁当はどこで買ったんだろ。訴訟もんですよこれは。」

dInノ「さあな。あいつが無事に帰ってきたら聞くとしよう。さあ作業再開だ。私は少し用があるので後は任せる。」

男1「分かりました。」

男1に指揮を任せ、車に乗り込み現場を離れた。

・・・ついて来ることはないか。

2週間程前から見張られているような気がする。

何処から見られているか、誰に見られているかは分からない。

ただ言えるのはあまり感じの良い視線ではないということだな。

まあいい、追って来ないならそれで良し。

警察などの常の者なら追跡されても一向に構わないが、ワレラとなると少し不味い。

今から会う奴は、我々の世界では少し有名過ぎる奴だからな。

dInノ「つと、この喫茶店か。」

“LIFE”という喫茶店の狭い駐車場に車を停める。

dInノ「さて、奴はもう来ているかな。」

木の扉を開くと軋む音と共に、カランコロンという如何にもな音が響いた。

・・・客は誰もいない、か。

dInノ「マスター、珈琲をブラック、ホットで頼む。」

マスター「あいよ。」

一番奥のテーブルに陣取り、鞆からノートパソコンを取り出す。

えー、今日死んだ奴はつと・・・。

人差し指二本を駆使し名前と死に方を入力していく。

「いやいや。“駆”使、というよりは“苦”使、って感じで漢字だぜルチアーノ。」

dInノ「・・・音も発せず現れるな。そしていきなり現れて人の心を読むな。」

いつの間にやら前の席は男に奪われていた。

マスター「あいよ、ブラックお待ち。連れの方は何を？」

男「俺もブラック・・・に砂糖大匙50杯くらいでミルク入れてくれ。」

マスター「あいよ。」

男「喉渴いたから珈琲砂糖大匙2杯にミルク入り頼むわははは。」
マスター「あいよ。」

微妙に砂糖が残ったカップを、ソーサーは残し持つて行った。

dInノ「・・・いいのか？」

男「おいおいルチアーノ。俺に塵芥^{ちりあくた}同然の有象無象共と同じ行いをさせる気か？だとしたらははは。支払う対価は多大になるぞ絶者？」

dInノ「ふん。誰もやれとは言っていない。お前がいいと言うならそれで良しだ。」

男「ははは。で、お前は何を言おうとした？」

dInノ「見張られているのは分かっているが、どうも片手間に見張られている気がしてな。」
適当に見張っている。

こちらに対する殺気を感じない
位置を変えようとしな。

男「つまり害意はない。狩る必要もなし。」

dInノ「そういうことだ。ただ、相手は私の特性を理解しているようだ。決して有効範囲内に入ってこない。」

男「本当に見張っているだけというわけだな。」

見張っている奴に心当たりがないわけではない。

男「ああD・Wノ-か？」

dInノ「そうだ。」

奴が伍堂の女を殺した時、私もたまたまそこにいた。

奴は我が特性『希望を絶つ海』に完全に触れた。

その時から今まで、程度に差はあるが奴もだんだん希望に蝕まれている。

dInノ「D・Wノ-は現在82の希望に蝕まれている。あと17の希望を経れば、奴にも絶望する権利が与えられる。その前に私を殺しておきたいんだろう。」

男「成る程。残念ながら見張っている張本人はD・Wノ-じゃない。

E・NEというワレラだ。」

dInノ「E・NE・・・？聞いたことがない。」

男「だろうな。新西市以外で知っている奴なんていないだろう。ただ、剣の腕だけで言えばお前より遙かに上だ。下手に前に出でもしたらお前が死ぬかもしれないぞあははははははは。」

dInノ「忠告として受け取っておこう。」

男「そうしておけ。地の蓋が開くまで、負の感情はあとどれくらいいる？」

dInノ「私がやればあと20といったところだ。」

男「ふむ。俺がやるとなるとあと2000以上ということか。それは面倒だ。」

dInノ「私がやるのだから心配はない。」

男「当たり前だ。」

マスター「珈琲砂糖大匙2杯にミルク入りお待ち。」

男「おっサーンクス。今の分かるか？オッサンとサンクスを掛けたんだよはははは。オッサンって言っても渋いオッサンだから安心しなマスター。」

今度はいいタイミングで珈琲が運ばれてきた。

ちゃんとした会話が聞こえているんだ当たり前か。

dInノ「では私はそろそろ行く。部下には1時間で戻ると言っているからな。」

男「大した勤労意欲だ涙ぐましい。」

dInノ「ふん。なんとも言え。」

男「じゃ頼んだぞルチャーノ。」

dInノ「了解した。じゃあなヴュール。」

こんにちは“Hope”

何故？

何故お前が？

何故お前が生きている！

D・W / -「・・・くっは！は、は、は、は・・・。」

これで95か・・・。

生唾を飲み込み平静を取り戻す。

D・W / -「はー。ふー。・・・全く、これが希望だと？

笑わせてくれる。

いや・・・若しくは私ですら到達出来ぬ深部にこそ隠された希望なのかもしれない。

あの方に会う、それがどんな方法であれ、どんな状態であれ、どんな時の場面であれ。

会うことこそが私の希望なのかもしれない。

D・W / -「・・・は、ははははははは。だしたらお笑いだ。

この末路を知る私にとってはお笑い以外の何物でもない。」

E・NEに見張りを頼んでから今日で一月。

奴を殺るならさっさとするか。

まだあいつの背後に誰が潜んでいるかは読めないが、なにをする気が分かったのだから十分。

ただ、その“なにか”が引き起こす事象は未だ分からない。

・・・まあそれは奴を捕まえれば分かることだ。

この夢も茶番も、全てを今日終わらせてやる。

屋根に出て朝日を眺める。

・・・さ、学校に行くか。

E・NE「今日決行か。」

D・W / - 「ああ。」

学校の屋上でE・NEと落ち合う。

T・O . . . 「侍バーサス絶者かゝ楽しみね。」

P4・D1「伍堂の女より格は上だからな絶者は。」

E2・D1「でも絶者自体はあまり強くないよねE・NEでも勝てるよ。」

E・NE「・・・一々俺を出すな。」

何故かハンシャに兄弟。

S・A「俺は全く理解出来ていないんだが。」
左宇までいる。

T・O . . . 「見てれば分かるよ。ただし近くでは見れないけどね。」

P4・D1「あいつの真価は近づいた時発揮されるからな。」

E2・D1「これ以上言う不公平で面白くないから言わないけどね。」

D・W / - 「いらん。俺はもう行く。手を出したらお前らも殺す。」

S・A「出さないよめんどくさい。」

・・・こいつはだんだんT・O . . . に似てきたな。

E・NE「もし死んだら骨は拾ってやるから安心しろ。」

D・W / - 「万に一つも有り得ないから安心しろ。」

全く、やはりこいつは良い役だ。

D・W / - 「じゃあな。」

屋上から飛び降り暗闇に身を任せる。

さ・・・終わらせるか。

絶大絶望

・・・暗闇は視界を遮るに能わない。
欺体の便利なところだ。

ビル群建設予定地は暗闇と静寂に包まれている。

町外れということもあり、民家も少ない。

D・W / - 「・・・ここで人が死んでも気づかれにくい。良い場所を得たなルチアーノ。それとも絶者と呼ぶか？」

鉄骨の陰から男が現れた。

dIn / 「どちらでも構わないよD・W / -。それとも侍とも呼ぶうか？」

D・W / - 「どちらでも構わない。」

dIn / 「・・・ふふふ。お前としては早く戦いを終わらせたいだろうな。」

D・W / - 「そんなこともないさ。貴様の目的と、バックを知りたいからな。」

dIn / 「ふん。目的すら理解していなかったか。」

D・W / - 「いや。大まかな目的は分かっている。この地に絶望を集めている。そうだろ？」

dIn / 「あはははははは。そんなことはガキでも推量出来るぞ。本質に辿り着くことはないようだな。」

D・W / - 「いいや。辿り着くさ。お前が口を割ることだな。」

“千刃の谷・祢々切丸” 固定。

天上に祢々切丸を設置する。

dIn / 「祢々切丸と“千刃の谷”のユニオンか。成る程私では到底太刀打ち出来ん。」

D・W / - 「では最後に問うてやる。貴様の目的の本質はなんだ。そして、貴様に命令したワレラは誰だ。」

dIn / 「ふ。箝口令が敷かれていてな。さすがのあいつもこれば

かりはばらしたくないらしい。」

D・W / - 「そうか。ならいい。どうせ貴様を殺せばその目的も達成出来ないんだからな。」

固定解除祢々切丸。

d I n / 「何故そうなる？」

D・W / - 「貴様の特性、『望みを絶つ海』が必要で、恐らくそれがないければ難しい目的達成なのだろう？でなければ貴様一人に任せず一緒にやるだろうからな。」

面倒だから人に任せるなんて非合理的なことをしても益ないのだから。

d I n / 「私の特性は対象を選べない。だから近寄らないとは考えないのか。」

D・W / - 「さあ？ま、正直な話どうでもいい。」

d I n / 「は？」

貴様を殺すか、殺しかけた所に真に倒すべき相手が出てくればそれでな。

いけ祢々切丸、眼前の敵に降り注ぎ切り刻み抹消しろ。

d I n / 「・・・“絶大絶望”。」

一本だけ抜き出た祢々切丸が、他より早くルチアーノに襲い掛かる。

・・・何故何もしない。

“千刃の谷”を撃ち返すくらいは当然すると思ったが・・・。

そして脇腹に祢々切丸が刺さつ――

D・W / - 「ぐ！？固定再開空間凍結！」

ルチアーノの眼前5m付近で、残り999本の祢々切丸が宙に停止する。

d I n / 「ごほ・・・よく止めたなD・W / - 。」

D・W / - 「く・・・。」

・・・久しぶりに流血した。

奴の脇腹に出来た傷と同じモノがこちらにも出現した。

d I n / 「『望みを絶つ海』はな、何も・・・く、痛いなこれは・・・

・。何も、99の希望を与えなんて悠長な特性じゃない。・・・は、はははは。まあここから先は、自分で考えるんだな。」

D・W / -「・・・言われなくても分かっている。」

“千刃の谷”解除。

パンと言う音がし、999本の祢々切丸は消えた。

D・W / -「・・・ッ。」

なかなか痛いぞ祢々。

dIn / 「さあどうした侍！ちゃっちゃっと殺したいんだろ？私は、動かないぞ。」

・・・大体予想はつく。

奴が受けた傷を、それを与えた奴にもくらわせる。

下手をすれば与えた奴が先に絶命する場合もあるだろう。

絶大絶望、というところだな。

自らの手で、刺そうとも思っていなかったとどめを受けるなんて最大の絶望だ。

しかし奴が攻撃を受けてからこちらに傷が来るまで時間差が3秒程ある。

奴が死んでもこれが発揮されるか否かが問題だ。

刺し違える覚悟でいけばそんなこと気にするに値しないが・・・。

D・W / -「もういい面倒だ。私はなdIn /、真面目な言葉遣いをしているが元来適当人間なんだよ。あまりぐちゃぐちゃと考えるのは好きではない。事闘争に関してはな。」

dIn / 「ほう。ではどうする気だ？」

D・W / -「・・・せめて構えよ絶者。あまり脱力されると斬る気が湧かぬ。」

抜けば玉散る氷の刃。

“村雨”。

dIn / 「・・・いいだろう。Create剣。これで満足か？」

D・W / -「ああ。」

『深部に至るは全てを知った』。

d I n / 「 な . . . ! ? 」

深部を使い一気に間を詰める。

D . W / - 「 . . . 死ね絶者。

新西から消え失せる！」

A g a i n “ D e s p a i r ”

結果から言えばまだどちらも生きている。

d I n / 「ぐ．．．。噂には聞いていたが、まさかあれ程早いとはな．．．。」

D . W / - 「．．．。」

奴の構えた剣を空気を斬るが如く通り抜け、右の肩口を斬りつけた。同時にこちらの肩口にも切り傷が発生。

傷口を凍らしてから後退した。

ち．．．奴に近づけばそれだけラグも短くなるか。

奴を斬るにはまさに決死を覚悟せねばならんらしい。

d I n / 「99。」

D . W / - 「．．．なに？」

d I n / 「お前の希望は99溜まった。」

D . W / - 「．．．貴様。」

d I n / 「不用意に近づいたお前が間抜けなんだ。私に近寄れば『望みを絶つ海』の効果が加速度を増すことくらい想像出来るだろう？」

D . W / - 「く．．．。」

確かに甘かった。

d I n / 「ははははははは。では味わえ絶望を！」

バン！

辺りが一気に暗くなる。

いや違うこれは．．．暗くではなく黒くだ。

欺体の目をしても見切れぬなど黒しか存在しない。

此処はどこだ。

．．．じ．．．るじ．．．！

段々黒が晴れていく。

同時になにか聞こえてくる。

・・・ある・・・るじ！

D・W / - 「・・・！此処は・・・。」

「主！」

D・W / - 「ッ！？は、は、は・・・。」

「主、大丈夫ですか？顔色が優れないようですが。」

D・W / - 「・・・いや、なに。大した事はない。」

「左様ですか。ならばいいのですが・・・。」

険しい山道ゆえ、臣下が君主の御身を気に掛けるのは当然であろう。
山伏の格好で歩き通すこと数日。

束の間の休息もままならず歩き続ける。

「しかし、ここまで手が伸びているとは思えたくありません。」

D・W / - 「ふ、全くだ。私やお前はともかく、他の奴らはそろそろ休まねば死んでしまつたろう。」

「そんな！我が君主倒るるまでけてこの身は挫けません！」

D・W / - 「はははは冗談だ。皆のことは頼りにしておるよ。」

冗談を言うも空元気からの事。

無い元気など仮初めに過ぎず、再び山の沈黙に包まれる。

「・・・！主。検問だ。」

D・W / - 「く・・・此処まで来てもか・・・。」

押し通るには些か不利か。

我が隊は疲弊しきっている。

D・W / - 「・・・山伏だと言い張り通るしかあるまい。私は面が割れている。頼むぞ。」

「御意。」

笠を目深に被り後ろに下がる。

隊随一の巨軀を誇る我が一番の臣下が先頭にたち検問に臨む。

「待たれよ。其の物達は何者か。」

「見て分からねかお侍殿。我等修験者。修行の道すがら此処を通り
ただけなのだが如何に。」

「ふむ。こちらにかの総帥様が逃げおおせたらしくな。合いそうか

と罷^{まか}り通す訳にはいかぬのだ。一人ずつ確認させてもらいたいのだが如何に。」

「・・・構わない。」

「有り難い。なに直ぐ済む。緩りと待たれよ。」

D・Wノ-「・・・。」

一人、二人、三人・・・。

「む。貴様、面^{おもて}を上げよ。」

D・Wノ-「・・・。」

致し方あるまい。

天に身を任せるのも一興。

「ふむ・・・貴様似ているな。よもや・・・。」

「この馬鹿者が！」

いきなり飛ばされる罵声と金剛杖。

「貴様が尋ね人と似ているせいで我等が怪しまれるのだぞ！」

D・Wノ-「す、すみませぬ！」

「これ止めい！止めんか！」

「この・・・！」

「止めと言っておる！ええいもういい行け！此処で暴れられては迷惑だ。」

「左様ですか？では私共はこれで。何時まで倒れておる！早く立たんか！」

D・Wノ-「は、はい。」

ふー・・・。

検問を越え一つの崖を通り過ぎたところで巨軀がいきなり沈んだ。

「申し訳ありませんでした！」

D・Wノ-「いやいい。お前のおかげで突破出来たのだからな。」

「いえそれだけでは申し訳が立ちませぬ！斯くなる上は我が命を以つてして！」

D・Wノ-「馬鹿者。出来ぬことを提案するでない。」

「しかしそれでは・・・。」

D・W / - 「分かった！許す代わりに条件を出す。お前が死ぬ時、
そうだな。あの大木のように天を仰ぎ死んでいけ。けて地に伏す
ことは許さない。これでどうだ。」

「その程度で宜しいか！合い承りました。不肖武蔵坊弁慶、死して
尚地に伏さぬことを誓います。」

D・W / - 「うん許した。さあ先を急ごう。もう少し行けば衣川館^{ころもがわのたち}
だ。」

Goodbye “PAST”

カン、キン、グワー！

D・Wノ－「・・・う？なん、だ・・・？」

鉄と鉄がぶつかる音。

次いで悲鳴も響く。

D・Wノ－「・・・なんで俺は横になって！？」

床に転がる死体が二つ。

D・Wノ－「・・・そうか。もう最期か・・・。」

全く、このシナリオを考えた奴はとんだ間抜けだ。

いきなりフィナーレに飛ばすなど趣も何もないではないか。

・・・いや。

女子供を手に掛けるシーンを飛ばしてくれたのなら、感謝しなければならぬ。

D・Wノ－「ふ・・・書物によれば私は此处で戦わず自害であったな。」

外を覗き見ると、既にこちらの軍勢は全滅していた。

弁慶は誓いの通りに散ったか・・・。

転がる太刀を拾い上げ扉を開く。

「む。・・・義経公と見受けるが如何に。」

D・Wノ－「・・・愚問だな藤原泰衡。如何にもこの私が源義経、幼名牛若丸。鞍馬天狗に鍛えられし神童だ。」

「・・・宜しい。済まぬが、その命貰い受ける。」

D・Wノ－「ああいいよ。俺に残ったのはこの体くらいだ。一番の友は死に、臣下達も死に、子に妻を手に掛け、実の兄に殺されようとしている。」

・・・そんな私に残るモノなど、この体だけだ。

「夢から醒めよ義経公。貴殿の英雄譚もこれまでだ。」

D・Wノ－「そうだな。ふ・・・ふふふ。はははは。こんな――」

こんにちは“現実”

D・W / - 「こんな茶番はこれで本当に終いだ！」

d I n / 「ぐわっ！？ぐ・・・がはっ・・・！な、はー・・・何故だ・・・！」

D・W / - 「私の特性に対する理解が甘かったようだな絶者。」
頸動脈を確実に斬った。

ワレラの欠点は、人が死ぬ傷を負えば死ぬこと。

そして、ナイトの呪文にも、B U I T e の呪文にも、回復呪文はない。

致命傷を負えば基本的に死ぬことしか選択出来ない。

D・W / - 「・・・そしてお前は、今現在死ぬことしか選択出来ない立場にある。ふ、皮肉だな。それを理解した時お前に絶望が降り注ぐ。」

d I n / 「・・・殺したところで、私には魂補充がある。ブラジルに飛ばさ、れようが・・・か、げほっ！帰ってくるのは・・・容易い・・・。」

D・W / - 「理解していないな。この街には護り人がいる。貴様程度が突破出来るモノではない。」

逆に、この街から出ることも容易ではない。

d I n / 「ふはははは。私の背後をまだ知らぬから・・・言える。」

D・W / - 「背後なんて関係ない。なんであれ私は深淵に臨み、全てを断ち切るまでだ。」

d I n / 「ははははははは。あいつを見ておな・・・は・・・！？」

D・W / - 「・・・なんだ、これは？」

突如体を包んだ浮遊感。

決して不快感等ではないが・・・ん。

d I n / 「・・・あ、がはは、あ・・・。」

エピソード・快樂に浸る・

ルチアーノは死んだ。

ただその顔は……。

「気持ち良さそうに寝たわね絶者。」

D・W / -「……やはり、君か。」

この浮遊感の前に体験したあれだ。

最初それは、私を殺すべく放たれたモノだった。

が、その時ですらそれは不快感ではなかった。

D・W / -「……ふ。久しぶりだな快樂者。」

「はぁーい醍醐。お久しぶり元気そうでなによりよ。」

……一難去つてまた一難。

いや、前まで生じていた面倒よりさらに複雑なものが舞い込んできたのかもしれない。

プロローグ・賭博の王・（前書き）

賽は投げられた。

不快の境界はむしろ快感、快感の境界はきつと不快。

紙一重の対象同士がぶつかれば中和。

となるわけもなく。

より深く、より濃く、より淵より来たる全てが片方を圧倒し、飲み込み侵蝕する。

世界中にばらまくのは不快か愉快か。

プロローグ・賭博の王

「ふむむむむむ……。」

暗がりに響く悩みの声。

そして宙に浮かぶは二十面体の賽子。

「どうするべきか振るべきか。」

面を向ける数字は“ 8 ”。

これでは確率変動はない。

初期確率のまま振れば、振れば……。

「まあいいか。揺れ動け振れ。」

賽子が真上に弾かれる。

究極的に回転し風を巻き起こす。

やがて回転は緩まり始め、元いた宙へと戻る。

何も無い空間にぶつかり跳ね、そして先程と違う面を上げた。

「あ、はああああああ。」

“ 1 1 ”。

「あああ。」

ザウンツ！

暗がりに一閃光が走り男に直撃した。

ただの光ならば大したことではないのかもしれない。

基本的に人は外に出れば太陽光に晒されるのだから。

ただ、それが電気、所謂雷の場合はその限りではない。

当たれば高確率で死ぬ。

それは、いくら確率が破綻していようが関係ない理だ。

そしてこの男をして例外などではない。

「……いつて。たく落雷とは運がない。これもそれも、ルチア

ーノの野郎が死んだせいだチクショー！……だがだが飛躍的に“

7 ”が上がったくひひひひは。そろそろ……。」

行くか。

来訪者はチャイムを知らない

コンコン。

S・A「チャイムがある。それなのに執拗に扉を叩くのは何故だ？
理解に苦しむ。」

T・O「……そーねー。一体誰かしらね。」

扉が叩かれ始めてから約5分。

音はリズムを保ちながら鳴りつづける。

S・A「……これはあれか、新手のいびりか？俺達はノイローゼ
にさせられるのか？」

T・O「……あはははなにそれ面白いんだけど……あ。」

S・A「馬鹿……。」

案の定、というかなんというか続いていた音は止まってしまった。

来訪者の応答に応じようとしなない理由は二つ。

相手がワレラだから。

そして正体を知らないから。

しかし、居留守がばれたからには出なければなるまい。

S・A「……。」

T・O「……。」

黙ったまま見つめ合う二人。

S・A「じゃん。」

T・O「……けん。」

「ポン。はい貴方達の負けね。」

出された手はチョコキが二つとグーが一つ。

S・A「……どうすればいいんだ？」

T・O「……さ？」

A・A O「私の名前はA・A O。吾桑でいいわ。馴れ馴れしく呼ばれる方が好きよ。さて、客人を持て成す時は礼を以て儀とするモノではないかしら。紅茶とクッキーがあれば私は恐悦の至りよ。」

犬の散歩 - S P S B -

A・A O「それなりの紅茶ね悪くないわ。」

T・O・・・「そりゃーどーも。」

S・A「紅茶を飲むのもいいが用件を述べてもらおうか吾桑とやら。」

A・A O「せっかちなね。男は余裕を余し、女は優雅を持て。私の訓辞よ。余裕のない男は嫌い。」

優雅にティーカップを傾けられると言葉の重みが伝わってくるな・・・。

S・A「ふん。そもそも協力することが稀な存在なんだぞ俺達は。余裕より優先すべきは開示だとは思わないか？」

A・A O「それもそうかもじゃないわね。まあいいでしょう。」

何故こいつはこんなにも上から目線なんだよ。

A・A O「大城妙。特異な体質と特性を持つ女の子。貴女が存在はこの新西市より遙か3000kmまで伝わっているわ。」

T・O・・・「ねーねー聞いた左宇君？私有名な人ね。」

俺達の業界にとって有名になることはむしろ不都合な気がするが。

A・A O「まあ貴女についてはどうでもいいの。」

S・A「なんだそりゃー!？」

A・A O「私が会いたいのは君達のお友達よ。」

T・O・・・「お友達？」

A・A O「才の兄弟、と言えば分かるのかしら。」

兄弟？

兄弟、兄弟、兄弟・・・兄弟で俺達のお友達(?)と言えば・・・。

S・A「もしかしてペルソナ達のことか？」

A・A O「あつらー馴れ馴れしい仲間じゃない。嬉しいわ、いきなり本丸に当たるなんて幸運よ。」

おお・・・いきなり小躍りし始めた。

あ、いや・・・文字通り踊っている。

S・A「頼むから落ち着いてくれ。」

A・A O「ん？あら失敬。嬉しいとつい踊っちゃうのよ。」

T・O・・・面白い人ね。」

A・A O「ありがとう妙。じゃあ早速行きましょうか。」

S・A「は？何処に？」

話の流れからすると・・・。

A・A O「当然才の兄弟の所よ。」

やっぱり。

しかしどうしたもんかね。

S・A「妙はあいつらが何処に住んでるか知ってるのか？」

T・O・・・知らない。」

これだ・・・。

S・A「・・・いや待てよ。今は何時何分だ？」

A・A O「13時5分ね。」

最悪の時間まであと8分か。

S・A「あんた運が良いな。外を適当に歩けば足を掴めるかもしれない。」

13時13分。

あいつが勝手に定めた最悪の時間に、不可視の猟犬が放たれる。

T・O・・・そっか「ワイルド・ハント」か。」

A・A O「ワイルド・ハント」？それがどうかするの？」

S・A「ペルソナは13時13分とか決まった時間に“ワイルド・ハント”で街を見回るんだ。だからその内の一体でも補足出来ればペルソナに会えるだろう。」

ただ“ワイルド・ハント”は走り、命令を遂行することしか出来ないだろうから追いかける必要ならなだろうけど。

ジークフリートやヒルデ、悪魔の類いなら簡単なんだろうが。

T・O・・・捕まえるのは良いけどさ。吾桑ちゃんもペルソナ達になんの用なの。」

A・A O「それについては外を歩きつつ話しましょう。」

S・A「え。俺達も行くのか。」

A・A O「そりゃ勿論よ。さ、行くわよ。」

・・・やはり居留守を通しておくべきだったのだ。

兇悪面相

13時10分。

A・A0「彼の特性に用があるのよ。」

“ワイルド・ハント”が放たれるまで恐らくあと3分。

S・A「特性に？あいつの特性ってなんだ？」

T・O・・・『^{ブックレット}古書』。ルビで分かるかもしれないけど説明書みたいなものよ。」

S・A「説明書？」

A・A0「彼の持つ本は全てが記述してあるそうなのよ。」

T・O・・・「私も見たことないからこれ以上は知らないわ。」

13時12分。

S・A「ふーん。ところで聞きたいんだが、あんたは見返りを用意してるのか？基本的にあいつらは益がなきゃ動かないだろ。」

A・A0「・・・あれを倒すのがこの世の益になるから大丈夫。貴方達にも関係あるのだから、貴方達に対する見返りもそれで許してね。」

S・A「？」

T・O・・・「いいのいいのよ。私はともかくこの子はお人好しの。」

A・A0「あらそうなの？寛大な男って好きよ。愛の対象ね。」

S・A「・・・そりやどうも。」

13時13分・・・ん？

S・A「・・・なあ。あれは・・・“ワイルド・ハント”ではないよな。」

T・O・・・「子犬じゃなくてでっかいワンちゃんね。」

A・A0「・・・というか、所謂地獄の番犬ね。」

“スロトル・オロスケル・ハウンドヘルベ”。

アホみたいに長い呪文により出現させられたワンちゃん・・・と形

容するには兇悪過ぎる面だな。

ケル「グルルルル・・・。」

S・A「・・・どうする？」

ケル「どうするもなにも俺に用があるんだろ？」

S・A「な！」

犬が喋った！

ケル「『意志疎通？』を通じて話しかけてるんだよ。」

A・A0「ということは300m圏内にいるのね。」

ケル「快楽者かなんの用だ。」

A・A0「此処で話さきやいけないの？そんな無粋なことをさせる人なのかしら貴方は。」

ケル「ははは良いだろう着いてきたまえ。」

理由は単純明快刀乱麻

P 4・D 1「ようこそ左宇に妙それに快楽者。」

S・A「よう。何故そんな強そうな奴を控えている。」

E 2・D 1「着いてこいとは言ったけど本当にそのまま着いてくるなんて思わなかったよ。」

場所は郊外の空き地。

人通りは皆無で、薄暗い。

そしてペルソナの背後にはおよそ人とは似ても似つかない異質な存在が控えている。

P 4・D 1「はーわざとだろ君達。」

E 2・D 1「良くないものが着いてきているようだからね彼の部屋に招待しようと思つて召喚しておいたんだ。」

T・O・・「キマリスね。一体何処に行くのかしら？」

P 4・D 1「彼の書庫さやってくれキマリス。」

キマリス「了解した。文化の遺産。666の軍勢、全ての智慧が詰まる家屋。無限の回廊に無数の螺旋。連なる階は塔より劣り5連。

然りとて劣るはずもなく、叡智を受け継ぐ狼煙は上がる。ヴィヴリオスキー“図書館

”。

S・A「ツ……！眩しいな……。」

P 4・D 1「我慢しろ。」

段々光が引いていく。

そして、現れたのは大量の本棚とそれを埋める大量の本。

本革や羊皮紙、パピルスの匂い。

インクの匂いがそれらを纏め素晴らしい香りになっている。

キマリス「善くぞ来た我が書庫に。では私は本の整理をしているので帰る時は呼んでくれ主よ。」

P 4・D 1「ああ。」

キマリスは『幻影化』して何処かに行ったようだ。

P 4・D 1「さあ座つてくれ話を聞こうじゃないか。」

A・A 0「どうも。」

S・A「茶か何かは出ないのか？客人を持って成す時は礼を以て儀とするモノだと思ふんだが。」

まんま受け売りだけど。

E 2・D 1「僕たちが招いてあげたんだこの場合むしろ君達が菓子折りの一つでも持参するべきだったと思ふんだけど。」

A・A 0「確かにそうね。じゃあここは一つ、悦楽に浸らせてあげるといふのはどうかしら？」

P 4・D 1「殺さない程度になら許可しよう。」

E 2・D 1「僕らの話し方も戻るかもしれないけどね。」

どういう意味だ？

S・A「なあ妙・・・ってあいつどこ行つた？」

A・A 0「散策に行つたみたいよ。」

・・・まあ大丈夫か。

A・A 0「じゃあやるわね。ついでだから左宇、君も誘つてあげ・る。」

S・A「は？いやちよつと待て何する気だ——」

A・A 0「『^{エビスミニア}快楽主義者の空^{ウラノス}』。」

S・A「う・・・あ・・・？」

P 4・D 1「く・・・。」

E 2・D 1「・・・。」

なんだこれは・・・？

からだがとける・・・いやとろけるとけいようしたほうがただしいか。

けしていやな感じではない。

たが・・・これは・・・！

A・A 0「はいお終い。」

S・A「ぬはっ！？はあ・・・はあ・・・。」

P 4・D 1「つく・・・。」

E 2・D 1「ふー……。」

・・・思考がしっかりと構成できる。

S・A「い、今のはなんだ？」

A・A 0「私の特性。『快樂主義者の空』は対象を幸せて以て溺死させる。ただ度が過ぎなければただの麻薬みたいなもんだから安心して。」

いや・・・それは安心出来ないと思うんだけど。

P 4・D 1「噂に違わぬ特性だ。堪能させてもらった。」

E 2・D 1「確かに。なんたって僕らが常人の域に落とされたんだからね。」

S・A「お、話し方が普通になったな。」

P 4・D 1「普段の話し方は言わば常人と俺達の線引きさ。」

E 2・D 1「常人ならざるを演じるにあたり、一番簡単なのは他との判別だ。普段の話し方は、僕らの常を形作るに最も容易なことなんだ。」

それであんなおかしな喋り方が出来上がったのか。

関わる側からすればとんだ迷惑だ。

P 4・D 1「ふむよろしい。話を聞こうか。」

A・A 0「どうも。貴方、ペルソナの特性を借りたいの。」

P 4・D 1「俺の特性を知っているのか？」

A・A 0「『古書』。」

E 2・D 1「ははは。兄も随分と有名になったものだね。」

P 4・D 1「確かにな。それを何に使わせる気だ。」

A・A 0「あらら噛み付くわね。詰まらないことには使わないから安心なさい。」

吾桑がティーカップを傾け……。

S・A「・・・何で紅茶を。」

A・A 0「あらーん気づいてないの？そこのそれ見なさいな。」
これは・・・メニュー？

黒い本草の分厚い本を開くと、びっしり、そうびっしり余すところ

なく飲み物の名前が表記してある。

S・A「・・・これを読むと注文出来るのか？」

P4・D1「そうだよ。タダだから飲みまくるといいさ。」

S・A「・・・。」

水だけでも100くらいあるんじゃないかこれ？

S・A「ん？新西市の茶があるじゃんこれでいいよ。」

と、机の上に湯呑みとそれに注がれ湯気を立てるお茶、それに加え急須、更に煎餅まで現れた。

S・A「・・・ほー。これはなんとか塗りの湯呑みですな。」

E2・D1「無理に博識ぶらなくていいよ左宇。大体それ市販されてるものだし。」

・・・気の使いすぎは時に自らの恥を招く。

A・A0「よく話が逸れるわね。」

P4・D1「何時ものことさ。続けてくれ。」

A・A0「私がしたいこと。しなければいけないこと。あいつを殺す。ただそれだけのことに使っただけよ。」

ラッキー7の由来は野球

宙に浮かぶ二十面体。

面を向ける数字は“11”。

「“7”が10/20。これを振らずして何時振るのか。」

揺れ動け振れ。

賽子が真上に弾かれる。

究極的に回転し鎌鼬を巻き起こす。

やがて回転は緩まり始め、元いた宙へと戻る。

何もない空間にぶつかり跳ね、そして先程と違う面を上げた。

「あーっはははははははははははは！最近さ、ついてなかったんだよ！久しぶり、久しぶりだな“7”！」

空き地だったなあははははは。

あれは確かキマリスとか言う悪魔だったかなあ。

あいつが唱えたということはなんだ？

「んんんんんん．．．3回か．．．。仕方ない。解除してもいいけどどうせなら俺も行きたいもんな。解析と侵入と攻撃．．．か防御か。いや．．．侵入と防御と攻撃！これこそ最上ゴールデントライアングルみたいな？あははははははははは。」

そうと決まればさっさと行動。

人工的地震

S・A「・・・殺すために？」

A・A0「そうよ。」

P4・D1「誰を殺すか知らないが。」

クイツとウィングラスを傾けるペルソナ。

E2・D1「僕らは基本的に他人の戦いに介入する気ないよ。」
ひょいっと口にチーズを放る秀一。

A・A0「知ってるわよ。」

そして静かに二人を見据える吾桑。

なんか一気に空気が凍ってしまったな。

A・A0「あいつを殺すことは貴方達にとっても得になる。そう言っても協力する気にならないかしら？」

P4・D1「そう言われてもね。」

E2・D1「あいつって誰なんだよ。」

A・A0「・・・うふふ。そろそろ来るかもしれないわね。」

S・A「は？ったあ！？なんだあ！？」

空間に振動が走る。

P4・D1「キマリス。」

キマリス「どうした主よ。」

『幻影化』していたキマリスが実体に戻り出てきた。

P4・D1「もしかして侵入者か？」

キマリス「うむそのようだ。」

落ち着き過ぎだろ。

A・A0「・・・来たみたいね。」

E2・D1「はあ。君がわざと付けさせた奴かい？」

A・A0「そのようね。」

P4・D1「一体誰だよ『図書館』に入ってこれる奴って。シャツクスミたく解除するなら分かるが、侵入なんて今まで一度もなかつ

ただろ。」

キマリス「撃退するのか主。」

P4・D1「……今は何処に？」

キマリス「まだ入り口付近だ。入りきれていないようだな。」

思案すること約1秒。

P4・D1「とりあえず様子見でいい。此処に侵入するような奴だ。相当なはずだからな。」

キマリス「承った。」

キマリスが消えるのと同時に振動も収まった。

E2・D1「完璧に入ってきたみたいだね。」

一体誰なんだ……あ。

S・A「おい……妙はまだ戻ってないよな!？」

E2・D1「そういえばそうだね。」

まずいんじゃないかいくらあいつでも……。

P4・D1「……今キマリスが見つけた。妙は無事だ。」

S・A「そ、そうか。ッ!？」

再び振動が走る。

いや……さつきよりも激しい。

そして直ぐに収まった。

P4・D1「……。。。」

S・A「……ペルソナ？」

珍しい、というか初めてだなペルソナの驚いた顔なんて。

E2・D1「兄?」

P4・D1「……やめろ。帰ってきていいぞキマリス。ついでに妙を連れて来てくれ。」

一体なにが起きたんだ?

護りを堅めよ

「ふーーーーーん。こりゃ凄い。さすがに図書館と言うだけはある。」

ペルソナがキマリスを入り口に向かわせる1分前。

「こりゃーーーーいいや。見て回りたいくらいだ。」
お。

「おおおそうだそうだ。防御しなきゃ。」

キマリスが入り口に着く10秒前。

既にキマリスは侵入者の姿を目に映していた。

「キマリスか強そ。来い“絶対防御神”。」

キマリス「ふん。下衆なる侵入者め。殺されても文句を言っマヒデウスなよ。
桎梏しごくの力。ただ単純に圧倒し壊す。“戦闘神”。」

巨軀を駆り、召喚した大剣を振るうキマリス。

「きゃー怖い。」

それを前にして尚ふざけた態度を崩さず、避ける動作もしない侵入者。

当然の如くキマリスの“戦闘神”は侵入者を切り裂く。

予定だったはず。

再び空間に走る振動。

キマリス「・・・これは驚きだ。」

砕けたのは“戦闘神”で、侵入者は傷つかず、眼前の空間に若干の痺れを来ただけであった。

「手荒い歓迎だな。分かるよ。畏怖の対象には全力を以て対処しなきゃね。でなきゃ飲み込まれるのは手前だからな。」

キマリス「ふん。人間ごときが嘗めるなよ。真桎梏の力。ただ単・・
・は。承った。」

「あれ行っちゃうの？」

キマリス「貴様も来るんだよ。主が呼びだ。妙！妙は何処だ！」

T・O・・・「・・・にや？ふあああああ。ん？なに？」

「たえ？たえたえたえ妙かもしかして？」

T・O・・・「は？・・・なんであんたがいるのよ。」

キマリス「知り合いか？」

「あはははははは。知り合いつて程じゃないけど。」

T・O・・・「そうね、出来ることなら今すぐ殺したいんだもの。」

「俺は歓迎なんだけどなあははははははは。」

キマリス「うーむ。まあなんでも良いわ。主が待っている。さっさと行くぞ。」

「ほーほー。オの兄弟と妙と快楽者は知ってるけど、も一人の男は知らんな。」

S・A「S・Aこと阿部左宇だ。残念ながら俺もお前のことなんて知らんな。」

A・A0「こいつの名前はVe・IE。ヴール、不快者とも呼んであげなさいな。」

Ve・IE「時に左宇よ、あれのことはストーカーと呼ばれたまえっははははは。」

E2・D1「まさかとは思っただけさ快楽者、殺したい奴ってヴールのことなのか？だとしたら、なあ兄。」

P4・D1「ああ。笑えないどころか場の空気を絶対零度まで叩き落とす今世紀最高で最低最悪な冗談だ。」

T・O「あはははははにそれ矛盾してるー。」

A・A0「良かったわ、笑ってくれる人が居て。」

P4・D1「だから・・・。」

E2・D1「冗談になってない。」

S・A「とりあえず落ち着けよ2人共。」

T・O「そーよー落ち着きなさいよ。私この紅茶ね。」

P4・D1「それグラム数十万な。液体だが噛み締めて——」

T・O「プハー。おいしーお代わり。」

E2・D1「・・・笑えない事案が増えたね。ストックが空になる前に話を進めよう。」

Ve・IE「俺を殺す算段をかつはははははは。」

A・A0「その通りよ不快者。」

E2・D1「冗談じゃないって言ってるだろ。」

P4・D1「俺達は関わない。大体快楽者、俺達にとって得だと言っただが真逆じゃないか。」

T・O・・・「そ〜ねー。私も賛成しないな。わざわざ特権解除するなんてアホのやることよ〜。」

A・A0「あらあら敵だらけね。私はただ自然の摂理をこの上なく愛しているだけよ。」

Ve・IE「ふ。世界の変化に着いていけずにいるくせに。」

A・A0「煩いわね不快者。」

Ve・IE「あはははははははははは。あ、俺はこの緑茶を。」

P4・D1「それはグラム数百万だ。味わ——」

Ve・IE「もう一杯だ。」

P4・D1「・・・頭痛がしてきた。」

E2・D1「気をしつかり兄。」

T・O・・・「ん〜もう一杯。」

A・A0「確かに此処のお茶は美味しいわね。もう一杯。」

S・A「茶なんて値段くらいしか変わらんだろ。お代わり。・・・
ってそうじゃない！茶のことはどうでもいい。」

T・O・・・「落ち着きなさい。」

S・A「落ち着いてられるかよ。俺以外は事情を分かっているなんて気持ち悪いわ！」

A・A0「確かにそうね。じゃあ私が説明してあげる。ここからモノローグ入りまーす。」

S・A「・・・は？」

モノローグ・世界の在り方・

『通常の輪廻』。

世界で死ねば魂は循環し、次の外枠にはめ込まれ世界に戻る。

それは人であつたり犬であつたり、はたまた木である時もある。

でもそれが世界の理であり自然の摂理である。

魂は死なない。

外枠はいくらでも滅びていくが、再び精製され、廻ってきた魂が入り込む。

それが輪廻の本来有るべき姿なのである。

しかし何時の日からか輪廻は『曲解の輪廻』に変わってしまった。
オムニス ベリオリスモステッラ

突然現れた『全てを束縛する国』によつて。

それは世界の特性で、この世の不快により保たれている。

話をすつ飛ばすと、その不快こそがV e・I Eなの。

彼を殺せば『全てを束縛する国』は消滅する。

それにより私たちワレラという存在も消え、この世に『通常の輪廻』が戻ってくるの。

会話収束

S・A「ふーん。そりゃ反対するわな。」

T・O「うんうん。」

P4・D1「何故それが俺達の得になるかを簡潔に述べろ。」

A・A0「あらん、曲がつているより真っ直ぐな方が気持ちいいでしょ？貴方にとつても、私にとつても、世界にとつてもね。」

E2・D1「曲がつた根性どんと来い、直進よりS字カーブのが好きな人もいるんだよ。」

P4・D1「その通り。」

T・O「私も。」

Ve・IE「快楽者はさ、兄弟になに頼もうとしたんだ？」

A・A0「あんたの特性を見てもらおうと思つたのよ。」

Ve・IE「あははははははなんだそんなことか。なんなら今ここで披露してあげようかつはははははは。」

P4・D1「遠慮だ馬鹿。貴様を殺しはしないが歓迎もしていないんだ。鬱陶しいから帰れ。」

E2・D1「その通りだよ不快者。自発的に帰りたくないなら腕ずくで叩き出すよ。」

T・O「そーねー。私もあんたは嫌いだからさっさと消えて。」

S・A「めちゃくちゃ嫌われてるな。同情はしないけど。」

A・A0「私は抹殺したいんだけど。」

Ve・IE「ひつでえな皆。」

A・A0「ふん。自分の立場も分らない奴は死んで構わないわ。」

Ve・IE「まあいいさ。お前らに用があるわけじゃないからな。本命は他にあるんだからなはははははは。」

P4・D1「キマリス、客が帰る。扉を開けてやれ。」

キマリス「はいはい。」

キマリスが指を鳴らすと扉が出現した。

V e . I E 「サanky。じゃあ俺は深部に会いに行くから。快樂者、殺したかったら何時でも来な。あはははははははははは。」
不快な笑い声を残しヴユールは出ていった。
・・・5つの死体を残して。

寛ぎの死地

P 4・D 1「ち・・・あの野郎。」

E 2・D 1「さすがは不快者だね。」

S・A「あんなもん人間が耐えるのは無理だろ・・・。」

あいつが出ていく瞬間放ったのは巨大な水晶の柱3本だった。

床や本棚は破壊せず、俺達だけを押し潰していきやがった。

T・O・・・「あいつの特性って『確率破綻の国』よね？偽装空間に入るのと、回避不能な攻撃を打ち噛ますことがそれなの？」

A・A 0「いーえ、違うわ。あいつの特性は賽子なのよ。」

P 4・D 1「二十面体の賽子を出すのが基本的な効果。振る度に悪いことが起きる。」

E 2・D 1「そして面毎に起きることが違う。基本的に害になることしか起きないけどね。」

P 4・D 1「ただ、快楽者。」

A・A 0「ん？」

P 4・D 1「有りがちな展開だが、俺の『古書』を以ってしても奴の賽子がなにを起こすかは分からない。全く以って忌ま忌ましい奴だ。」

S・A「絶対そういうチートキャラが出てくるよな。」

A・A 0「仕方ないわよ。予想はしていたからね。」

投げ所の椅子に座り紅茶を飲む吾桑。

いや、吾桑だけでなく俺達も寛いでいる。

S・A「なんでこの一角だけ豪華なんだ？」

T・O・・・「言わばVIP席よ」。5、6、11、21、25位がいるんだからこれくらい当然よ。」

P 4・D 1「ま、ネタバレすると俺が用意したんだ。」

E 2・D 1「僕らは結構送ってるからね。常連だし、確かにVIPだね。」

A・A0「・・・ふー美味しかった。さ、帰りましょー。寛ぐのは嫌いじゃないけど、今は新西市のが良いわね。」

P4・D1「帰るのは構わないさ。けど確認しておくことがある。」

S・A「ルチアーノの居場所か？」

E2・D1「なかなか鋭いね左宇。その通りさ。」

とは言うものの、此処から受付まで300mくらい離れている。直ぐに帰るとはいきそうにない。

T・O・・・「それが行けるのよー左宇くん。」

S・A「は？どうやって？」

P4・D1「快楽者。」

E2・D1「分かってるよね。」

二人「君が面倒を持ち込んだんだぜ？」

A・A0「分かってるわよ。でも私は魂補充払うなんてことしないから。」

P4・D1「『快楽主義者の空』を使う気か？別にいいけど受付は喜ばないぞ。」

A・A0「んふふ。快楽に浸ればそんなこと言ってらんないわー。」

勢いよく立ち上がったかと思うと吾桑は、長く続く列をまるで無い物の様に無視し前へ前へと突き進んで行ってしまった。

S・A「お、おいおい！良いのかあれ？！」

T・O・・・「良いのよー。私たちも行くわよー。」

妙も歩きだし、ペルソナ達は既に行ってしまったている。

S・A「・・・信号無視とポイ捨て、横入りはしない主義なんだがな。」

どうもどうもと頭を下げつつ列を抜かしていく。

A・A0「遅いわよ左宇。」

S・A「恥知らずの恥を被ってきたんだよ馬鹿。・・・ってなにしてんだ？」

受付が酔ったようにふらふらしている。

そっぴやさつき特性がどうのここの言ってたような。

S・A「『快樂主義者の空』を使ったのか？」

A・A0「ええそうよ。さあ受付？その気になったかしら？」

受付「わかった、わかったからやめろかいらくしゃ！これじゃまともにてつづきが来らん！」

A・A0「解いたわ。早くしてちょうだい。」

受付「全く……。新西市の空地、だっけ？」

P4・D1「あ、ちよつと待った受付。」

E2・D1「絶者が何処に出されたか教えてくれ。」

受付「ああ？絶者？D・W／－に言われてブラジルに送っておいたよ。まだブラジルにいるみたいだ。」

そりゃいいや。

一生ブラジルで過ごしてほしい。

P4・D1「ブラジルか。この国より遙か裏側だな。」

E2・D1「結構無理したんじゃないかD・W／－。」

受付「そうだね。100くらい貰ったよ。」

T・O・。「ひゃゝ払ったわね！。」

S・A「俺じゃ借金になっちまうな。」

A・A0「はいはい、話逸れてるわよ。受付、早く送りなさいな。」

受付「分かったよ。『原点回帰』対象“S・A”“T・O・。”“

P4・D1”“E2・D1”“A・A0”。じゃあな5人。」

宿無し芳一

キマリス「む。おお帰ってきたか。」

P4・D1「や、キマリス。留守番ご苦労。」

キマリス「あの程度で死んでしまうとは、人間は脆弱の極みよのお。」

「

E2・D1「君と一緒にしないでくれキマリス・ソロモン。大体、あの水晶は人間だけに作用してみたいだぞ？」

P4・D1「召喚体であるお前はスルーされてなかったか？」

キマリス「されたさ。詰まるところ、あれを防ぐのは主達じゃ不可能ってことだ。“千刃の谷”を放とうが“ステーキ・ネスダク”を放とうが、“戦闘神”だろうが恐らく通過するだけであろうからな。」

E2・D1「だろうね。まあ今回は快樂者が居たおかげで口八で新西に来られたからいいけど。」

再び図書館にて談笑。

みんなの前には同じティーカップがあり、同じ紅茶と、同じ分量の砂糖と牛乳が混入している。

P4・D1「入っている、と言えよ左宇。毒物じゃないんだから。」

S・A「済まん。ま、それは置いといて、吾桑はこれからどうすんだ？」

A・A0「そうね。ヴールを探すのは時間が掛かりそうだし、宿が欲しいわね左宇？」

いやなんで疑問文なんだ。

そして俺に振るな。

A・A0「宿が欲しいわね左宇！」

S・A「エクスクラメーションマークに変えても変わらん。」

T・O「……いいわよ。家に泊めても。」

S・A「……いいのか？あの変な奴が襲撃してドカン、ってなこ

とはないのか？」

T・O・・・「さあ？」

いや、さあ、って。

A・A O「その点は心配ないわよ。今日みたくあいつ自身が攻めにくるなんてかなり稀よ。」

伊達に奴を狙ってないな。

心強いと言えばそうだが・・・。

A・A O「ま、奴の特性に巻き込まれて死ぬ場合はあるけどね。世界のどこに私たちがいて、世界のどこに奴がいてもその可能性はあるから、それは私の責任じゃないわねーおほほほ。」

P 4・D 1「俺達はさっきも言ったが干渉しない。」

E 2・D 1「するにしても遠くから眺めるくらいだ。」

S・A「つまり？」

二人「君達だけでなんとかしろ以上。」

これ以上此処に居てほしくない、ってことか。

S・A「はー。分かったよ。家主は妙だ、おれはそれに従う以上。」

A・A O「良い心掛けね。さあ善は急げよ行きましょ。」

先が思いやられるよ全く。

釘付けニュース

TV1「現地は騒然としております！隕石が市を覆い尽くし、地面は穴だらけ、軒を連ねていた家屋は殆どが倒壊しております！」
ピッ。

TV2「えーこちら現場です。1時間程前に降った剣は総数百万本以上、死者多数。現場は悲鳴と血の臭いに包まれております！」
ピッ。

TV3「今日午後3時過ぎ、京東市の民家が一軒炎上しました。現場は火の気がなく、出火原因は分かっているようです。」
ピッ。

アナ「今日は、某某大学災害研究科の星鯰^{ほしぼら}山太教授にお越しいただきました。星鯰教授よろしくお願ひします。」

アナ「では先ず最初にアフリカを水没させた災害についてお聞きしましょう。」

星鯰「そうですね。あれは海水ではなく淡水でした。考えられる原因として――」
ブンッ。

どこもかしこも同じ様な特番しかやっていない。
世界中で起きている災害・・・のようなモノと不思議現象についてだ。

Ve・IE「まあ原因は全部俺なんだけどねはははは。」

目の前に座る不快者がケタケタと笑う。

D・Wノ・「ふん。相変わらず妙な笑い方をするな不快者。私の時代にそんな奴は居なかった。」

Ve・IE「お前の時代って800年くらい前じゃん。比べるほうがおかしいだろはははは。」

・・・全く、人を不快にさせるならこいつの右に出る奴はいないな。

そつだ学校見学へ行こう

月曜日。

朝の7時30分、基本的に学生は出かねばならぬ。

S・A「俺達は学校に行くが？」

A・A0「あらーガツコ！懐かしい響きね。私も行くわ。」

・・・まあ正か負になつてれば見えないからいいかな。

T・O・・・「ふあゝ。」

妙があれだし連れていった方が良さそうだ。

吾桑はああ言つたが、ヴュールが100%襲つてこないとは限らないからな。

S・A「オーケー行こう。」

A・A0「わーいレッツゴー。」

扉を閉め鍵を掛け門を閉め鍵を掛ける。

立ちながら眠る妙を引きずりながら歩いていく。

時々自転車に乗った生徒が、男子はマイナスな視線を、女子は好奇

の視線をそれぞれ向けつつ俺達を追い抜いていく。

S・A「・・・聞いていいか？」

A・A0「何かな？」

S・A「なんであんたはヴュールを殺して、えーっとなんだっけ、
全てを・・・。」

A・A0「『全てを束縛する国』。」

S・A「そうそれその国だ。を壊したいんだ？」

A・A0「・・・昨日私が言ったことを聞いてなかったのか、それとも覚えていないのか、若しくは私の美貌に酔いしれていたのか、
どれかしら？」

S・A「どれでもない。あんたは『曲解の輪廻』を通常に戻したい
んだろ？」

A・A0「そうね。分かっているなら聞かないでもらえるかしら。」

S・A「まあ落ち着いて聞け。壊したら俺達はもうワレラじゃなくなる。だよな？」

A・A O「ええ。」

S・A「あんたは死んだ時、生きたい理由があったからワレラになれたんじゃないのか？それはもう達成出来たから、もうさっさとこの世とバイバイしたい。だから国を壊すのか？」

A・A O「矢継ぎ早に質問するわね左宇。余裕を余してほしいわ全く。まず第一の質問、確かに生きたい理由はあった。それは未だ達成出来ていない。だから第二の質問は答えられないわね。」

S・A「それより先に踏み入っていいか？」

A・A O「第三の質問ね。ホント、聞くのが好きなのね左宇？」

S・A「茶化さないでくれ。」

A・A O「じゃあダメ。」

じゃあつてなんだよ……。

コイツは一体何を考えているか全く読めない。

A・A O「いいじゃない、私が生きたい理由なんて。君には関係がないし、君じゃ達成出来ない。」

つまり話す価値がないってことか。

A・A O「つて別に手伝いたいから聞いた訳じゃないよね。そこまでお人好しな訳ないし。それじゃ生きていけないよ。」

S・A「分かっているよそれくらい。よし！この話は終わり。」

学校に着いてしまったし、これ以上プライベートに踏み込むのは野暮だ。

A・A O「じゃ、私は適当に見て回ってるね。」

S・A「おう。」

さ、俺は詰まらない授業に付き合おうとするか。

……俺は知らなかった。

あいつを、吾桑を学校に連れて来たのは間違いだということを、俺はまだ知らなかった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3558y/>

JETBLACK-P.D.G-

2011年12月2日19時51分発行